F83-G57-4ウ
1200500765336

Вечера На Хутори

ゴーゴリ作

ディカーニカ近郷夜話

平井肇訳

Николай Васильевич Гоголь

始

F83
G57-4
(1)

ディカーニカ近郷夜話

平井肇訳

霞ヶ関書房

目次

はしがき……五
ソロチンツイの定期市……一五
イワン・クバーラの前夜……七三
五月の夜（または水死女）……一〇五
紛失した國書……一六五
譯註……一八八
解題……一九二

國立圖書館
昭和 23.11.1
購入

はしがき

『まつたくこれは奇態な本だ、(ディカーニカ近郷夜話)か？　いつたい(夜話)とはなんだらう？　何處かの蜜蜂飼かなんかがこんなものを世間へ發行しをつて！　お蔭さまなことだよ！　羽根ペンを推へるのにどれだけ鷲鳥を裸にし、紙を漉くのにどれだけ襤褸くづをつかつたら堪能ができるのだらう？　貴賤の別なく猫や杓子までが見やう見眞似で、やたら無性に墨汁へ指を突つこんでも、まだ足りないのだ！　あげくの果てには、こんなどこの馬の骨とも分らない蜜蜂飼風情までが、柄にもなく變な野心をおこすのだ！　まつたく、かう碌でもない活版刷の反古ばかり矢鱈に殖えた日には、一體これをなんの包み紙につかつたものやら、おいそれと考へつくことも出來やしない。』

かういつた横槍が飛び出すだらうとは、もう一と月も前から、ちやんと感づいてゐたことなんで！　いや、まつたくこちとらのやうな田舍ものにとつては、この井の中から世間さまへ顏を突きだすといふことが――どうもはや！――よくある奴で、ちやうど立派な旦那がたのお邸へ戸惑ひして足をふんどんだのと頓とひとつで、人々がぐるりをとりまいて直ぐにからかひだす。それも奥む

きの奉公人でもあらうことか――ぼろぼろの服裝をして裏庭で土いぢりでもしてゐさうな小穢ならしい小僧つ兒までがいつしよになつて、四方八方から足を踏みならしながらがなりだす。『何處へのこのこと迷ひこんで來やがるのだ？　いつたい何をしに來やがつたんだ？　さあ出て行け、このどん百姓めが、とつとと出てうせやあがれ！』つてんで……實際の話だが……。いや何も言ふがものはない！　まつたく、このわしにとつては、廣い世間さまへ顏出しをするよりは、年に二度ミルゴロドへ出むく方がよつぽど安易なんで、ところが、そのミルゴロドの地方裁判所の監督書記にも、あすこの偉い和尙にも、もう五年このかた頓と會はないやうな次第でな。――したが、いつたん顏を出したからには、泣いても笑つても一通りの辯疏はしておかずばなるまいて。

さて、親愛なる讀者諸子よ、――いや飛んでもないことを申して御免なされ、（若しかしたら、こんな蜜蜂飼風情があなた方にむかつて、まるで自分の仲人か敎父でも話しかけるやうな、不躾けな物の言ひ方をするのをさぞかし御立腹になるかもしれませんが）――われわれの部落では昔からのならはしで、野良仕事がすつかり片づくといふと、待つてゐたとばかりに百姓たちは長の冬ぢゆう、のうのうと體を休めるために煖爐の上へ這ひあがり、手前ども同業者仲間はめいめいの蜜蜂を暗い土窖へかこふのぢや。その頃になると、もう空には一羽の鶴も姿を見せず、枝には梨の果ひとつ殘つてはゐない。が、その代り、夕方にさへなれば必らずどこか往還のはづれに灯影がさして、

笑ひ聲や唄聲が遠くまでも聞え、*バラライカや、時にはヴイオリンの音までが漂うて來る。がやがやといふ話聲や騷々しい物音が傳はつて來る……。これがわれわれ仲間の所謂（夜會）なんでな！　まあ言つて見れば、あなた方の舞踏會に似たやうなものではあるが、さうかといつて、まるきり同じものだとも申しかねる。あなた方が舞踏會へお出かけになるのは、いはば足をふらふらさせたり、口に手をあてて、そつと欠伸をなさらうために他ならないが、われわれの方はさうではない。てんでに紡錘や麻梳を持つた娘たちが先づ一軒の家へどやどやと寄りつどふ。そして初手のあひだは、どうやら一生懸命に仕事に身をいれてゐるやうで、紡錘はビイビイ唸り、唄聲がはずんで、娘つこたちはめいめい傍目もふらぬ有樣なのぢや。ところがそこへヴイオリン彈きをつれた若い衆連が不意に押しかけて來ると同時に――どつといふ叫び聲があがつて、とてつもない馬鹿騷ぎが持ちあがり、踊りが始まり、なんともはやお話にもならぬ惡戲がおつぱじまる始末なのぢや。

だが、何よりも嬉しいのは、一同がひしひしと一と塊りに寄りたかつて、謎々を解いたり、または單に――無駄口をたたく時ぢや。いやどうも、何か一つとして口の端にのぼらぬやうなことがあるだらうか！　古い昔話といふ昔話が一から十まで蒸しかへされるのぢや！　ありとあらゆる怖ろしい怪談が持ちだされるのぢや！　したが、かくいふ蜜蜂飼ルードゥイ・パニコーのところの夜會で語られたやうな珍談奇話に至つては、先づほかでは聞けないぢやらう。時にどうして部落の連中

がこのわたしに（赤毛の旦那）などといふ渾名をつけたものか――頓とどうも合點がいかん。わたしは、髪の毛だつて今では赤毛どころか白髪の筈ぢや。しかしわれわれの仲間では、いつたん渾名をつけられたが最後、泣いても笑つても、それが未來永劫に亙つて用ゐられるのがならはしなんでな。それはさて、よく祭禮の前夜などに、堅氣な人たちがこの蜜蜂飼の荒ら家へお客にやつて來て、卓をかこんで席につく――さうなつたら、ただもう耳を澄まして聽き入るよりほかはないて。それもその筈で、集まつて來る人々はといへば、どうしてどうして、そんじよそこいらの十把ひとからげの水呑百姓などではなく、この蜜蜂飼などよりぐんと身分の高い人々にさへ、訪問を受けるのが肩身の廣いやうなお歴々ばかりなのぢや。早い話が、あのディカーニカ寺院の役僧、フォマ・グリゴーリエヰッチを御存じでがせう？　いやどうして、素晴らしい人物で！　あの人が實に面白い物語を聽かせてくれたものぢや！　この小冊子の中にもそれが二つ載つてをる。この人は、よく田舍寺の役僧などが著てゐるやうな縞柄の褞袍などは決して身につけてをらん。それどころか、たとへ平日に訪ねて行つても、いつも、片栗粉でつくつたキッセリの冷たくなつたやつのやうな色あひの、薄手の羅紗で仕立てた寛衣をまとつてお客を迎へるがの、その生地はボルタワで一アルシン六留からだした品ぢや。また、この人の穿いてゐる長靴がつひぞ樹脂臭かつた、などといふ者は村ぢゆうに一人もゐないどころか、そんじよそこいらの百姓だつたら大喜びで粥へ入れて食ふや

うな、飛びきり上等の鵞鳥脂で自分の靴を磨いてゐることは隱れもない事實なのぢや。それにまたあの人と同じ役柄の人たちがよくするやうに、寛衣の裾で鼻を拭いたりなぞするところを見た者も、誰ひとりない。あの人は何時もきまつて、きちんと折りたたんだ、緣に赤い糸で刺繍をした眞白な手巾を懷ろから取り出して、然るべく用を足すと、またもやそれを几帳面に十二折りに折りたたんで、懷中へ仕舞ひこんだものだ。ところで、お客の一人に……いや、この人物は衣裳さへつけさせたら、てもなく陪審員か裁判官と見紛ふほどの貴公子であつたが、よく、かう、鼻の前へ指を突つ立てて、その指の頭を見ながら喋りだしたものでな――それがまた恐ろしく美辭麗句の羅列で、まるで活版に刷つたものでも讀むやうな鹽梅式なのぢや！　それをおとなしく、じつと聽いてゐるようものなら、いつか此方がふさぎの虫にとり憑かれてしまふくらゐで。何が何やら、ぶち殺されたつて解るこつちやない。いつたい何處からあんな文句を寄せ集めて來たものだらう？　或る時、フォマ・グリゴーリエヰッチが實に穿つた一日話をこしらへて、この男をあてこすつたものぢや。といふのは――さる役僧について讀み書きを習つてゐた一人の學僕が、おつそろしい拉典語きちがひになつて父親のところへ戻つて來たが、こちとらのつかふ正教の言葉さへ忘れてしまつて、どんな言葉にでも（ウス）といふ語尾をつけないと虫がをさまらず、悲鋤をロパトウスだの、女をバブウスだのと言ふ始末。ところで、或る日のこと父親とつれだつて野良へ行きをつたが、この拉

典語先生、ふと熊手を見つけると、父親に向つて、『これは、お父さん、こちらの言葉ではなんとか言ひましたつけね？』と訊ねたもんぢや。そしてぽかんと口を開けたまま、熊手の爪のところを足で踏んづけをつたと思ひなされ。すると、父親の返辭より先きに、熊手の柄がピョンと跳ね返つて來て、息子のおでこにいやといふほど打つかつたものさ！『えい、この忌々しい熊手めが！』と、二三尺も上へ跳びあがりながら、片手でおでこをおさへて、先生、悲鳴をあげをつた『ほんに、こやつめが、――ええくそつ、こやつの親爺が橋のうへから悪魔にでも突き落されやあがればいい、――人の額を打ちやあがつて、おお痛い！』なんと、どんなもので！　奴さん忽ち名稱を想ひ出しをつたではごわせんか！　とな。こんなあてこすりが、この凝つた言ひまはしに憂身をやつしてゐる語り手の氣に入らう筈がない。先生ひとことも口をきかずに席を蹴立つて部屋のまん中へ出ると、脚をかうふんばつて、すこし前こごみに首をうつむけてな、豌豆いろのカフターンの後ろ衣嚢へ手を突つこんで、漆塗りの丸い吸煙草入を引つぱり出すなり、その蓋に下手くそに描いてある何處か異國の大將の面に指彈きを一つ喰はせておいて、消炭と獨活の葉とをまぜて描つた吸煙草をたつぷり一つまみ摘んだが、その手をばいやに氣取つて鼻の方へ持つて行つたかと思ふと、その煙草を殘らず、すうつと、拇指ひとつ鼻にふれずに宙で吸ひこんでしまつた――が依然として口をきかない。別の衣嚢へ手を突つこんで、やをら青い恭盤縞の木綿の手巾を取りだした時、はじめて（豚

に眞珠さ……）と、諺めいたことを口のなかで呟やいただけぢやつた。（どうから喧嘩になりさうだぞ）と、わたしはフォマ・グリゴーリエギッチの指が徐ろに馬鹿握を捧らへようとしてゐるのを見て、さう思つた。ところがいい鹽梅に、うちの老妻が氣をきかせてな、ほやほやの燒麵麭にバタをつけたやつを卓子へだしたので、一座の衆は期せずしてそのまはりへと集まつた。拳を突きつけようとしてゐたフォマ・グリゴーリエギッチの手も、つい燒麵麭の方へ差しのばされて、皆の衆は例によつて例の如く、主婦の技倆の鮮やかさを口々に褒めそやしはじめたものぢや。ほかにもう一人、語り手がゐたが、その人は（どうもそれを寢しなに思ひ出すのは、ちと具合が悪いけれど）實に身の毛もよだつやうな怖ろしい話をして聽かせたものぢや。だがわたしはわざとその話はこの本へ載せなかつた。このうへ堅氣な人たちをおどかしては、皆の衆がこのわたしを鬼かなんぞのやうに怯ぢ怖れだすかも知れないからぢや。もし神のお惠みで新年まで生きながらへて、もう一冊の本を出すやうなことにでもなれば、その時こそ、あの世から迷つて出てくる亡者だの、むかしむかし、この正教の國にあつたくさぐさの不可思議な出來ごとだのの物語で、少しばかりぞうつとさせて進ぜてもよろしい。それと一緒に、ひよつとしたら、この蜜蜂飼が孫たちに話して聽かせたお伽噺もお目どほりをするかもしれない。ちやんとして聽くなり讀むなりして頂けさへすれば、選り出すのがちと億劫ではあるけれど、こんな本の十冊やそこいらの話の種にことは缺きませんのぢ

や。

さうさう、もう少しで、いちばん大切なことを忘れてしまふところぢやつた。わたしのところへ諸君がおいでになるのだつたら、國道をディカーニカ目ざして眞直にやつて來て頂けばよろしい。手前どもの部落がちつとでも早くお分りになるやうにと思つて、わざわざディカーニカの地名を本の標題に置いたやうな次第でな。ディカーニカといへば、もう百も御承知のことであらう。それあもうその筈で、あすこぢやあ、家屋だつて蜜蜂飼風情の小舍などとはずんときれいで、果樹園ときたら、いやどうも、あなた方の彼得堡にだつて、あれだけのものはちよつとやそつとには見當りますまいからね。それで、ディカーニカまでおいでになつたら、穢ならしいシャツ一枚で鷲鳥の番をしてをる出あひ頭の小僧つ兒に《蜜蜂飼のルードゥイ・パニコーの家は何處だい？》とお訊ね下されば。《あすこだよ》と言つて、その小僧つ兒が指をさしてすぐにお教へするでせう。もしお望みとあれば當のこの部落まで先きに立つて御案内することでせう。但しお斷わりしておかねばならないのは、後ろ手なんぞ拱んで、いはゆる容態ぶつた歩き方などなさるのは、見合はせて頂きたいことで、といふのは、こちらの村道といふやつが、あなた方のお邸の前の大通りみたいに坦々砥の如しとは、ちよつと申しあげかねるからで。一昨年のこと、例のフォマ・グリゴーリエヰッチがディカーニカからやつて來て、たうとう新らしい馬車と鹿毛の牝馬もろとも崩穴へ落つこち

てしまつたといふ始末でな、それも自身の手で手綱を捌き、そして時々は自分の肉眼の上へ更に買ひものの眼をおつつけおつつけしてゐたにも拘らずぢや。

さるかはり、一度お客においで下すつたなら、それこそ、恐らく生まれてこのかた、つひぞ召しあがつたこともないやうな甜瓜を御馳走いたしますよ。それに蜜蜂なら、請合つて、そんじよそこいらの部落では金輪際、見つかりつこない飛びきり上等の蜜を進ぜますて。まあ、思つてもみて下され——蜜房を持つてくるてえと、部屋ぢゆうにぷんぷんと芳香がみなぎり わたるといふ始末でな、いや、とてもとても想像することも出來ませぬくらね、まるで涙か、それともよく耳環にはめる高價な水晶のやうに、混りつけのない蜂蜜ですぢやて。それから、うちの老妻が御馳走するピローグですよ！それがどんな素晴らしいピローグだか、ひとつお眼にかけたいくらゐで、いや砂糖、まるつきり砂糖のやうでな！ そいつを頬ばりだすと、もうバタが唇をつたつてたらたらと流れだす始末。まつたく考へて見るに婦女子どもといふやつは何から何まで實に器用なものぢや！ いつか皆さんは茨の實を入れた梨の濁麥酒だの、乾葡萄や黒梅の入つた混成酒を召しあがつたことがおありかな？ それとも、牛乳いりの雑炊を召しあがつたことがおありかな？ いやはや、この世の中にはなんと夥しく、いろんな食べ物がありますことぢやらう！ つまみにかかつたが最後、腹いつぱい、しこたま詰めこまずにはゐられませんわい。美味いものあさりといふやつは、實になんと

もいひやうのないものでしてな！去年のことぢやが……、いや、それはさて、わたしとしたことが何をしやべりこけてしまつたことやら？つまるところは、ただお出かけになつてさへ下さればよろしいので、一刻もはやくおいでになつてさへ頂けばな、さうすれば、もう逢ふ人見る人ごとに、いちいち吹聽なさらずにはゐられないほどの素晴らしい御馳走をして進ぜまするよ。恐惶謹言

蜜蜂飼　ルードゥイ・パニコー
しるす

ソロチンツイの定期市

家のなかにゐるのは退屈だ。
ああ、誰か外へつれだしてお呉れ
娘っ子があそび戯れ
若い衆がうろつきまはる
賑かな賑かなところへと！

——古傳說より——

一

小露西亞の夏の日の夢心地と、その絢爛さ！　鳩羽いろをした果しない蒼空が、エロチックな穹

窪となつて大地の上に身をかがめ、眼に見えぬ腕に佳人を抱きしめながら、うつつをぬかしてまどろむかとも思はれる、靜けさと酷熱の中に燃える日盛りの、この堪へがたい暑さ！　空には散り雲ひとつなく、野づらには人聲ひとつ聞えず、萬象はさながら寂滅したかの如く、ただ頭上たかく天際にをののく雲雀の唄のみが、銀鈴を振るやうに大氣のきざはしを通つて、愛慾に溺れた大地へ傳はり流れるのと、稀れに鷗の叫びか、甲高い鶏の鳴き聲が、曠野にこだまするばかり。槲の木立はものうげに、無心に、まるで當所なきさすらひ人のやうに、高く雲間に聳えたち、まぶしい陽の光りが繪のやうな青葉のかたまりを赫つと炎え立たせると、その下蔭の葉面には闇夜のやうな暗影が落ちて、ただ強い風のまにまに黄金いろの斑紋がばらばらと撒りかかる。恰好のいい向日葵のいつぱい咲き亂れた菜園の上には、翠玉石いろ、黄玉石いろ、青玉石いろ等、色さまざまな、微細な羽虫が翔び交ひ、野づらには灰いろの乾草の堆積や黄金いろの麥束が、野營を布いたやうに、果しもなく遠近に散らばつてゐる。枝もたわわに實のなつた櫻桃や、梅や、林檎や、梨。空と、その澄みきつた鏡である河――誇りかに盛りあがつた綠の額緣に嵌まつてゐる河……なんと小露西亞の夏は、情慾と逸樂に充ちあふれてゐることだらう！

ええと、一千八百……一千八百……さうだ、なんでも今から三十年ほど前の、暑い八月の、丁度かうした壯麗な輝やかしい或る夏の日のこと、小都會ソロチンツイの町から十露里ばかり手前の街

道筋は、をちこちのあらゆる農村から定期市を目ざして急ぐ人波で埋まつてゐた。朝まだきから、鹽や魚を積んだ荷車の列が蜿蜒として際限もなく續いてゐた。上から乾草をかぶせられた壺の山が、幽閉と暗黑に退屈しきつたとでもいふやうに、もぞもぞと蠢めき、またところどころ、荷車のうへに高く押し立てられた枠のあひだからは、けばけばしい模樣を描いた井や擂鉢の類が自慢さうに顏をのぞけては、はで好きな連中の物欲しさうな眼差を牽きつけてゐた。道ゆく人々の多くは、さうした高價な品の持主である、背の高い陶器師が、自分の商品の後ろからのろのろしたあしどりで歩みながら、絶えず、伊達者で蓮葉な陶器どもに、いやがる乾草をかぶせかぶせするのを、羨ましさうに眺めやつた。

一方、少し離れて、麥の袋や苧や麻布や、その他いろんな自家製の品を滿載した荷車を、へとへとに疲れた去勢牛に曳かせながら、その後ろから小さつぱりした麻布の襯衣に、汚れた麻布の寛袴を穿いた持主がのつそりのつそり歩いてゐた。彼は、その淺黑い顏から玉をなして流れ、あまつさへ長い泥鰌髭のさきからぽたぽた滴り落ちる汗を、ものうげな手つきで拭き拭き歩をはこんでゐるが、その髭は、幾千年このかた美醜の別ちなくあらゆる人の子をば招かれもせぬのに訪づれる、あの容赦なき調髮師の手で髮白粉をふりかけられてゐた。それと並んで、おとなしさうな、年とつた一頭の牝馬が荷車に繫がれてボカボカ歩いてゆく。行きずりの人、とりわけ、たいていな若

者が、この百姓と行き交ふ度ごとに必らず帽子をとつた。だが、それはこの親爺の白毛髭のせゐでもなければ、その勿體ぶつたあしどりのせゐでもない。さうした敬意の拂はれる理由が知りたければ、眼を少し上へあげさへすればよい。荷車の上には丸顔の美しい娘がひとり坐つてゐた。黒いなだらかな三日月眉は澄みきつた菜色の眼の上にもたげられ、薔薇いろの唇には屈託のない微笑が浮かび、頭べにまとはれた赤や青のリボンは、長い編髪や野花の小束と共に、彼女の蠱惑的な頭べの上に、華やかな王冠のやうに落ちついてゐた。何もかもが彼女の心を惹きつけるらしく、あらゆるものが彼女には珍らしく、目あたらしさうで……その美しい二つの眸は絶え間なく、次ぎから次ぎへと馳せうつつた。どうしてまた夢中にならずにゐられよう！　初めての定期市ゆきなのに！　十八娘の生まれて初めての定期市ゆきなのに！……しかし、彼女がどんなに父親にせがんで同行を納得させたかは、行き交ふ人々のうち誰ひとり知つてゐる者がない。もつとも父親は、根性まがりの繼母さへゐなかつたら、二つ返辭で聽き入れたことだらうが、彼はまるで、永年のあひだこき使はれた舉句のはてに、お拂ひ箱になるために、現に曳かれてゆく毫碌馬の手綱を自分が摑んでゐると同様に、すつかりその後添の女房の手で尻尾を押へられてしまつてゐたのだ。そのやかましやの女房といふのは……。しかしわれわれはその女房が現在この荷車のてつぺんに乘つかつてゐることをつい胴忘れしてゐた。その女房は、ちやうど、貂の毛皮のやうに、色こそ赤いが、一面に植毛の施

こされた、しやれた青い毛織の短衣の下に、將棋盤みたいな市松模様の、立派な毛織下着を着こみ、更紗模様の頭布帽をかぶつてゐる。それが彼女のでつぷりした赤ら顔に一種獨特のいかつさを添へて、何かかうひどく不氣味で異様な風貌に見えたので、誰しも愕ろきの眼を、急いで陽氣な娘の顔へと移さずにはゐられなかつた。

この一行の行手には早くもブショール河が見えだして、まだ遠くから、清涼な河風がもう頰を撫でて、それが堪へがたい酷暑の後でひとしほと身に浸みるやうであつた。無造作にばら撒かれたやうに、草地の上に突つ立つた黒筐柳や白樺や白楊などの、明暗の青葉を通して、冷氣を帶びた、火のやうな閃光がキラキラ輝やきだすと、美女のやうな流れが白銀の胸廓を燦然と露はして、その上には樹々の青葉が捲毛のやうに艶めかしく垂れてゐた。まばゆいばかりに美しい額や、百合の花かとも見まがふ兩の肩や、波うつて垂れてゐる亞麻いろの題髪にかざされた大理石のやうな頸をば妬ましげにうつす鏡の前で、恍惚として驕りあがつた放恣な美女が、果しない氣紛れにその衣裳を次ぎ次ぎと取り棄てては著換へるやうに、この河は殆んど年ごとに、四邊の容子を變へ、新らしい水路を選んで、さまざまな目新らしい景色で己れを裝ほふのである。幾列にもならんだ磨粉場の水車が幅の廣い河波を掬ひあげては、それを飛沫に碎き、水煙をあげて、苦もなく跳ね飛ばしながら、あたりを響するばかりの騒音を立ててゐた。われらの馴染みの一行を乘せた荷馬車は、ちやうどこ

の時、橋に差しかかつて、彼等の眼前には、限りなく麗はしく、さながら無色透明な玻璃板のやうな、雄大な流れが展開したのである。空や、綠と青の森や、人々や、皿小鉢を積んだ荷馬車や、水車場――さうしたすべてのものが逆さまになつて、藍いろの美はしい深淵にうつつて、沈みもせずに足を空ざまにして立つたり、歩いたりしてゐる。くだんの美人はこの絶景に見とれて、途々根氣よく頬ばつてゐた向日葵の種の殼を吐きだすことも打ち忘れてぼんやりと考へこんでしまつた。

と、そのとき、不意に『おんや、娘つ子だよ！』といふ聲が彼女の耳を驚ろかした。振りかへつて見ると、橋のうへに一群の若者がたたずんでゐて、その中でいちばん垢ぬけのしたみなりで、白い長上衣に、鼠いろの羊毛皮の帽子をかぶつた若者が、兩手を腰につがへたまま傍若無人に、通り過ぎようとする一行を眺めてゐた。ゆくりなくも、その日焦のした、といへ愉悅に充ちあふれた顏と、こちらをじつと、見すかさうとでもしてゐさうな、燃えるやうな眼にぶつかると、さつきの聲は屹度この人の聲だつたなと思つて、彼女ははつと顏を伏せた。『素つ晴らしい娘つ子だぞ！』と、その白い長上衣の若者は、娘から眼もはなさずに言葉をつづけた。『彼女を接吻することが出來さへしたら、おれあ身代ありつたけ投げだしたつて構やしねえぞ。だが、前には悪魔が坐つてやがる！』どつといふ笑ひ聲が四方から起つた。しかし、この思ひがけない挨拶は、のつそりのつそり歩を進めてゐる亭主の、粧したてたその配偶には、あんまり嬉しくなかつた。女房の赤い頬は火のやうに

赫つと燃え立つて、取つておきの悪罵がこの不屈きな若者の頭から浴せかけられた。

「何だい、この碌でなしの出來そこない野郎め、咽喉でも詰まらせてくたばつてしまやがれ！汝の親爺のど頭に壺でもぶつかりやあいい。氷に滑つてころびくさるがいいんだ、忌々しい外道めが！　地獄へおちて鬼に髯でも燒かれやあがれ、くそつ！」

「どうだい、あの毒づくことは！」と、若者は女房の顏に眼をみはりながら、思ひがけなく手嚴しい矢繼ばやの應酬にいささか辟易した形で、「あの海千山千の妖女の舌は、あんなことを言つて、あれで、ちつとも痛くはならねえのかなあ！」

「なに、海千山千だと！……」さう言つて、年增の別嬪は喰つてかかつた。「この罰あたりめが！顏でも洗つて出直して來やあがれ！　しやうのない破落戸野郎め！　汝のお袋を見たことはないが、どうせ碌でなしに違ひない。親爺も碌でなしなら、叔母も碌でなしにきまつてるだ！　くそつ、海千山千なんて吐かしやあがつて！……何だい、まだ乳臭い二歳野郎の癖に……。」

その時、荷馬車がちやうど橋を渡りきつてしまつたので、その言葉尻はもう聞き取れなかつたが、若者はそれなり鬼をつけてしまふのが業腹だつたと見えて、よくも考へないで咄嗟に泥土をひと塊りつかみあげるなり、それを女房のうしろから投げつけた。それがまた思ひがけなく、うまく命中して、新らしい更紗の頭巾帽がすつかり泥だらけになつたので、無茶な亂暴者たちの哄笑はま

たひとしほ大きくなつた。肥つちよのめかしやは赫つといきりたつたが、しかし荷馬車はその時もうよほど遠く距たつてゐたので、女房はその腹癒に罪もない織娘や、のそのそ歩いてゐる亭主に當り散らした。だが、亭主の方は、かうした悶著にはもう疾の昔から馴れつこになつてゐたので、依怙地に默りこくつて、いきり立つ女房の取りのぼせた言葉にはまるで取り合はなかつた。それでも女房の性慾りもない舌の根は、彼等が目ざして來た市の近くの、古馴染で教父に當つてゐるツイブーリャといふ哥薩克の家へ到着するまで、ぶつぶつと小やみもなく口の中で呟やきどほしだつた。この家の人々と久しぶりに對面して、暫らくその不快な出來ごとを頭から拂ひのけた一行は、定期市の取沙汰などをしながら、長い道中の後でひと休みした。

二

いつたいこの定期市に何ひとつ無いといふ品があるだらうか！　車輪に硝子に樹脂に煙草、帶革、玉葱、そのほか百姓道具が一式……これでは財布に三十兩あつても市の品ひと通り買ふことは出來まい。

——小露西亞喜劇より——

諸君は多分、どこかで瀧のおちる音を遠くから聞かれたことがあるだらう、あたりは轟々たる水音に震駭されて、不思議な、はつきりしない響きの交錯が旋風のやうに身に迫るのを。實にかの全群集が一つの厖大な怪物となり、その胴體のすべてを以つて廣場や狹い街々を蠢きつつ、叫び、鳴り、はためく田舍の定期市の渦卷のなかで、一瞬間われわれを捉へるのは、その同じ感じではなからうか？　喧騒と怒號、牛や羊や豚の啼き聲——それらのすべてが混淆して一つの調子外れな音響となるのだ。去勢牛、袋詰、乾草、ジプシイ、皿小鉢、百姓女、藥味麵麭、帽子——すべてがけばけばしく、五彩燦爛として、亂脈に、うようよと累なりあひ、入り亂れて、ぱつと眼の前へ押し迫る。聲とりどりの話聲が互ひに消しあつて、この音響の洪水からは一語として拾ひあげられ、救ひだされる言葉はなく、一句として明瞭に發せられる叫びはなく、ただ商人どもの手を拍つ音が市場の四方八方から聞えるだけである。荷車が毀され、鐵金具が鳴り、地面へ投げられる板がばたんばたんと轟ろいて、眩暈を起した頭には方角も何も分らなくなつてしまふのだ。くだんの旅の百姓は、もう長いこと、娘といつしよに、さうした人波のなかに揉まれてゐた。彼は、こちらの荷車に近よるかと思へば、あちらの荷車に手をかけて、いちいち値段を當つて見るのだつた。さうしてゐるあひだにも肚のなかでは、賣りさばきに持つて來た十袋の麥と老耄れた牝馬を中心に、とつおいつ思案にかき暮れてゐるのだつた。ところが娘の顏つきでは、麥粉や小麥を積んだ荷車のあひだを

潜るやうにしてあちこちと歩き廻るのは餘りうれしくないらしかつた。彼女は、布張りの日除けの下に美々しく吊りさげられた赤いリボンだの、耳環だの、錫や銅の十字架だの、古錢の頸飾だのの方へ行きたかつたのだ。しかし、こちらにも彼女の眼を牽きつけるものはいくらでもあつた。彼女をこの上もなく笑はせたのは、ジプシイと百姓とが、痛さに悲鳴をあげながら互ひに手を敲きあつてゐるのや、醉つぱらひの猶太人が女の尻を膝で小突くのや、女の市場商人が唾みあひながら、罵る相手に蜊蛤をつかんで投げつけてゐるのや、大露西亞人が片手で自分の山羊髯をしごきながら、片手で……。ところが彼女は不意に、誰かが自分の刺繍の襦袢の袖をひつぱるのに氣がついた。振りかへつて見ると、そこには例の白い長上衣を着た、眼もとのすゞしい若者が突つ立つてゐた。彼女はぎくりとした。同時に、今までどんな歡びにもどんな悲しみにも、つひぞ覺えたことのないほど、胸がわくわくと躍りだした。それがまた彼女にはなんともいへぬ好い心持で、いつたい自分はどうしたといふのか、さつぱり理由がわからなかつた。

「怖がらなくつてもいいよ、ね、怖がらなくつてもさ！」若者は娘の手をとつて、小聲で言つた。「別に俺らは、お前にいんねんをつけようといふんぢやあねえからさ！」

《多分、あんたが、別段あたしに惡い言ひがかりをするのでないことは、ほんたうだらうよ。》さう美人は胸のなかで思つた《でも變だわ……屹度この人は惡魔よ！　だつて、あたし自分でぢやんと、いけないとわかつてゐながら……どうしてもこの人から手を引つ込めることが出來ないんだもの。》

ふと父親は娘を振りかへつて、何か言はうとしたが、その時、片方から（小麥）といふ聲が聞えた。その魔術的な一語を耳にするとともに、父親は知らず知らず、大聲で話しあつてゐる二人の商人のそばへ、ふらふらと近よつて行つて、その方へ氣をとられてしまつた彼の注意は、もはや何物を以つてしても引き戻す術がなかつた。さて、その商人どもが語りあつてゐた小麥の話といふのは、かうだ。

三

見ろやい、豪氣な若い衆ぢやねえか？　あんなのあ、まつたく珍らしいや、火酒を麥酒のやうにがぶがぶやりをるぜ！

——コトウリヤレフスキイ『エニェイーダ』より——

「ぢやあお前さんは、なんだね、おらたちの小麥がとても旨く捌けねえと思ひなさるだね？」と

何處か小さな町からでもやつて來たらしい、風來の町人といつた容子の、樹脂で汚れた脂じんだ縞の寛袴を穿いた男が、もう一人の、ところどころに補布の當つた青い長上衣を著た、お額に大きな癤のある男に向つて言つた。

「何も考へるがものあねえだよ、おいらあ、なんだて、萬に一つもこちとらの小麥が、たとひ一升ぽつきりでも捌けようものなら、この木に繩をかけて、降誕祭まへに屋根にぶらさげる腸詰みてえに首をおつ縊つて見せるだよ。」

「人を誤魔化さうたつて駄目なことよ！　それだつて、おいら達より他にやあ、からつきし持ちこんだ者あ無えでねえか。」さう、縞の寛袴を穿いた男が反駁した。

《ふん、勝手に好きなことをほざきあつてろだ。》と、この二人の卸賣商人の會話を一言半句も聞き漏さずにゐた、くだんの美女の父親は腹のなかで呟やいた。《ところが、おいらのとこにやあ十袋から持ち合せがあるだに。》

「やつぱり、なんだなあ、惡魔の手のかかつた場所ぢやあ、飢ゑたモスカーリから搾り出すほど儲けもあるこつてねえだて。」と額に癤のある男が意味ありげに言つた。

「惡魔の手つちふと、それあいつたいなんだね？」さう縞の寛袴を穿いた男が聞き咎めた、

「世間でよりより噂さにのぼつてることを聞かねえだかね？」と額に癤のある男がじろりと相手

の顏へ不機嫌さうな流眄をくれながら、つづけた。

「はあて！」

「はあてだと、まつたくそれこそ、はあてだて！ちえつ、あの委員の畜生めが、旦那衆のうちで梅酒を呑みくさつた後で口を拭くことも出來なくなりやあがればいいんだ、こねえな、金輪際、小麥ひとつぶ捌けつこねえ、忌々しい土地を市場にきめやあがつて。そうら、あの壞れかかつた納屋が見えるだろ？　ほら、あすこの山の麓のさ。（玆で、ものずきな、くだんの美人の父親は、まるで注意のかたまりにでもなつたやうに、一層間近く二人のそばへにじり寄つた。）あの納屋のなかで、時々、惡魔がわるさをしをるので、一度だつてここの定期市に災難がなくて濟んだためしがねえのさ。昨夜おそく、郡書記が通りすがりに、ひよいと見るてえと、空氣窓から豚の鼻づらが戸外をのぞいて、ゲエゲェ呻つたちふだよ。それで奴さん、頭から冷水でもぶつかけられたやうに、ぞうつとしたちふこつた。またしても、あの《赤い長上衣》がとびだすに違えねえだよ！」

「その《赤い長上衣》つてえなあ、いつたいなんだね？」

ここで、われらの注意ぶかい聽き手の髮の毛は逆立つた。ぎよつとして彼が後ろを振りかへると、自分の娘が一人の若者と互ひに抱きあふやうにして、この世の中にどんな長上衣があらうと、てんでそんなもののことは念頭にもおかず、何か戀のささやきを交はしながら、靜かにたたずんで

るた。それを見ると親爺は恐怖の念も忘れて、又もとの暢氣さに立ちかへつた。

「おやおや、おい、若えの！　お前よつぽど、じやらつきの名人らしいな！　おいらなんざあ、婚禮のあと四日目になつて、やつと死んだ嬶あのフヴェーシカを抱きよせることが出來たもんだ、それも、介添役の教父（クーム）が口ぞへをして呉れたればこそだ。」

若者は卽座に、愛人の父親を御しやすしと見てとると、胸中ひそかに、如何にして彼を懐柔すべきかについて思案を凝らしはじめた。

「お父つあん、お前さんはおいらを知りなさるめえが、おいらはひと目でお前さんがわかつただよ。」

「それあ、わかりもしただらうがね。」

「なんなら名前から渾名から、何から何まで、ひとつ言つて見せようか。お前さんの名前はソロ1ピイ？チェ、レギークつていひなさるんだらう。」

「うん、そのソロ1ピイ・チェレギークはおらだよ。」

「まあ、よつく見ておくれよ、このおいらが分らねえのかなあ？」

「うんにや、どうも見憶えがねえだよ。さう言つちやあなんだが、生涯のあひだに會つて來た人間の面相を、いちいち憶えてなんぞゐられるこつてねえからなあ！」

「しやうがねえなあ、ゴロブペンコの悴を憶えてをつて貰へねえやうぢやあ！」

「そんなら、お前は、あのオフリームの息子けえ？」

「でなくつて誰だといひなさるだね？　悪魔ででもなきやあ、その當人にきまつてらあな。」

そこで、ふたりは帽子をかなぐりすてて、接吻をしはじめたが、われらのゴロブペンコの悴は早速その場でこの新らしい友を攻め落さうと決心した。

「ところで、ソロ1ピイのお父つあん、そうらね、このとほり、おいらとお前さんの娘さんとあ、お互ひに好いた同士になつて、もう一生涯、離れようにも離れられねえ仲になつちやつたんだがね。」

「そいぢやあ、何かい、バラースカ、」と、笑ひながら娘の方へ向きなほつて、チェレギークが言つた。「ほんとに、もう何かい、その、なんだ……よく言ふ、ひとつ草を喰（は）まうつちふやつか！　どうぢや？　手を拍つことにするだか？　うん、よかつぺえ、それぢやあ、ほやほやの花聟どん、お祝ひに一杯やらかすことにすべいか！」

そこで三人は打ちそろつて、名の通づた市場の料理店へ入つて行つた——それは猶太女の出してゐる天幕店で、そこにはいろんな形の罎に入つた、あらゆる種類、あらゆる年代の酒が夥しくずらりと並んでゐた。

「やあ、いけるいける！　それでこそおいらの氣に入るわい！」チェレギークは、未來の花聟が火酒をなみなみとついだ三合の餘もはいる大コップを顏の筋ひとつ動かさずに、ぐつと一息に呑みほしさま、それを粉微塵に叩きわつたのを、やや酩酊してどろんとした眼で眺めながら、言つた。

「どうだい、パラースカ？　えれい花聟を目つけてやつたぞ！　ほうら、見ろやい、なんちふ見事な呑みつぷりだか！……」

やがて彼は娘をつれて、げらげら笑ひながら、よろめく足どりで自分の荷馬車の方へ戻つて行つたが、當の若者は、小間物を並べた店々――その中にはボルタワ縣下でも名高い二つの市、ガデャーチやミルゴロドから來た商人も混つてゐたが、――それを軒並にひやかしながら、聟引出物として舅や、そのほか然るべき人々に贈るために、酒落れた銅金具つきの、木製のパイプだの、赤い緣に沿うて花模樣をおいた手巾だの、さては帽子だのを、丹念に探してまはつた。

四

たとひ糞でも男としては
女の前へ出たからにや、
世辭の一つも言ふが德……。

――コトウリヤレフスキイ『エニェイーダ』より

「おい、おつかあ、おらあな、娘の聟を目つけて來たぞ！」

「まあ、この人つたら、けふび聟さがしどころの騷ぎかい！　馬鹿々々しい！　ほんとにお前さんつたら、よくよくの因果でいつもさうなんだよ！　どこの國にけふび、正氣の沙汰で聟さがしなんぞに夢中になつてる人があるものか？　そんなことより、ちつとでも早く、麥を賣り捌く分別でもしたらどんなもんだね。その上でこそ好い花聟も目つかるつてもんだよ！　どうせ、また襤褸にくるまつた乞食野郎かなんかだらう、屹度。」

「へ、お生憎さまだて！　どんなえれえ若者だか、ひとつお眼にかけてえもんだ！　長上衣だけでもお前の短衣と赤革の靴より高價かんべえ。それよりも、火酒の呑みつぷりの見事さと來た日にやあ！……おらあ臍の緒を切つてこのかた、顏の筋ひとつ動かさねえで三合の餘もある火酒をひと息に呑みほすやうな若者を見たなあ、初めてだよ！」

「あれだよ、この人には、ただもう、呑助か破落戸でさへありやあ性に合ふんだからね。てつきり、そいつはあの橋の上でいやに妾たちに絡んで來やがつた、あのやくざ者に違ひないよ、でなか

つたら、どんなものでも賭けるよ。今まで出喰はさなかつたのが口惜しいくらゐさ、ほんとに思ひ知らせてやるんだつたのに。」

「何だと、ヒーヴリャ、たとへその男であつたにもしろさ、別にやくざ者つてえわけあねえでねえか！」

「ちえつ！　やくざ者つてえわけがないなんて！　まあこの人は、なんて頓馬なおたんちんだらう！　呆れてしまふぢやないか！　あれがやくざ者でないなんて！　お前さんは一體、あの廢粉場のそばを通る時に、その間の抜けた眼を何處にくつつけてゐたんだね？　ほんとにこの人つたら、現在目の前で、その嗅煙草だらけの汚ならしい鼻の先でさ、自分の女房が赤恥を掻かされても平氣の平左なんだからね。」

「それかといつて、おいらにやあ、あの男に一點、非の打ちどころがあるやうにも思へねえからよ。何處へ出しても恥かしくねえ立派な若い衆さ！　ただちよつとばかり、お前のおたふくづらに泥糞を塗りこくつただけのこつてねえか。」

「ええつ、ほんとにお前さんつていふ人は、ああ言へばかう、かう言へばああと、へらず口ばつかり叩いてさ！　それあ、いつたいなんといふこつたね？　つひぞこれまでにないことぢやあないか？あ、わかつたよ、おほかた何ひとつ商なひもしない癖に、もうどつかで喰ひ醉つて來たんだら

う？」

この時、チェレギークはわれながら餘計なことを言つたと氣がつくと同時に、屹度いきり立つた女房が、瞋恚の爪を剝いて、いきなり頭髪をひつ掴みに飛びかかつて來るだらうと思つて、咄嗟に兩の腕で頭をかかへた。

《どうなと勝手にしやがれ！》と、彼は猛々しく武者振りついて來る女房を避けながら、心の中で呟やいた。《どうといふ理由もねえのに、立派な男を斷わらにやなんねえだ。ああ、神様！　なんだつて、罪深いわしどもにこんな不仕合せを下さるだね？　この世の中はこのとほり碌でもねえものだらけなのに、まだその上に、あなた様は嬶あなんてものをお創造になつただ！》

五

をれるなすずかけ、お前は嫩い。
しよげるな哥薩克、お前も若い！
——小露西亞の小唄——

白い長上衣を著た若者は、自分の荷馬車の傍に坐つたまま、かやがやとざわめく周圍の人波をぼんやり眺めてゐた。おだやかに午前と午後を照らしをへて疲れはてた太陽は地平の彼方に沈んで、まさに暮れなんとする日は蠱惑的に、鮮やかな紅の色をおびた。白い大小の天幕小舎の頂きがほんのりと焰のやうな薔薇いろの光りを受けてまばゆく輝やいてゐた。かさねて立てかけられた夥しい窓枠の硝子が反射し、酒場の卓子のうへに置かれた青い酒罎やさかづきは火のやうな色にかはり、甜瓜や西瓜や南瓜の堆積が、さながら黄金と赤銅の鑄物のやうに見えた。がやがやいふ人聲もめつきり少くなり、低くなつて、女商人や、百姓や、ジプシイも今はしやべり疲れて、その舌まはりもの、ろく懶げであつた。あちこちに焚火の火がちらつついて、水團の煮える香ばしい湯氣が、ひつそりした通路を流れた。

「何をふさぎこんでるだね、グルイツィコ?」と、背のひよろ長い、日焦けのしたジプシイがわれらの若者の肩を叩いて叫んだ。「どうだね、二十留で去勢牛を手ばなしちやあ!」

「手前つちときたら、一にも去勢牛、二にも去勢牛だ。手前たちやあ、なんかといへば欲得一點ばりで、堅氣な人間を誤魔化したり、べてんに懸けたりばかりしてやがるんだ。」

「ちえつ、馬鹿々々しい! まつたく冗談でなしにお前さんどうかしてるよ。自分で花嫁を取りきめておきながら、今更それを後悔してゐるんぢやないかね?」

「ううん、おいらはそんな人間たあ譯が違ふ。約束を反古にするやうなことはしねえさ。一旦とりきめたこたあ金輪際、變改するやうなこたあしねえよ。だが、あのチェレギークのおやぢには良心つてものがねえんだ、半文がとこもねえんだ。約束はしても、氣が變るんだ……。だが、あのおやぢを責めることも出來ねえさ、奴さんは馬鹿で、あれつきりの人間だからなあ。何もかもあの古狸の仕業さ、けふおいらがみんなと一緒に橋のうへでさんざ彌次りとばしてやつたあの妖女の仕業なのさ! ちえつ、ほんとに、このおいらが皇帝か、それとも偉え大名ででもあつたら、先づ何を措いても、おめおめと女の尻にしかれてるやうな痴者は一人のこらず死刑にしてやるんだが……。」

「ちやあ、おいらが骨折つて、チェレギークにバラースカを手ばなすことを納得させたら、お前さん去勢牛を二十留で譲るだかね?」

グルイツィコは胡散臭さうに相手の顔を眺めた。淺黒いジプシイの顔には邪まで、毒々しくて野卑で、それと同時に横柄な面魂が浮かんでゐた。それをひとめ見た者には、この男の奇怪な心底には只ならぬ魂膽がふつふつと煮えたぎつてゐて、それに對する地上の報いはただ絞首臺あるのみだといふことが立ちどころに頷かれた。鼻と尖つた頤とのあひだへすつかり陷ちこんで、絶えず莨々しい薄笑ひを浮かべてゐる口許、火のやうにキラキラ光る小さな金壺まなこ、かはるがはる始終その顔にあらはれる、さまざまな謀計や策略の閃めき——すべてさうしたものが、現にそのとき彼の

著けてゐたやうな、一種獨特な奇態な服裝を要求したかとも思はれた。ちよつとでもさはつたなら、ぼろぼろにくだけてしまひさうな、暗褐色の長上衣、兩の肩へ垂れ下つてゐる学屑のやうな長い黒髪、日焦けのした素足にぢかにはいた半靴――さうしたものがすべて彼の身について、その人柄を形づくつてゐるやうに見えた。

「それが嘘でさへなければ、二十留はおろか、十五留でだつて賣つてやらあ！」と、なほも相手の肚をさぐるやうな眼つきで、その顏を見つめながら若者は答へた。

「え、十五留で？　ようがす！　だが、くれぐれも忘れなさんなよ、きつと十五留ですぜ！　ぢやあ手附にこの五留札を一枚あづけときやせう！」

「よからう、だが、約束をたがへたらどうする？」

「約束をたがへたら、手附はお前さんのものさ！」

「ようし！　ぢやあ手拍ちとしよう！」

「よし來た！」

六

ほい、飛んでもないこつた、うちのローマンが歸つて來ましたよ。これあまた
青紫斑をこしらへられなきやあなるまいが、ホモさん、あんたにもちと具合が
悪いわねえ。

――小露西亞喜劇の中より――

「こつちへいらつしやいな、アファナーシイ・イワーノヰッチ！　ほら、ここが垣根の低いところだから、足をおかけなさいまし。なに、心配することはありませんよ、うちのお馬鹿さんは大露西亞人に何かちよろまかされやしないかと思つて、ここの教父といつしよに夜どほし荷馬車の見張りに行つてますからさ。」

チェレヰークの雷女房はかういつて、垣根のそばにぴつたり身を寄せておどおどしてゐる祭司の息子をやさしく元氣づけた。男はいきなり籬のうへに立ち上ると、物凄い、のつぽの妖怪よろしくの體で、さてどこへ飛びおりたものかと、目くばりをしながら、暫らくのあひだためらつてゐたが、やがてのことにバサつと音をたてて曠草のなかへ落つこちてしまつた。

「まあ大變！　お怪我はなさらなかつたの、もしや頸の骨でも挫きはなさいませんでして？」さう、ヒーヴリャは氣づかはしさうにしやべり立てた。

「しつ！　なに大丈夫ですよ、大丈夫ですよ、ハヴローニヤ・ニキーンフォロヴナ！」とやをら立ちあがりながら祭司の息子は、痛さうに、囁やくやうな聲で答へた。「ただ、蕁麻に刺されただけですよ、あの亡くなつた祭司長の言ひぐさではないが、この毒蛇みたいな草にね。」

「さあ家のなかへはいりませう、誰もゐやしませんわ。あたしはまたねえ、アファナーシイ・イワーノヰッチ、あなたがお腫物か腹痛で、おかげんでも悪かつたのぢやないかと、お案じしてゐたんですよ。だつて、あんまりお見えにならないんですもの。で、その後おかはりはありませんの？あなたのお父さんはこの頃ぢゆう隨分たくさん、いろいろ收入がおありなさるつてことですわねえ！」

「いやなに、ほんの些細なものですよ。ハヴローニヤ・ニキーフォロヴナ。うちの親爺は精進期のあひだぢゆうに春蒔麥なら十五袋、穀の四袋、白麵麭の百個ぐらゐも貰ひましたかねえ。鷄も勘定をしたら、ものの五十羽とはありますまいし、玉子はおほかた腐つてゐるといふ始末ですよ。しかし、正直なはなし、ほんとに喜ばしい贈物といへば、ハヴローニヤ・ニキーフォロヴナ、ただあなたから頂くものの他にはありませんからね！」さう言つて祭司の息子は、甘つたるい眼つきで女を眺めながら、間近く擦りよつた。

「さあ、これがあなたに差しあげるあたしの贈物なんですよ、アファナーシイ・イワーノヰッチ！」

さう言ひながら女は、卓子の上へ皿小鉢を出したり、さもうつかり外れてゐたといはんばかりに、上着の釦を掛けたりして、「肉入團子に、小麥粉の煮團子に、それからパムプーシェチキと、トヴチェーニチキと！」

「それあもう、これを、どんな御婦人がたより上手なお手際でおつくりになつたつてえことは、賭をしてもかまひませんよ！」さう言ひながら、祭司の息子は片手でトヴチェーニチキを取りあげ、片手で肉入團子を引きよせた。「しかし、ハヴローニヤ・ニキーフォロヴナ、わたしの胸はどんなパムプーシェチキやガルーシュキにも增してもつともつとおいしい御馳走が頂きたくつてギュウギュウいつてるのですよ。」

「さあ、このほかにどんな食べものがお望みなのか、あたしにはちよつと分りかねますわ、アファナーシイ・イワーノヰッチ！」この肥つちよの別嬪は、いかにも腑に落ちないといつた容子をして、さう答へた。

「あなたの愛情にきまつてるぢやありませんか、ハヴローニヤ・ニキーフォロヴナ！」かう囁やくやうに言ふと、祭司の息子は片手に肉入團子を持つたまま、片手でがつしりした女のからだを抱きよせた。

「まあ、思ひがけない、何を仰つしやることやら、アファナーシイ・イワーノヰッチ！」さう面

映げにヒーヴリャは眼を伏せて答へた。「ひよつとしたら、まだそのうへに接吻をなさるつもりなんでしよ！」

「それについて、これは自分自身のことですけれど思ひきつて白狀しますがね、」と、祭司の息子が言葉をついだ。「あれはたしか、まだ神學校の寄宿にゐた頃のことなんですよ、今もまざまざと憶えてゐますが……。」

この時ふと、戸外で犬の吠える聲と、門を叩く音が聞えた。ヒーヴリャは急いで駈けだして行つたが、すぐに眞蒼な顏で引つ返して來た。

「まあ、アファナーシイ・イワーノヰッチ、大變なことになりましたよ。おほぜいの人が門を叩いてゐますの、それに確か、この家の敎父の聲もするやうなんですの……。」

とたんに祭司の忰は肉入團子を咽喉につまらせてしまつた……。彼の兩の眼は、たつたいま幽靈のお見舞を受けたといはんばかりに、かつと剝きだしになつた。

「はやく、此處へあがつて下さい！」狼狽へたヒーヴリャは、天井のすぐ下のところに二本の横梁（よこばり）で支へられて、そのうへにいろんながらくた道具がいつぱい載せてある棚板を指さしながら叫んだ。

咄嗟の危急がわれらの主人公に勇氣を與へた。彼ははつと我れにかへると同時にペチカの寢棚（レヂャンカ）へ

飛びあがり、そこから用心しいしい棚板の上へ攀ぢのぼつた。一方ヒーヴリャは、なほも烈しく、やつきになつて扉を打ちたたく音に急きたてられて、前後の辨へもなく門の方へ駈け出して行つた。

七

さあこれが奇々怪々な話なんでな、皆の衆！

——小露西亞喜劇より——

市場では奇怪な事件が持ちあがつた。といふのは、何處か荷物のあひだから（赤い長上衣（スヰートカ））が飛び出したといふ取沙汰でもちきりなのだ。輪麵麭（ブーリック）を賣つてゐる婆さんのいふところでは、豚に化けた惡魔が、何か捜しものでもするやうに、ひつきりなしに荷馬車といふ荷馬車を片つぱしから覗きまはつてゐるのを見かけたとのことだ。この噂は忽ちのうちに、もうひつそりと鎭まつた野營の隅隅にまでひろまり、その輪麵麭賣りの婆さんといへば、酒賣り女の天幕とならんで屋臺店を出してゐて、朝から晩まで用もないのにコクリコクリお辭儀をしたり、ふらつく足でまるで自分の甘い商

賣物そつくりの形を描いて歩くやうな女ではあつたけれど、人々はその話だけは信用しない方が罪惡だとすら考へた。搗てて加へて、例の郡書記が壞れかかつた納屋で見たといふ怪異が、尾鰭をつけてそれに結びつけられたため、夜に入ると共に人々は互ひにからだを擦りよせるやうにした。平和は破られ、怖ろしさのために夜の眠も合はぬといつたていたらく、そこで氣の弱い連中だの、泊るべき家のある手合はそれぞれ引きあげることにした。チェレギークも、教父(クーム)や娘とともに御多分にもれずその仲間だつたが、強つて彼等といつしよに家へつれて行つて泊めてくれとせがむ連中を同道して、さては激しく門を打ち叩いてわれらのヒーヴリャを周章狼狽させた次第である。教父はもう少々きこしめしてゐた。それは彼が荷馬車を曳いたまま二度も前庭を行きすぎてから、やうやく自分の家を見つけたことからみてもわかる。客人たちも、みんなもう、ひどく上機嫌で、遠慮會釋もなく主人より先きに家のなかへづかづかと入りこんだものである。チェレギークの女房は、一同が家の隅々を穿鑿しだした時には、まつたく針の莚に坐つてゐる思ひだつた。

「姐さん、どうしただね！」教父は家のなかへ入るなり聲をかけた。「お前さんまだ搗(ハリ)をふるつてゐるだかね？」

「ええ、なんだか加減が惡いもんで。」さう答へながら、ヒーヴリャは不安らしく天井の下の棚へ眼をやつた。

「おい、おつかあ、あすこの馬車から水筒を持つて來てくんなよ！」さう、教父はいつしよに戻つて來た自分の女房に呟ひつけた。「皆の衆といつしよに一杯やるだよ。あの忌々しい婆あどもめが、他人にも話されねえくらゐおらたちを嚇かしやあがつただからなあ。まつたく、皆の衆、おらたちはくだらねえことで引きあげて來たもんぢやねえかね！」と、彼は土器の水呑みでグビグビやりながら語をついだ。「屹度あの婆あどもは、後でおらたちを嘲笑つてゐくさるだよ、でなかつたら、この場へ新らしい帽子を賭けてもええだ。よしんばまた、眞實それが惡魔だつたにもしろだよ——惡魔がいつたいなんだい？　そやつのどたまへ唾でもひつかけてやるさ！　たつた今現在この場へ、たとへばこのおいらの眼の前へ、奴が姿を現はしたとしてもだよ、おいらがもし、そやつの鼻のさきへ馬鹿握(ドウーリヤ)を突きつけて呉れなかつたら、おいらは犬畜生だと言はれても文句はねえだよ！」

「それぢやあ、なんだつてお前さんは、急に顏いろを變へたりしただね？」と、お客の一人で、誰よりも頭だけぐらゐづぬけて背が高くて、いつも自分を勇者に見せようと心がけてゐる男が叫び出した。

「なに、おいらが？……勝手にしろい！　何を寐とぼけてゐるだ？」

客たちはにやりと笑つた。口達者な男者の顏にも北叟笑みが浮かんだ。

「なあに、この人だつて、今はもう青い顏なんぞするもんか！」と。他の一人が混ぜつかへした。

「罌粟の花みてえな眞紅な頰ぺたをしてるでねえか。これぢやあこの人の名前は、ツイブーリャ（玉葱）でなくて、ブーリャク（赤蕪）か、それとも、こねえに人を嚇かしやあがつた、あの（赤い長上衣）とでも言つた方がよかんべいに。」

水筒が卓子の上をひとまはりすると、お客一同は前にもましてひときは陽氣になつた。この時、もう疾うから、その赤い（長上衣）のことで氣をもみとほしで、束の間もその穿鑿ずきな心に落ちつきの得られなかつたチェレギークが、教父のそばへにじり寄つた。

「後生だからひとつ聽かせてくんなよ、　兄弟！おらがいくら頼んでも、その忌々しい（長上衣）の由來を聞かせてくれねえんだよ。」

「おおさのう！　どうもその話を、よる夜なか話すのあ、ちつとべえ具合がよくねえだが、それでもお前や皆の衆の慰みになるちふことなら、（かう言ひながら、彼はお客の方へ向きなほつて）それにお客人たちも、どうやらお前とおなじやうに、その妖怪のはなしを聽きたがつてござるやうでもあるだから、ぢやあ、構ふことはねえや。ひとつ聽きなされ、かうなんだよ！」

そこで彼はちよつと肩を搔いて、着物の裾で顏を拭いてから、兩手を卓子の上へのせて、やをら語りだした。

「何でもある時のこと、どういふ罪でか、そこんとこあ、からつきし分らねえだが、一匹の惡魔

めが焦熱地獄からお拂ひ箱になつたちふだのう……。」

「馬鹿なことを、兄弟！」と、チェレギークがそれを遮ぎつた。「どうしてそねえなことが出來るだよ、惡魔を地獄から追んだすなんてことがさ？」

「どうもかうもねえだよ、教父つあん？　追んだしたものあ追ん出しただ、百姓が家んなかから犬を追んだすとおんなじによ。おほかたその惡魔の野郎は、なんぞ善いことをしようつてな出來心を起しをつたのかもしんねえだよ。それで出て行けつちふことになつたのぢやらうのう。ところがその可哀さうな惡魔にやあ、どうも地獄が戀しうて、戀しうて首でも縊りかねねえほどふさぎこんでしまつただよ。だが、どうにもしやうがねえだ！　そこで憂さばらしに酒を喰ひはじめをつたものさ。そうら、お前も見た、あの山蔭の納屋さ、今だに傍を通るにやあ、あらたかな十字架で、前もつて魔よけをしてからでなきやあ、誰ひとり近よる者もねえ、あの納屋を棲家にしをつてな、その惡魔の野郎め、若えもののなかにだつて滅多にゝねえやうな、えれえ放蕩をおつぱじめたものだよ。もうなんぞといへば、朝から晩まで酒場に神輿を据ゑてゐくさつたちふことだ！……」

ここでまたしても、むつかしやのチェレギークが語り手を遮ぎつた。

「兄弟、阿房なことを言ふもんでねえだ！　惡魔を酒場のなかへ入れる馬鹿が何處の國にあるだ？　都合のいいことにやあね、惡魔の手足にはちやんと鈎爪がついてるだよ、それに頭にやあ角

が生えてるでねえか。」

「ところが、どうして、そこに抜りはねえつてことよ、ちやんと奴さん帽子をかぶり、手袋をはめてるくさつただもの。どうして見わけがつくもんけえ！　飲んだの飲まねえのといつて、たうとうしめえにやあ、持つてるただけ、きれいさつぱりと、残らずはたいてしまやあがつただよ。長げえあひだ信用しとつた酒場の亭主も、やがてのことに信用しなくなつてのう。とどのつまり悪魔の奴め、自身の身に著けてゐた赤い長上衣をば、せいぜい値段の三が一そこそこで、その當時ソロンツイの定期市に酒場を出してゐた猶太人のとこへ飲代の抵當におくやうな羽目になつただよ。抵當において、さて猶太人に向つて、(いいかえ猶太、おいらはかつきり一年たつたら、この長上衣を請け出しに來るだから、それまでちやんとしまつといて呉んろよ！)――さう言つておいて掻き消すやうに姿を隠してしまつただ。猶太人がよくよくその長上衣を見るてえと、生地はとてもとてもミルゴロド界隈で手に入るやうな代物ではなく、そのまた赤い緋の色がまるで燃えたつやうで、じつと見つめちやあゐられねえくらゐ！　ところが猶太人め、期限になるまで待つてをるのが惜しくなつただのう。畜生め鬢髪を撫で撫で、さる旅の旦那衆にそれをうまく押しづけて、五チェルヲーネツはたつぷりせしめやあがつただよ。約束の日限なんぞ、猶奴の野郎すつかり忘れ果ててしまつてゐただ。ところが、ある日の夕方のこと、一人の男が入えつて來て、(さあ、猶奴、おいらの長上衣

を返してもらはう！)つて言ふだよ。猶奴め最初はまつたく見憶えがなかつただが、よくよく見れば、くだんの男なので、てんから思ひもよらぬといつた顔つきをしやあがつて、(それあまた、どんな長上衣のことですかね？　手前どもには長上衣なんてものあ一つもありましねえだ！　てんでお前さまの長上衣なんて知りましねえだよ！)と、空とぼけて見せをつたものさ。するてえと、男はフイと出て行つてしまつただよ。ところが、やんがて夜になつて、猶奴のやつが自分の荒ら家の戸を閉めきつて、長持の中の錢を一とほり勘定し終つてから、上掛けをかぶつて、猶太流に祈禱をはじめをつたと思ひなされ――何か物音がするだよ……ひよいと見ると――窓といふ窓から、豚の鼻づらがうちん中を覗き込んでるでねえか……。」

この時ほんとに、何かはつきりはしないが、とても豚の啼き聲に似た音が聞えた。一座の者はは

「なんだろ？」と、膽をつぶしたチェレヰークが口をはさんだ。

「なんでもねえだよ！……」さう答へながら、教父はからだぢゆうをガタガタ顫はせてゐる。

「ええつ！」客の一人がさう口走つた。

「お前さんがいつただんべ？」

「いんにや！」

「いつたい誰が鼻を鳴らしただ？……」

「馬鹿々々しいつたら、何をおれたちやあ大騷ぎしてるだ！　ビクつくこたあ、なんにもありやしねえやな！」

それでも、一同はびくびくして、あたりを見まはしたり、部屋の隅々へ眼をくばつたりしはじめた。ヒーヴリャはまるで生きた心地もなかつた。「まあ、ほんとにお前さんたちは女つ子だよ、まるで女つ子だよ！」と、彼女は大聲をあげて喚いた。「お前さんたちが男一匹で、哥薩克の働らきが出來ようなんて、とても思ひもよらないよ！　お前さんたちにやあ、紡錘を持つて糸車のまへに坐るくらゐが分相應だよ！　あれあ屹度、何だよ、誰かがお屁をしたのか……それとも誰かのお尻の下で腰掛が鳴つただけのことさ。それだのに、みんなが狂人みたいに跳びあがるなんて！」

この言葉にわれらの勇士たちは氣恥かしくなつて、强ひて空元氣をつけた。そこで敎父は水筒から一口あふつて、またもや續きを話しはじめた。「ところで、その猶奴は氣を失つてしまつただよ。だが、豚どもは竹馬みたいにひよろ長い脚で窓を跨いで中へ入えると、いきなり、三本縒の革鞭を振りあげて、あの横梁よりも高く猶奴が跳ねあがつたくれえ、こつぴどく野郎を擲りつけて正氣に戻しただ。するてえと、猶奴のやつめ、這ひつくばつて何もかも白狀してしまつただよ……。だが、長上衣をさつそく取り返すつて譯にや行かなかつただ。なんでも道中でその旦那衆からジプシイが

長上衣を盜んで、それを女商人に賣りつけをつたのだ。そのまた女商人がそれを持つてこのソロチンツイの定期市へやつて來たちふ譯だが、それ以來、その女商人の商品がさつぱり捌けなくなつてしまつただよ。だもんで女商人はひどくそれを不思議に思つたが、やがてそれが何もかも、てつきりその赤い長上衣のせゐだと氣がついただ。成程さういへば。それを著るてえと妙にからだが緊めつけられるやうな氣がするだよ。そこで前後の考へもなく、いきなりそれを火のなかへおつ抛りこんだだが、その魔性の着物は燃えもしねえだ！……（ええ、こりや飛んでもねえ惡魔のお土産だ！）つてんでな、女商人はいろいろと思案にくれた擧句、バタを賣りに來てゐた或る百姓の荷馬車へそれをこつそり押しこんだだよ。頓馬な百姓め、ほくほくもので悦に入りをつただが、賣りもののバタはからつきし、値踏みひとつする者もねえ始末さ、（ええ、忌々しい、この長上衣は惡魔の手からわたつたものに違えねえ！）さう言ひざま、斧を取つて、それをばズタズタに截りきざんでしまつただよ。ところがどうだ、その一切れ一切れが寄りあつまつて、またぞろもとのやうにちやんとした長上衣になるでねえか！　そこで今度は十字を切つて、もう一度それを斧で斷ちきつて、その切つぱしを、どこここなしに撒きちらしておいて行つてしまつただよ。その時からこつち、毎年、定期市の時分になるてえと、きまつて豚の假面をかぶつた惡魔めが、廣場々々をほつつきまはつて、鼻を鳴らしながら、自分の長上衣の切れつぱしを拾ひあつめて歩くつてえだ。なんでも、今ぢやあ、

もう左の袖口だけが目つからねえばつかりだつてえこんだ。それからこつち、誰ひとり怖氣をふるつて近寄らねえもんで、ここに定期市が立たねえやうになつてから、かれこれもう十年にもなるべえ。だのに、その悪魔めが、今度はあの委員の野郎を抱きこみやあがつて……」

かう言ひかけた言葉の半ばが謂り手の唇のうへで消えてしまつた——窓が騒々しく打ち叩かれて、硝子が唸りを立ててけし飛んだ。そして物凄い醜面が、そこからにゆつとばかりに中を覗きこんで、まるで(昔の衆、いつたいここで何をしてゐなさるだね?)とでも訊ねるやうに、じろじろと眺めまはした。

八

……犬のやうに尻尾を巻き、カインのやうにわななきながら、鼻の孔から鼻水をたらした。

——コトウリヤレフスキイ『エニェイータ』より——

家のなかにゐた者はみんな恐怖に打たれてしまつた。教父は口をぽかんとあけたまま、まるで化

石したやうにからだを硬ばらせてしまつた。兩の眼は今にも飛び出しさうなくらゐ、かつと見開かれ、指をひろげた兩手は宙に浮いたままピクとも動かなかつた。例の長身の勇士が、驚愕のあまり天井へ跳ねあがつて、横梁を頭で小突き上げたため、棚板が外れて、ガラガラつと物凄い音を立てさま、祭司の息子が地面へ轉げ落ちてきた。

「ひやあつ!」と絶望的にわめいて一人の男は、怖ろしさのあまり腰掛の上へ打つ伏しになつて、兩手と兩足でそれにしがみついた。

「助けてくれえつ!」さう喚いて他の一人は、頭から外套をひつかぶつた。

再度の驚愕でやうやく我れに返つた教父は、わなわなと顫へながら女房の裾のしたへ潜りこんだ。長身の勇士は狭い焚口から無理やり煖爐(ペチカ)のなかへ這りこむなり、自分で焚口の扉を閉めてしまつた。チェレヰークはといふと、まるで熱湯でもぶつかけられたもののやうに、帽子の代りに甕を頭にかぶつて、戸外へ駈け出すたり、狂人のやうにろくろく足もとも見ずに往來をひた走りに走つたが、やうやく疲勞のために駈ける足の速力がゆるんで來た。彼の心臓はまるで磨粉場の臼のやうに激しくうち、汗が玉をなして流れた。疲れはてて、今にも地面へぶつ倒れさうになつた時、ふと彼の耳に、誰か後ろから追つてくるらしい跫音が聞えた……。彼の息の根はとまつてしまつた……。

「悪魔だ! 悪魔だ!」と、彼は氣を失ひながらも精いつぱいに叫んだが、一瞬の後には、知覚

を失つて地上へぶつ倒れてしまつた。

「悪魔だ！悪魔だ！」さういふ聲が彼の後ろの方でも聞えた。そして彼は何ものかがけたたましく自分に襲ひかかつたやうにだけは感じたが、ここで彼の記憶の糸はとぎれて、窮屈な棺桶のなかの不氣味な住人のやうにおし默り、そのままピクとも動かず路の眞中にのびてしまつた。

九

前から見ればともかくも、
後ろ姿は、あれ、鬼だ！
——民謡の中より——

「なあ、ウラース！」と、往來に寢てゐた連中の一人が、眞夜なかに頭をもちあげて言つた。「おいらの近くで誰だか、悪魔だあつて呼んだでねえか！」

「おらになんの關係があるだ？」傍に寢てゐたジプシイが、伸びをしながら呟やいた。「よしんば、洗ひざらひ身うちの者の名を呼んだにしてからがさ！」

「だけんど、なんだか咽喉を緊めつけられるやうな聲だつたでねえか！」

「人が寢言に何をいふか知れたもんでねえつてことよ！」

「それあともかく、ちよつと見て來るだけでも見て來てやらにやあ、おめえ一つ火を燈つてくんなよ！」

片方のジプシイはぶつくさ言ひながら立ちあがつて、二度ばかり稻妻のやうな火花を浴びると、口をとんがらして火口を吹いてゐたが、やがてカガニェーツ——それは陶器のかけらに羊の脂をたたへたもので小露西亞では普通一般の燈火である——を手にして、道を照らしながら歩き出した。

「ちよつと待つた！　ここになんだかうづくまつてゐるだよ。燈火をこつちい見せろよ！」

この時、また幾人かの連中が彼等に加はつた。

「何がうづくまつてるだよ、ウラース？」

「なんでも人間が二人らしいだが、一人が上に乘つかつて、一人が下になつてるだ。はあてな、どつちが悪魔だか、見當がつかねえだよ？」

「そいで、上に乘つてるなあ、なんだい？」

「女あだ！」

「そいちやあ、そいつがてつきり悪魔だんべや！」

どつと一時に哄笑が往還に響ろきわたつた。

「女あが人の上に乗つかつてるからにやあ、この女あめ、てつきり人を乗りまはす術を知つてるにちげえねえだよ！」と、輪になつてゐた群衆の中の一人が言つた。

「おい、みんな見ろやい！」と、別の一人が甕の破片を手に取りあげながら言つた。その甕の残りの半分だけがチェレギークの頭に被さつてゐるのだつた。「なんちふ帽子をこの大將はかぶつてやあがるんだい！」

騒ぎの音と笑ひ聲が大きくなつたため、それまで氣を失つてゐたソローピイとその女房は息を吹き返したが、さつきの驚愕からまだ醒めきらぬ二人は、長いあひだ、きよとんとした眼でおどおどと、浅黒いジプシイたちの顔を見つめてゐた。ほの暗く、顫へながら燃える灯火に照らし出されたジプシイたちの顔は、夜ふけの闇のなかに、さながら陰惨な地底の水蒸氣につつまれた奇怪な魑魅魍魎のつどひかとも思はれるのであつた。

十

悪魔のそそのかしだ。

——小露西亞喜劇より——

すがすがしい朝風が目覚めたばかりのソロチンツイの上を吹きわたつた。どの煙突からも煙の渦が日の出を迎へにたちのぼつた。市場はがやがやとざわめき出した。羊や馬が嘶きはじめ、鶏鳥や女商人の喚き聲が再び市場ぢゆうにひろがつた——そして不氣味な夜明け前にあんなに人々を怯えあがらせた、くだんの（赤い長上衣）の怖ろしい取沙汰も黎明の光りと共に消え失せた。

欠びをしたり、伸びをしたりしながらチェレギークは敎父の家の藁葺の納屋で、去勢牛だの麥粉や小麥の袋のあひだにはさまつて、うつらうつらと夢路をたどつてゐた。が、その快い夢見心地から目醒めようなどとは、てんで思ひもかけぬもののやうであつた。ところが不意に、よく耳馴れて、あたかも彼が密かに懶惰に耽る自分の家の樂しい煖爛棚（レジャンカ）か、それともわが家の敷居からものの十歩とは離れてゐない、遠縁の者の開いて居る居酒屋とおなじぐらゐ、彼に馴染の聲が耳にはいつた。

「いい加減にお起きよ、お前さん、お起きつたらさ！」と、その耳もとで嗄がれ聲を張りあげながら、優しい奥方が力いつぱい彼の手をひつぱつた。

チェレギークは返辭をする代りに頰べたを膨らまして、兩手で太鼓を打つ眞似ごとをおつぱじめた。

「きちがい！」と叫んで、女房は、あやふく自分の顔をひつぱたきさうな亭主の手から身を退いた。

チェレギークは起きあがると、ちよつと眼をこすつて、あたりを見まはした。

「なあ、おつかあ、正眞正銘、嘘いつはりのねえ話だが、おめえのその御面相が太鼓に見えてさ、おいらがその太鼓で朝の時刻を打たにやあなんねえことになつてよ、そうら、あの教父の話した、べてん師を豚面どもが何したとおんなじやうに、その……。」

「もうたくさんだよ、そんな阿呆ぐちを叩くのはよしとくれ！さあさあ、早く牝馬を賣りに行くんだよ。ほんとに、いい笑はれもんだよ、定期市へ出かけて來て、苧麻ひと握りよう賣らないなんて……。」

「だつてさ、おつかあ！」と、ソロービィがすぐにその口尻をうけて言つた。「屹度、おいらをみんなが笑はあな。」

「さあさあ、おいでなさいつたら！　あんなことはなくたつて、どうせお前さんは笑はれものなのさ！」

「だつて、おめえ、おいらがまだ顔も洗つてゐねえことは分つてゐべえ。」さういひながらもチェレギークは、欠びをしたり、背中をボリボリ掻いたりして、さうしてゐる間だけでも怠ける時間を引きのばさうとするのであつた。

「おやおや、とんでもない時に、清潔ずきな氣まぐれを起したもんだよ！　つひぞお前さんが顔なんか洗つたためしがありますかね？　そら、手拭をあげますよ、これでその御面相を撫でまはしておけばいいでしよ。」

かう言つて彼女は何か卷きかためたものを手に取つたが——ぎよつとして、それから手を振りはなした。それは（赤い長上衣の袖口）だつたのだ！

「さつさと出かけて行つて、商賣をしていらつしやいつたらさ！」と、自分の亭主が怖ろしさのあまり腰を拔かして、齒をガタガタ鳴らしてゐるのを見ると、彼女はやつと氣を取りなほして言つた。

（もう商賣もあがつたりだんべえ！）かうひとりごとを言ひながら、彼は牝馬の手綱をほどいて廐場へ曳きだした。（ほんに、さういえば、この忌々しい定期市へ出かける時だつて、何だか牛の死骸でも背負はされたやうな重つ苦しい氣持がしただて、それに去勢牛どもめが二度ばかり家の方へ後もどりをしかけやがつた。それから、どうも今になつて考げえて見ると、おいらは月曜日に家を

出たやうだぞ。なるほど、それがそもそもよくなかつただ！……忌々しい、性懲りもねえ悪魔の野郎めが、片ぽうくれえ袖口がなくつたつてよかりさうなもんだに、しやうもねえ、なんの罪科もない人間を騒がせやあがるだ。假りにおいらがその悪魔だとしたら——あつ、鶴亀鶴亀！——そんな碌でもない襤褸つきれなんぞ探しに、よる夜なかうろつきまはるなんて馬鹿な真似をするかしらんて？」

この時、われらのチェレギークの推理の糸は突然、ふとい頓狂な聲のために断ちきられた。彼の眼の前には背の高いジプシイが突つ立つてゐた。

「いつたい何を賣りなさるだね、お前さんは？」

賣り手は口をつぐんだまま、相手を、足の爪先から頭の天邊まで、じろりと眺めただけで、歩みを止めようともせず、手綱をしつかり手ばなさないやうにしながら、落ちつきはらつた顔つきで、かう答へたものだ。

「おいらが何を賣るだか、自分の眼で見たらよかんべえ！」

「革紐を賣りなさるだかね？」と、ジプシイはチェレギークの握つてゐる手綱を見ながら訊ねた。

「さうさな、牝馬が革紐に似とるやうなら革紐としておくべえか。」

「それでも、をかしいやね、お前さん、それにやあ、どうやら麥藁ばつかり食はせなすつたと見さるだね？」

「麥藁ばつかり食はせたと？」

玆でチェレギークは手飼ひの牝馬を突きつけて、この恥知らずな誹謗者の鼻をあかせてくれようものと、手綱をぐつと曳かうとしたが、しかし意外にも手應へがなくて、彼の手ははずみを喰つて頃へぶつかつた。見れば、手にあるのは断ち切られた手綱だけで、しかもその手綱には——おお怖ろしや、彼の髪の毛は一時に逆立つた！——（赤い長上衣）の袖口のきれつぱしが結びつけてあるではないか！……ぺつと唾を吐いて、急いで十字を切ると共に、兩手を泳ぐやうに振りながら、その思ひもかけぬ土産物から逃れようとして、彼は一目散に駈け出したが、その速いこと速いこと、血氣の若者そこ退けといつた歩調で忽ち群集のあひだへ姿を消してしまつた。

十一

わが麥のことで他人に打たれる。

——諺——

「とつ捉まへろ！　そいつをとつ捉まへろ！」と數人の若者が狹い町はづれで呶鳴つた。そして、氣がつくと、チェレギークは不意に頑丈な手で取り押へられてゐた。

「こいつを縛りあげるんだ！　てつきりこいつめが、堅氣な人間の牝馬を盗みやあがつたんだよ。」

「とんでもねえ！　なんだつておいらを縛るだね？」

「あべこべにこいつの方から訊いてやがら！　あそれぢやあ、なんだつて手前は、この定期市へやつて來てゐる百姓のチェレギークの牝馬を盗みやあがつたんだ？」

「お前さんがたは氣でも狂つただかね、若い衆たち！　どこの國にわれとわが物を盗む阿呆があるだ？」

「古い手だよ！　古い手だよ！　ぢやあ、なんだつて手前はまるで自分の踵へ惡魔が追ひつきかかりでもしたやうに、矢鱈無性に逃げ出しやあがつたんだ？」

「逃げもせにやあなるめえて、惡魔の着物が……。」

「ええ、こいつめ！　その手でおいらを誤魔化さうたつて駄目だぞ。待つてろ、今に委員から二度と再びそんなペテンで人を驚かせないやうに、きつと成敗があるから。」

「とつ捉まへろ！　そいつをとつ捉まへろんだ！」さういふ叫び聲が反對がはの町端れであがつた。「そうら、そこへ逃げてゆくぞ！」

やがて、我がチェレギークの眼前へ、後ろ手にいましめられて、數名の若者に引つ立てられた、見るも痛ましい敎父の姿が現はれた。

「稀代なこともあるものさ！」と、そのなかの一人が言つた。「この、ひと目で泥棒だと吟る惡黨の言ひ草を聽いてくれ。どうして狂人みてえに突つ走つたんだと訊ねると、その答へがかうだ——『喫煙草を喫はうと思つて衣嚢（ポケット）へ手を突つこんだら、喫煙草入の代りに、惡魔の（長上衣（スイートカ））のきれつぱしが出てきて、そいつが赤い焰をあげて燃えあがつたから、後をも見ずに駈けだしたんだ』とさ！」

「おやおや！　さては、こ奴ら二人は、てつきりひとつ穴の狐に違えねえぞ！　兩方いつしよに繋いでおくことにしよう。」

十二

（なんで、あなた方はかう私を責めなさるんで？

（どうしてこんなにいぢめなさるんで？）と哀れな彼が言つた。

（何をそんなにこの私をからかひなさるんで？

（ええ何を、何をそ）さういつて、ぽろぽろと苦い涙をこぼしながら、手を拱ぬいた。

——*アルテモフスキイ・グラーク『旦那と犬』より——

「ひよつと、どうかして、お前、ほんとになんぞちよろまかしたんぢやあねえかい？」から、敎父と一緒に繫がれて、藁葺き小舍の中で横になつたまま、チェレギークが訊ねた。

「お前までがそんなことを言ふのかい、兄弟？　お袋の眼を盜んで、酸乳脂をつけた肉入團子を摘んだよりほかに——それもおいらが十歲ぐれえの時の話だが——それよりほかに、つひぞ他人さまの物に手をかけたことがあつたら、この手足が干からびてしまつてもええだよ。」

「ぢやあ、なんだつておれたちあこんな酷い目に會ふだね？　お前はまだしものことよ、ともかく他人の物を盜つたつちふ言ひがかりを受けとるだから。ところが、おいらくれえ不仕合せな者があるだらうか、われとわが牝馬を盜んだなんちふ性の惡い言ひがかりをされてさ？　屹度これあ、なんでも前の世からの因果で、こんな不運な憂目を見ることだべえなあ！」

「情けねえことぢや、まつたくみじめな、賴りない身の上ぢやよ！」

かういつて敎父同士は、めそめそと吸りあげて泣きだした。

「これあまた、どうしたといふだね、ソローピイのお父つあん？」と、ちやうどその時そこへ入つて來た、グルイツィコが聲をかけた。「いつたい、どいつがお前さんを縛つたんだね？」

「あつ！　ゴロブペンコだ、ゴロブペンコだ！」と、ソローピイは嬉しさのあまり叫び出した。

「おい、兄弟、これが、そら、お前に話したあの當人だよ。それあ見ものだぞ！　お前の頭よりでつかいくれえのコップを、おらの眼のまへで顏ひとつ擊めねえで呑み乾しただもの。それが嘘だつたら、この場でおいらに天罰が降る筈だ！」

「ぢやあ、兄弟、なんだつて、お前はそれえな素晴らしい若い衆に恥いかかしただ？」

「この態あ見てくんな。」さう、チェレギークはグルイツィコの方へ向きなほつて言葉をつづけた。「てつきり、お前に恥いかかした罰が當つただよ。どうか勘辨してくんな！　どこまでもおらはお前の肩さ持ちたかつただが……。けんど、どうしやうがあるだ？　婆あの肚のなかには惡魔が巢くうてゐるだもん。」

「そんなことあ、おいら、根に持つてやしねえだよ、ソローピイのお父つあん！　なんなら軀を自由にしてあげるぜ！」

そこで彼は見張りの若者たちにめくばせをした。すると彼等は逸速くいましめの繩を解きにかかつた。

「そのかはり、ちやんと婚禮の運びにして貰はうぜ！　さうしてゴバックでまる一年も足の痛えほど、うんと一つ騒ぐことさ！」

「願つたり叶つたりだよ！」ソローピイはぽんと手を叩いて答へた。「ああ、ほんとに今おいらはいい氣持だ、まるで人買ひがうちの婆あを引つ浚つて行つて呉れでもしたやうにさ！　なあに、かれこれ考へるこたあねえだよ！　善からうが惡からうが構ふこつてねえだ――けふぢゆうに婚禮を擧げつちまやあ、なんてつたつて後の祭りだあな！」

「ぢやあ、屹度だぜ、ソローピイのお父つあん。一時間もしたらお前さんとこへ行くだからね。まあ、急いで歸りなすつた方がいいぜ。あつちでお前さんの牝馬や小麥の買ひ手が待つてる筈だからさ！」

「なんだと、牝馬が見つかつたちふだか！」

「見つかつたとも！」

去り行くグルイツィコの後ろ姿を見送りながらチェレギークは、あまりの嬉しさにしばし棒だちになつてたたずんでゐた。

「どうだね、グルイツィコ、おいらがりうりうの細工はまづかつたかね？」さう、くだんの背の高いジプシイが、途を急ぐ若者に向つて聲をかけた。「去勢牛はもうおいらのものだらう？」

「手前のもんだよ！　手前のもんだよ！」

十三

何も怖がることはない、
赤い上靴はいたなら、
可愛いお前のその足で
踏んづけさんせ仇きをば
お前の靴の踵鐵（そこがね）が
鳴りひびくほど！
その敵が
鳴りをしづめてしまふほど！

――婚禮唄――

ひとり家の中に坐つたまま、パラースカはその美しい頤に肘杖をついて、物思ひに沈んでゐた。

さまざまな空想が亞麻いろの頭のぐるりを旋廻した。時々、ほのかな微笑が不意に、その紅いろの唇に浮かんで、何やら喜ばし、想ひが黒い眉をもたげるのであつたが、時にはまた憂への雲がそれを駑色の澄んだ眼の上へおしさげた。

（もしや、あのひとの言ふやうな上々の首尾にいかなかつたら、どうしようかしら？）彼女は何かしら疑念の色を浮かべながらかう呟やいた。（もしや、あたしをお嫁にやつてくれなかつたら、どうしよう？　もしか……。ううん、そんなことつてあるものか！　義母さんだつて自分の好きな眞似をしてるんだもの、あたしだつて、かうと思ひ立つたことを退けて悪いわけはない筈よ。強情のはりつくらなら負けやしないわ。あのひと、ほんとに好男子だわ！　あのひとの黒い眸が、なんて美しく輝やくことだらう！　あのひとの口からもれる『可愛いパラーシュ！』つていふ言葉の優しさ！　あのひとには、あの白い長上衣がとてもよく似あふわ！　帶がもう少し派手だつたら、もつと好いんだけれど！……いいわ、今にあたしたちがほんとに新らしく家を持つやうになりさへすれば、あたしが織つてあげるから。まあ、思つただけでもぞくぞくするわ！）さう言ひながらも彼女は、市で自分に買つた、赤い紙で縁を貼つた小さな鏡を懐ろから取りだすと、祕やかな悦びをもつてそれを覗きこんだものだ。（さうなつたら、あたし、どこで義母さんにでつくはさうが、間違つても挨拶なんかしてやらないから。どんなに猛らうが狂はうがかまやしない。さうだとも、ねえ義母

さん、いくらあんただつて、もう自分の織娘をひつぱたいたりなんか出來ないことよ！　あたしや、砂が石の上で芽をふくことがあつたつて、樫の木が枝垂柳のやうに水ん中へお辭儀をつくことがあつたつて、決してあんたの前へ頭はさげないことよ！　あら、さうさう忘れてゐたわ……頭巾帽をかぶつて見なきやあ、義母さんのでも、どうにかあたしに間にあふかしら？）

そこで彼女は鏡を兩手で持つたまま立ちあがると、俯むいてそれを覗きこみながら、ころびはしないかと危ぶむやうな、おつかなびつくりの歩調で、床ではなく、昨夜あの祭司の息子が眞逆様にころげ落ちた、くだんの板の取りつけられた天井や、壺の並べてある棚を眼下に見おろしながら、部屋のなかを歩きまはるのであつた。

（ほんとに、あたしつたら、まるで赤ん坊だわ。）さう、笑ひながら彼女は呟やいた。（足を踏みだすのが怖いなんて！）

やがて彼女は足拍子を取りはじめると――だんだん大膽になつて、たうとう終ひには左手を鏡からはなして腰にあて、靴の踵鐵の音も高らかに、鏡を片手で前にささへたまま、好きな自分の唄を口吟みながら踊りだした。

低くさがつて床になれ！
眉毛の黒い、好いひとは
こつちいちよいとお寄んなさい！
青い青い蔓雁來は
もつとさがつて床になれ！
眉毛の黒い、好いひとは
もつとこつちいお寄んなさい！

ちやうどその時、チェレギークが、戸口へ近よつたが、わが娘が鏡を覗きながら、しきりに踊つてゐるのを見て、その場に足を停めた。つひぞない娘の氣紛れに噴きだしながら、暫らくはそれに見惚れてゐたが、すつかり夢中になつてゐる娘はなんの氣もつかぬらしい樣子だつた。ところが、懐かしい歌の調べを耳にするとチェレギークの胸の血がさわぎだして、やをら誘りかに兩手を腰につがへて前へ進み出るなり、彼は前後を忘れてしやがみ踊りをおつ始めたものだ。その時、からからといふ教父の高笑ひが二人をぎよつと震ひあがらせた。

「いや、結構々々、こんなところで親爺と娘が婚禮の前祝ひをやらかしてゐるだな！　さあ、早く來るだよ、聟殿がござつただから。」

この最後のひと言にパラースカは、自分の頭の束ねられたリボンの色よりも濃く、頰を赧らめたが、暢氣な父親もやうやく自分の歸宅した用件を思ひだした。

「さあ、娘、急いで出かけるだよ！　ヒーヴリャの奴め、おいらが牝馬を賣つたら、大喜びで飛んで行きをつただよ。」さう言ひながらも、彼は不安さうにあたりを見まはした。「下着だの、いろんな布地だのをしこたま買ひこむつもりで駈け出して行きをつただから、彼女の戻つて來ねえうちに、何もかも晃をつけてしまはにやなんねえだよ！」

パラースカは家の閾を跨ぐがはやいか、自分のからだが白い長上衣を著た若者の胸に抱きすくめられたのを感じた。彼はおほぜいの人だかりといつしよに、往來で彼女を待ち受けてゐたのであつた。

「主よ、祝福を垂れ給へ！」と、チェレギークが二人の頭の上に手を置いて言つた。「この二人が、とも白髪の末まで、幾ひさしく添ひとげまするやうに！」

この時、群衆の中にざわめきが起つた。

「どうしてどうして、滅多にそんなことをさせて堪るもんか！」から、ソローピイの配偶者が躍起になつて喚きたてたが、群らがる人々がげらげら笑ひながら、後ろへ後ろへと彼女を押し戻した。

「逆せあがるでねえだよ、、逆せあがるでねえだよ！　おつかあ！」とチェレギークは、頑丈なジプシイが二人がかりで女房の兩腕を押へてゐるのを見て、いやに落ちつき拂つて言ふのだつた。

「いつたん出來てしまつたこたあ、どうもしやうがねえだよ。變改するつてことあ、おら大嫌えだで！」

「いけないつたら、いけないよ！　そんな勝手な眞似をさせてなるもんか？」と、ヒーヴリャはなほも喚き立てたが、誰ひとりそれに取りあふものはなかつた。幾組もの男女が新郎新婦をとりかこんで、二人のぐるりに蟻の這ひ出る隙もない舞踏の壁を作つてしまつた。

粗羅紗の長上衣を著て長い泥鰌髭をはやした樂師が弓を一觸するや、一同の者が否應なしに、一齊に調子をそろへて踊り出す、その光景を眺めては、なんとも形容しがたい一種不可解な感に打たれざるを得なかつた。恐らく生涯に一度もその氣むづかしい顏に笑ひを浮かべたことのなささうな連中までが、足拍子を取つたり、肩をゆすぶるのであつた。誰も彼もがゆらゆらと搖れながら、踊りまはつた。しかし、古ぼけた顏に墓場のやうなそつけなさを表はした老婆たちが、若い、喜々として笑ひ興ずる、元氣潑剌たる人々のあひだに揉まれてゐる有樣を一瞥したなら、更に奇妙で一層合點のゆかぬ思ひが心の奥底に湧きたつたであらう。まことにたわいもない老婆たちだ！　子供らしい喜びもなければ、同感の閃めきもなく、ただ酒の力がまるで魂のない自動人形を操る機械師の

やうに、彼女たちに人間らしい動作を強ひてゐるだけで、ふらふらと醉ひしれた頭を振り動かしながら、新郎新婦の方へは眼を向けようともせず、ただ浮かれさわぐ群衆のあとについて踊つてゐるだけであつた。

やがて、轟ろきと、笑ひと、歌聲とがだんだん靜かになつていつた。茫漠たる虛空の中に、はつきりしない響きをぼかし、消して、いつか弓の音も跡絶えてしまつた。まだ、どこかで遠い海洋の呟やきにも似た足拍子の音だけは聞えてゐたが、間もなく一切の萬象が空寂の底に沈んでしまつた。

ちやうどこのやうに、歡びといふ美しくて移り氣な訪客がわれわれの許を飛び去つたあとではただ佗しい音だけが過ぎ去つた歡樂を物語るのではなからうか？　音そのものが既におのれの反響のなかに悲哀と寂莫の聲を聽きながら、奇しくもそれに耳傾けてゐる。不羈奔放な、荒ぶる青春の遊び友だちが一人また一人と次ぎ次ぎに世を去つて、つひにはただひとり彼等の仲間を置き去りにするのも、ちやうどこれと同じではなからうか？　取り殘された者は寂しい？　ひしひしと胸せまり、悲しみに心はふさがれても、如何とも慰めよう術もない。

——一八三〇年——

*イワン・クバーラの前夜

（×××寺の役僧が話した事實譚）

フォマ・グリゴーリエギッチには一種奇妙な癖があつた。あの人はおなじ話を二度と繰りかへすのが死ぬほど嫌ひだつた。どんなことでも、もう一度はなして貰ひたいなどと言はうものなら、きまつて、何か新事實をつけ足すか、でなければ、まるで似ても似つかぬものに作りかへてしまふのが、いつもの傳であつた。ある時のこと、一人の紳士が、――とはいへ、われわれ凡俗にはああした人たちをいつたいどういつて呼ぶべきかが既に難かしい問題なんで、戯作者かといふに戯作者でもなし、いはば定期市（ヤールマルカ）の時にこちらへやつて來る、あの仲買人とおんなじで、矢鱈無性に掻きよせて、何彼の差別なく一手に引き受け、剽竊の限りを盡してからに、ひと月おきか一週間おき位に、いろは本より薄つぺらな小冊子を矢繼ぎばやに發行するといつた手合なんだが――さうした紳士の一人が、他ならぬこの物語をフォマ・グリゴーリエギッチから聽きこんだ譯だが、フォマ・グリゴ

トリエギッチの方はもう、そんなことはとつくに忘れてしまつてゐたのぢや。ところが或る日のこと、ボルタワから、他ならぬその紳士が豌豆色の上つ張りを著こんでやつて來たのぢや――この仁のことは、いつかお話したこともあるし、當人のものした或る小說は諸君もすでに一讀されたことだらう――とにかく、やつて來るなり、この先生、小さな本を一冊だして、その中ほどを開いてわれわれに示したものぢや。フォマ・グリゴーリエギッチはやをら眼鏡を引きよせて、鼻へ掛けようとしたが、それに糸を卷きつけて蠟で固めておくことをつい忘れてゐたのに氣がつくと、その本をわたしの方へさし出したのぢや。わたしは、これまでもまあどうにか讀み書きも出來るし、眼鏡をかけるにも及ばないので、さつそくそれを受けとつて讀みにかかつたといふ譯さ。ところが、ものの二枚とははぐらないのに、あの人はいきなり、わたしの手を押へておしとどめたものぢや。

「ちよつと待つて下され！　まづ初めに、いつたい何をお讀みになるのか、それを一つ伺つておきたいものぢやて。」

正直なところ、そんなことをきかれてわたしは少々あつけに取られた。

「何を讀むですつて、フォマ・グリゴーリエギッチ？　あなたのお話ですよ、あなたが御自身でなすつた物語ぢやありませんか。」

「いつたい誰がそんなものをわたしの物語だと言ひましたんで？」

「論より證據ぢやありませんか、ここにちやんと刷りこんでありまさあね、（役僧某これを物語る）と。」

「ちえつ、そんなことを刷りこみをつた奴の面に唾でも引つかけておやりなされ！　大露西亞人の畜生めが、蠟八百で固めをる！　誰がそんな風に話すもんですかい？　まるで鄒のゆるんだ桶みたいな、ぼんくら頭の野郎ぢやて！　まあお聽きなされ、それぢやあ、改めて一つその話をいたしませう。」

われわれが卓子へすりよると、彼は次ぎのやうに語りはじめた。

わしの祖父といへば、（どうか、あのひとに天國の惠みがありますやうに！　またあの世では小麥粉の白麵麭と、蜜をつけた罌粟餡麵麭ばかり鱈腹食べてをりまするやうに？）　いや實に話上手な人ぢやつた。よく祖父が話をはじめると、まる一日ぢゆう席を立たずに聽き入つても飽きなかつたものぢや。とてもとても、今時の道化どもが口から出まかせの蠟八百を、ものの三日も飯を食はなかつたやうな舌まはりでやりだしたが最後、さつそく帽子を掴んで戸外へ飛び出さずにゐられないといつた、あんな手合とは、てんで比べものにもなんにもなつたものぢやない。今もまざまざ思ひ出すのは、亡くなつた老母がまだ存命ちゆうの頃のことでな――戸外では酷寒がぴしぴしと音を立ててゐ、自宅の狹い窓をこちこちに凍てつけるやうな冬の夜長の頃、母は麻梳の前で長い長い絲を手

繰りだしながら、片方の足で揺籃をゆすぶりゆすぶり、子守唄をうたつてゐたつけが、その唄聲が今もわしの耳の中で聞えてをりますわい。油燈はなんぞに怯えでもしたやうに顫へてパチパチと燃えながら、うちの中のわしたちを照らしてゐる。紡錘はビイビイと唸つてゐる。そこでわしたち子供一同は一塊りに寄りたかつて、老いこんでもう五年の餘も煖爐から下りて來ない祖父の話に聽き入つたものぢや。したが、遠い遠い昔の物語や、ザ*ポロージェ人の遠征、波蘭人の話、さてはポド*ゥコーワだの、ボ*ルトラ・コジューハだの、サ*ガイダーチヌイだのの武勇談、さういつた風な昔語りよりは、どちらかと言へば、何かかう、古めかしい怪異物語の方にわたしたちはずつと牽きつけられたものぢや。さういふ妖怪變化の話を聽くと、いつも軀ぢゆうがぞみぞみして、身の毛もよだつ思ひだつた。さもなければ、さうした怪談の怖さがたたつて日の暮れあひからは、眼にうつるものが皆、あやしげな化生のものの姿に見えたものぢや。どうかした拍子で夜分、うちを空けでもすることがあると、必らずそのあひだにあの世から迷つて來た亡者がわが寢床にもぐりこんでゐはせぬかと、無性に氣づかはれてならなんだ。いや、まつたくの話が、自分の寢臺の枕もとにおいてある長上衣を遠くから見て、てつきり惡魔がうづくまつてゐるのぢやないかと思つたことも再々のことでな、それが嘘なら、こんな話を二度と聞かせるをりのない方がましなくらゐぢや。祖父の物語でいちばん肝腎要なところは、祖父が生涯に一度も嘘をつかなかつたといふ點で、祖父が物語るか

ぎり、それはまさしくこの世にあつた正眞正銘まことの話に違ひなかつたのぢや。

では、これから祖父の怪異譚のひとつをお話しすることにしよう。よく公事の代書などを勤めてをるやうな御仁で、今樣の通用文はすらすらと讀めもするが、ありふれた經文の一つもあてがはれうものなら、さあ頓と一字一句だつて會得ができず、その癖、何かといへば人を嘲るやうに白い齒を剝き出して笑ふだけが能といつた、まことにお悧巧な方々を見受けるもので、さういふ手合には何を話しても、ただもう、にやにや笑つてゐるばかりでた。實に、時世時勢とでもいふのか、何ひとつ眞に受けるといふことが無くなつた！　近い話が——これあもう、天地神明に誓つての話ぢやが——あなた方にしてからが、ほんたうにはなさるまいけれど、ある時、ちよつと妖女の話をしたところ、どうぢやらう？　ひどい惡黨もあつたもので、妖女を信じをらぬのぢや！　お蔭でこの年になるまでには、こちとらが嗅煙草を嗅ぐよりもたやすく懺悔僧にむかつて嘘八百をならべ立てるやうな不心得な外道にもよく出會つたものぢやが、そのやうな輩でも、妖女の話が出れば、鶴龜々々と十字を切つたものぢや。したが、そんな手合には勝手にさせておくがええ……口にするのも穢らはしい……。何もかれこれ言ふがものはないぢやて。

さて、ものの百年も前には、死んだ祖父の話では、こんな村など、誰ひとり知つてゐる者は無かつたさうぢや。村とはいふものの、途方もなく慘めな部落だつたので！　素地のままで何も塗つて

ない丸太小屋が十軒ほど、そこここと原つばのまんなかに剝き出しに突つ立つてゐたきりぢや。垣根もなければ、家畜や荷車を置くほどの、ろくろく滿足な納屋ひとつない有樣でな。それでもまだまだ贅澤な方で、こちとらのやうな裸か虫にいたつては、地面を掘りさげた土窖（つちむろ）——それが人の住ひなのぢや！　ただ立ちのぼる煙を見て、そこにも神の子の住んでゐることが頷かれるといつたていたらく。どうして又そんな生活をしてゐたのぢやと言ひなさるのかな？　貧乏のためかといふになかなか、貧乏どころぢやない。なんしろその頃といへば、猫や杓子までがわれもわれもと哥薩克になつて、他所の國々へ押し渡つて夥しい財寶を掠め取つてゐた時代でな、どちらかといへば、安住の家などを營む必要が更々なかつたからぢや。當時は、クリミヤ人でござれ、波蘭（リヤツ）人でござれ、乃至はリトワニヤ人でござれ、どれもこれも世界を股にかけて渡り歩いたものぢや！　そればかりか、時には自國の者が徒黨を組んで同胞から掠奪を擅（ほしいまま）にすることさへあつたのぢや。いや、どんなこともあつた時代ぢやからな。

さてその頃のこと、この村へ時々ひとりの男、といふよりは寧ろ人間の形に化けた惡魔が、姿を現はした。そいつはいつたい何處から、何をしにやつて來るのか、だれ一人として知る者がなかつた。遊興に耽つて、酒に醉ひしれてゐるかと思ふと、まるで水の底へでも潜つたやうに、たちまち姿を搔き消してしまつて、なんの音沙汰もなくなるのぢや。さうかと思ふと、まただしぬけに天か

らでも降つたやうに、今でこそ跡形もないが、ディカーニカとはつい目と鼻のあひだにあつたその村の往還をすたすたと足ばやに歩いてゐるといふ始末なのぢや。そこでまたしても逢ふほどの哥薩克たちを殘らず寄せ集めて、飲めや唄への亂痴氣さわぎをおつぱじめて、錢をばら撒く、火酒（ウオツカ）は浴び放題……美しい娘つ子には、そつと寄るやうにして、リボンだの、耳環だの頸飾だのを、もてあますほど呉れてやる！　實は、美しい娘つ子たちも、さうした贈物を手にしながら、うすうす怪訝に思ふのぢやつた——ひよつとこれは惡魔の手から出た代物ではないかしらとな。わしの祖父の親身の叔母が、そのころ今のオボシュニャンスカヤ街道で居酒屋をやつてゐたが、そこでよく、このバサウリューク（その魔性の男は、さういふ名前でとほつてゐた）が散財をしたさうで、叔母の話したことには、この世にある限りのどんな幸福と引換でも、この男から贈物などもらふのは眞平御免だつたといふのぢや。だが、さうかといつて受け取らんわけにもゆかぬ——その男が針のやうな眉毛をしかめて、見るからに足のすくみさうな眼つきで額越しに睨まへると、誰だつてぞうつとして怯氣を震つてしまつたものぢや。ところがまた、それを受けとらうものなら、次ぎの晩には頭に角のある、そいつの仲間が沼地からお客に押しかけて來るのぢや。そして、頸飾を掛けてをれば頸をしめる、指輪をはめてをれば指に喰ひつく、リボンを結んでをれば編髪をひつぱるといふ始末でな。さうなつた曉には、それこそ、かうした贈物は誠にもつて迷惑千萬なのぢや！　しかも災難な

ことには――それを振りすてることも出來ないのぢや。たとへば水中めがけて投げこんだにもせよ、その麗性の指輪なり頸飾なりは、水面を泳いで、すぐに又もとの手もとへ戻つて來をるのぢや。

その村にお寺が一つあつたが、わしの記憶では、多分パンテレイ聖人を祠つた御堂だつたと思ふ。當時その寺に、今は亡きアファナーシイ神父が住まつてをられた。神父は、バサウリュークが復活祭にさへお寺へ顔出しをせぬのを知ると、少し窘めて彼に懺悔をさせようと思ひついたものぢや。ところが、どうしてどうして！　命に別狀のなかつたのがせめてもの仕合せといふものでな。『へん、和尚さん！』と、そいつは喰つてかかつたのぢや。『他人のことにかれこれ口出しをする暇に、われと我が身のことに氣をつけたがよからうぜ、さもないと、煮えつきの蜜飯でその山羊の頸みたいな咽喉をふさいでこますから！』かういふ罰あたりにかかつては、なんともはや仕方のないものでな。アファナーシイ神父はただひと言、このバサウリュークとつきあひをするやうな者は、誰れ彼れなしに、基督教會と人類全體の仇敵である加特力の信者と看做しますぞと、斷言したきりぢやつた。

さて、この村でコールジュといふ通稱でとほつてゐた哥薩克の家に、(親無しペトロー)といふ渾名で呼ばれてゐる作男がひとりゐた。多分、だれ一人その男の兩親を知つてゐる者がなかつたの

で、そんな渾名がつけられたのだらう。もつとも信徒總代の話によれば、その兩親は、彼の生まれた翌る年、黑死病で亡くなつたといふのぢやが、わしの祖父の叔母はそれを本當にしないで、一所懸命に、この哀れなペトローの身にとつては去年の雪ほどにも用のない肉親を捜し出してやらうとて、いろいろ骨折つたものぢや。彼女の話では、ペトローの父親は今、ザポロージェにゐるが、前に土耳古人の捕虜になつて、むごたらしい艱難辛苦を嘗めた末、やうやく宦官の姿に變裝して脫走して來たといふのぢや。だが眉の黑い娘つ子や新造たちにとつては、彼の肉親のことなどはどうでもよかつた。彼女たちはひたすら、彼に新調の波蘭服を著せ、赤い帶をしめさせ、てつぺんだけが粹に青い仔羊皮の黑い帽子をかぶらせて、腰に土耳古風のサーベルをつり、片手には鞭を、片手には美しい象眼いりの煙管を持たせたものなら、とてもとても當時の若者といふ若者などは、その足もとへもよりつかれたものではなからうなどと、言ひそやしてゐた。しかし不幸にして、貧しいペトローには、天にも晴にも掛換のない一枚看板の鼠いろの長上衣より他には持ちあはせがなく、それも、氣のきいた猶太人の衣囊の中にある金貨の數よりも多く穴があいてゐるといつた代物であつた。だが、それはまだしも大した災難ではなかつた。災難なのは、コールジュ老人に一粒種の娘があつて、それが素敵もない別嬪で、諸君にも恐らくこんなのは、なかなかおいそれとは見つかるものでないと思はれるほどの美人だつたことで。亡き祖父の叔母がよく話したことぢやが一

ーところで女にとつては、御承知のやうに、差しさはりがあつたら御免なされぢやが、他人のことを美人だなどと言ふくらゐなら、いつそ惡魔と接吻でもする方がよつぽど安易なはずぢやが――その哥薩克娘のふくよかな頰が見るからに瑞々しくて、あのこよなく美しい薔薇いろの罌粟が神授の朝露で沐浴ををへて鮮やかに燃えながら、きちんと行儀よく枝葉をそろへて今し昇つたばかりの日輪に向つて美裝を誇つてゐる時のやうに、あでやかなら、またその眉は、ちやうど當節の娘たちが、あの、箱をかついで村々を廻つて來る大露西亞人から、十字架につけたり、頸飾にする古錢を通すために買ふ、あの黑紐のやうに匂やかに、あたかもその明眸をさし覗くやうに、なだらかに弧を描き、小夜鳴鳥の唄聲をもらすために造られたかとも思はれるその可憐な口許は、それを見るたんびに當時の若者どもに思はず舌舐ずりをさせたもので、烏羽玉の黑髮は若亞麻のやうにしなやかに、(その頃はまだ、この邊の娘たちのあひだには、派手な色あひの美しい細リボンを編みこんだ幾つかの小さい編髮にするならはしがなかつたので)房々とした捲毛が、金絲で刺繍をした波蘭婦人服の上へ、ゆたかに垂れてゐたさうぢや。へつ！　このすつかり霜をいただいたわしが腦天の古林と、まるで眼の上の瘤みたいに片わきに鎭坐ましまします山の神の婆あの前ではあるが、こんな娘を思ふ存ぶん接吻することができないほどなら、おお主よ、わしはもう頌歌席でハレルヤを唱へさせて貰ひませんでも結構ぢや。それはさて、かうして若者と娘つ子とが互ひに朝夕顏を見あはせて暮し

てゐた日には……それがどんな結末になるかは、火を見るより明らかな話で、まだ黎明の頃ほひ、赤長靴の踵鐵が目につけばそこには必らずビドールカが情人のペトゥルーシャと甘いささやきを交はしてゐたわけぢや。しかし、つひぞそれまでコールジュが邪慳なこころを起すやうなことはなかつたが、ある時――これこそ他ならぬ惡魔のそそのかしに違ひないのぢやが――ペトゥルーシャのやつ、碌々あたりに注意もはらはず、あとさきの考へもなしに、家の入口で哥薩克娘に出會ひざま、その薔薇色の唇に、いはば無我夢中で接吻したのぢや。ちやうどその時、同じ惡魔めが、ええつ、ほんに畜生め、靈驗いやちこな十字架の夢でも見くさるがええ！――あらうことか、あの雷碌親爺に入口の扉を開けさせをつたのぢや。コールジュ老人は戸につかまつて棒だちになつたまま、開いた口も塞がらなかつた。その忌々しい接吻の音で彼の耳はすつかり聾になつてしまつたかとさへ思はれたのぢや。それは、まだ鐵砲も火藥もない當時のこととて、百姓どもが壁を叩いて野禽を追ふのに使つた木槌の音よりも大きく彼の耳に響いたものぢや。

我れに返るとともに、彼は、壁に懸つてゐた父祖傳來の鞭をおつ取りざま、哀れなペトゥローの背筋をめがけてピシリと一つ擊ちおろさうとしたが、ちやうどその時、どこからかビドールカの弟で六つになるイワーシが駈けこんで來るなり、仰天して、いたいけな兩の手で父親の脚にしがみついて、『お父ちやん、お父ちやん！　ペトゥルーシャを殴つちやあ、いけないようつ！』と喚き出し

をつたのぢや。どうしやうがあるものか？　父親の心だとて木石ではない筈ぢや。彼は鞭をもとの壁に懸けて、やをら相手を扉の外へしよびき出すなり、『向後この家でおれの眼にとまつて見ろ、うんにや、そればかりか、うろうろと窓の下へでも近づいて見ろ、その時こそ、いいか、ペトゥロー、おらがテレンチイ・コールジュである限り、誓つて、汝のその黒い髭と、それからこの豚尾が――ほうら、もう耳をこたまはりも巻けるわい――これがどちらも汝のど頭から消えてなくなるんだぞ？』から言ひざま、彼はすばやく拳をかためて、ペトゥローの項をがんと一つ喰らはせた。ペトゥルーシャはくらくらつと目が眩んで、その場へばつたり倒れてしまつた。とんだ接吻をして退けたものぢや！　戀人同士は切ない悲哀に胸とざされてしまつた。ところがコールジュの許へはさる波蘭人で、ぴんと口髭を生やして、金絲で刺繍をした衣服を身にまとひ、長劍をつり、拍車をつけた男が、まるで寺男のタラースが毎日、會堂のなかを持ちまはる喜捨袋みたいに、衣嚢をジャラジャラいはせながら、足しげく通ひだしたといふ噂さが、專ら村ぢゆうの評判になつた。けだし小意氣な娘をもつ父親のところへ、しげしげと出入をする手合の下心は見えすいてゐる。さて或る日のこと、ピドールカは涙にかきくれながら、兩の腕に弟のイワーシを抱きしめて、かう言つためぢや。『可愛いあたしのイワーシや！　好い子だからね、大急ぎでペトゥルシャのところまで一と走り行つて來ておくれでないか。そしてあのひとにさう言つておくれ。あたし、あのひとの嘉いろのお

眼が戀しくて、あのひとの白いお顔が接吻したいのだけれど、でも前の世からの因緣でそれも叶はないのだつてね。あついあつい涙で、ぐつしより濡らした手拭も一筋や二筋ぢやない。あたしやせつなくつて、なんだか胸がしめつけられるやうなの。親身のお父さんでさへ、あたしには仇敵もおんなしだわ――好きでもない波蘭人のとこなんかへ無理やりお嫁に行かせようとするんだもの。あのひとにさう言つておくれ、うちではもう婚禮の支度にかかつてゐるのだけれど。あたしの婚禮には賑やかな音樂などはなくつて、八絃琴や笛の代りに補祭がお經をあげるのだつて、ね。そしてあたしは花聟といつしよに踊るのではなく、棺に入れて擔つてゆかれるのだつて。あたしのお嫁にゆくところは暗い暗いお家なんだつて！――そして、屋根のうへには煙突の代りに楓の木の十字架が立つんだつて！』

あどけない子供がピドールカのことづけを片言で繰りかへすのを聽きながら、ペトゥローはまるで化石にでもなつたやうにその場に棒立ちになつてしまつた。『ええ、情けない、おれはまたクリミヤか土耳古へでも押しわたつて、金銀をうんと分捕つて、しこたま身代を拵らへてから、お前のところへ歸つて來ようと思つてゐたのになあ、おれの別嬪さん。それもやつぱり駄目か。どこまでも、おれたちふたりは意地の惡い運命の眼にみこまれてしまつたのだ。おれの方にだつてな、いとしい戀人さん、婚禮は擧げられるよ――おれの婚禮にやあ、坊さんがお經をあげるかはりに黒い鴉がカ

アカア啼くだらう。おれの家はだだつ廣い野原で、蒼黑い雨雲が屋根の代りになるのだよ。鷲めがおれの鳶いろの眼球をつつき、哥薩克男子のこの骨は雨露に洗はれて、やがては旋風の力でひからびてしまふことだらう。だがおれはどうしたといふんだ？　だれを恨み、だれに泣きごとをならべることがあらう？　所詮は神がかういふ運命に定められたのだ！　ええ、もう身も心も破滅してしまへばいいんだ！』さう言ふと、そのまま彼は居酒屋をさしてまつしぐらに飛んで行つたといふ。

祖父の叔母は、ペトゥルーシャが自分の酒場へ、それも堅氣な人たちなら朝の勤行に詣つてゐる時分に、ひよつこり姿を現はしたのを見てちよつと驚ろいたが、彼が半樽の餘も入りさうな大コップで燒酎を注文した時には、まるで目のくり玉がとびだしさうなほど、相手の顏を見つめたものぢやさうな。この可哀さうな男はどうかしてその悲しみを拂ひ落さうと思つたのだが、それは無駄なことだつた。火酒はまるで蕁麻のやうに彼の舌を刺して、苦蓬の汁よりも苦く思はれた。それで彼はその大コップを地べたへ叩きつけた。『悲觀することあねえぞ、哥薩克』さういふ胴間聲が彼の頭のうへで鳴り響いた。振りかへつて見ると、そこにゐるのはバサウリュークだ！　いやはや！なんといふ醜顏ぢやらう！　髮の毛はごはごはして、眼の玉がまるで牡牛のそれのやうぢや。『お主が何に困つてをるのか、それはちやんと知つとるぞ。そうら、これだらう！』さう言ひながら、彼は悪魔のやうな薄笑ひを浮かべて、帶のわきに下げてゐた革の財布をジャラジャラ鳴らした。ペトゥロ

ーはぶるつと身顫ひをした。『へ、へ、へ！　どうだ、よく光るぢやらうが！』彼は金貨を手のひらへザラザラと移しながら喚いた。『へ、へ、へ！　どうだ、好い音がするぢやらうが！　かういふお錢をたんまり儲けるのに、仕事といへばたんだ一つきりさ！』『惡魔！』と、ペトゥローが躍起になつて叫んだ。『それをやらせてくれい、おらはどんなことでもして退けるだから！』そこで手うちが交はされた。『見ろ、ペトゥロー、お主はちやうどいい時に間にあつたぞ、明日はイワン・クパーラぢや！　一年のうち今夜ひと晩だけ、蕨に花が咲くのぢや。この期をはづしちやあならんぞ！おれは今夜、眞夜中に熊ヶ谷でお主を待つてゐてやる。』

恐らく、この日ペトゥローが夜になるのを待ち焦れたほどには、鶏も女房が餌を持つて來てくれる時刻を待ちあぐねはしなかつたらう。刻一刻に怵へ性がなくなつて、なん度となく戸外へ出ては木立の影が少しでも長くならないかと、そればかり眺め眺めしたものぢや。なんといふ日の長いことだらう？　どうやら、天帝の定めた一日が、どこかへ尻尾を置き忘れて來たものとみえる。だが、やうやくのことで太陽の姿がなくなつた。空は一方だけが赤らんでゐる。やがてそれも薄暗くなつて來た。野原はひとしほ肌寒くなつて、だんだん夕闇がせまり、そろそろ黄昏れそめる。やれやれ、やつとのことで！　彼は飛びたつ思ひで支度もそこそこに、足もとに用心しながら、鬱蒼と生ひ繁つた森の中を辿つて、熊ヶ谷と呼ぶ奥深い谷底へと降りて行つた。バサウリュークはもうち

やんと、そこに待つてゐた。鼻をつままれても分らないやうな眞の闇だ。二人は手に手をとつて、じめじめした沼地をば、深々と生ひはびこつた荊棘にひつ掻かれたり、殆んど一足ごとにつまづいたりしながら、前へ前へと進んで行つた。すると、やがてのこと平らなところへ出た。ペトゥローはあたりを見まはしたが、まだ一度も來た覺えのないところだつた。そこまで來るとバサウリュークは立ちどまつた。

「お主の眼の前に三つの丘があるぢやらうが？　この三つの丘にいろんな草の花が咲くのぢや。だが、お主がそれを一つでも折り取るのは禁物ぢやぞ。ただ蕨に花が咲いたら、すぐさまそれを掴むのぢや、そしてお主のうしろでたとへどんなことが起らうとも、振りかへつてはならんのぢやぞ。」

ペトゥローは何か訊ねようと思つたが……見れば——バサウリュークの姿はもうそこには無かつた。彼は三つの丘の傍へ近よつた。いつたいどこに花があるのだらう？　なんにも眼には見えぬ。野草があたり一面に黒々と生ひ繁つて、まるであたりを塞いでしまつてゐるばかりだ。ところが、やがてのことに天の一角で、ピカリと一つ稲妻が閃めいた。と、そのとたんに、彼の眼前には一面の花畠が現出して、どれもこれも珍らしい、つひぞ見たこともないやうな花で一杯になつた。だが、蕨はまだ、ただの葉つぱだけぢやつた。ペトゥローは肚のなかで少し怪しみながら兩の手を腰

につがへたまま、その前に立ちつくした。

（こんなものあ、別に珍らしくもなんともないぢやないか？　一日に十べんだつてこんな草なら見てゐらあ、何が不思議なもんか？　あの悪魔づらめが、ひとを嘲弄ひくさるのぢやないかしらん？）

ところが、見てゐると——小さな花の蕾が一つ、だんだん赤らんで來るではないか——さながら生きもののやうに蠢めきながら。まつたくこれは不思議だ！　蠢めきながら見る見る大きくなつて、まるで燠のやうに赤くなつた。そして小さい星がきらめくやうに火花が散つたかと思ふと何かパチつと音がした——と、彼の眼前には一輪の花がぱつと開いて、さながら火のやうにぐるりの花花を照らしてゐるのだ。

（さあ、今だ！）さう思つて、ペトゥローは片手をのばした。見れば、彼のうしろからも、やはりその花をめがけて何百といふ、毛むくじやらな無數の手がさしのばされた。そして彼のうしろでは何者かがあちこちと駈けまはつてゐるらしい氣配がする。彼は眼をつぶつて、その莖をむしり取つたが、首尾よくその花は彼の手に入つた。あたりが急にしいんと靜まりかへつた。すると、木の切り株のうへに坐つて、まるで死人のやうに色蒼ざめたバサウリュークの姿が現はれた。彼は指いつぽん動かさなかつた。兩の眼は何ものか、ただ彼にだけ見えるらしいものにむかつてじつと凝ら

されてゐた。口は半ばほころびてゐたが、なんの應へもない。あたりには蠅の羽音ひとつ聞えぬ。いやはや物凄いのなんのといつたら！……ところがその時、さつと一陣の風が起つて、ペトゥローは肚の底からぞうつとした。そして、草がさやさやとそよぎ出して、さながら花が互ひに銀鈴を振るやうな細い細い聲でささやきはじめたやうに思はれると、樹々は怒號するやうな物凄い音をたてて鳴りはためいた……と、バサウリュークの顏は急に生氣を帶びて、その兩眼がぎらりと光つた。

『やつと鬼婆めが歸りをつたな！』さう彼は、齒の隙間からつぶやいた。『よいかペトゥロー、今すぐにお主の前へ凄い別嬪が姿を見せるから、そいつの呟ひつけどほりにするのぢやぞ、さもないと、取りかへしのつかぬことになるのぢや！』さう言つて彼が、節くれだつた木の杖で荊棘のしげみを押し分けると、二人の面前には、昔噺にあるとほりの鷄*の脚で立つた小舍が現はれた。バサウリュークが拳をあげてその戸を叩くと、壁がゆらゆらと搖めいた。そして大きな黑い犬が一匹飛びだしたかと思ふと、ぎやつと叫びざま、猫の形に變つて、二人の方へまともに躍りかかつて來た。

『おいおい、腹を立てなさんなよ、鬼婆さん！』さう言つてからバサウリュークは、堅氣な人間にはとても聞きずてにすることの出來ないやうな、いかがはしい言葉をつけ足した。すると、今度は猫ではなくて、まるで燒林檎のやうに皺くちやな顏をして、全身が弓のやうに曲つた老婆の姿にかはつた。その鼻と頤とが、ちやうどあの胡桃を割る鋏子のやうな恰好に向ひあつてゐた。（大變な別

嬪ぢやわい！）さう思ひながら、ペトゥローは背筋にぞうつと寒けを覺えた。妖女は彼の手からくだんの花をひつたくると、身をかがめて長いあひだそれに怪しげな水をふりかけながら、何かロのなかで呪文を呟やいてゐた。その口からは火花が飛び、唇にはぶくぶくと泡が吹きだした。『投げな！』と、老婆は花を彼に返しながら、言つた。ペトゥローがそれを投げた。と、なんと不思議なこともあるもので、花はまつすぐ地面へは落ちないで、しばらくのあひだ、闇のなかにまるで火の球のやうに浮いたまま、小舟かなんぞのやうに空中を漂つてゐたが、やがて少しづつ低くなつて、最後にかなり遠くの方へ落ちたので、それは罌粟粒よりも小さい星のやうに、やうやくそれと見分けられるくらゐであつた。『あすこだよ！』さう、うつろな嗄がれ聲で老婆がいふと、バサウリュークは犂を渡しながら、『あすこを掘るのぢや、ペトゥロー、あすこにやあな、お主やコールジュが夢にも見たことのないやうな黃金がたんまり埋まつてをるのぢや。』と告げた。ペトゥローは手に唾をして犂をとると、それをくつと土へ踏みこんでは掘りかへし、踏みこんでは掘りかへし、何度も何度も繰りかへした……。と、何か固いものに觸つた！……犂がカチつと音を立てて、もうそれ以上は通らぬ。その時、彼の眼にははつきりと、鐵板を著せた小型の櫃がうつつた。で、彼がすんでのことに手を掛けてそれを持ちあげようとすると、櫃は地の底へずるずるとめりこんでゆくではないか。そして彼のうしろでは、どちらかといへば蛇の匍ふ音に似たやうな笑ひ聲がした。『駄目なこつ

ちやよ、お主が人間の血を手に入れるまでは、その黄金を見る譯にはいかんのぢや！』さう言つて妖女は、彼の前へ白い敷布（シーツ）にくるまれた六つぐらゐの子供をつれて來て、その首を刎ねよといふ相圖をした。ペトゥローはその場に立ちすくんでしまつた。たとへどんなことがあらうとも、人間の、ましてや罪もない子供の首を斬り落すなどといふことがどうして出來るものか！、彼は赫つとなつて子供の頭に卷かれた敷布を引きはいだ。と、どうだらう？　彼の眼の前に立つてゐるのはイワーシではないか。哀れな子供はいたいけな兩手を十字に組んで、頭べを垂れてゐるのであつた……。狂人のやうになつたペトゥローは、短刀を振りかぶつて妖女にをどりかかりざま、まさにその手を打ちおろさうとした……。

『おぬしは、あの娘を手に入れるために、どんな約束をしたのぢや？……』さう叫鳴るバサウリュークの聲が、まるで鐵砲だまのやうにうしろから彼の五體に突きとほつた。妖女が片足あげて、とんと地面を踏んだ。すると、青い焔が地のなかからたちのぼつて、地下全體がかつと明るくなり、まるで水晶ででも出來てゐるやうに、大地の底にあるものが何もかも、手に取るやうに見え出した。彼等の立つてゐる地面の眞下には、櫃や鍋にいれた金貨だの寶石だのが、うづたかく埋藏されてゐるのだつた。ペトゥローの兩の眼は燃えるやうに輝やいて……理智の鏡も曇らされた……。まるで正氣を失つたもののやうに彼は短刀を掴んだ。無辜の血汐が彼の兩眼にはねかかつた……。

惡魔の高笑ひか四方からどつとあがつた。醜惡きはまる化生のものが彼の眼前を群れをなして駈けまはつた。妖女は首を刎ねられた屍を兩手にかかへこんで、狼のやうにその血をすするのだつた……。ペトゥローの頭のなかでは何もかもがぐるぐると廻つた！　彼はその場から刀の限り逃げだした。彼の眼の前はすべてが眞紅の光りにつつまれて見えた。すべての樹々が血を浴びて赫つと燃えながら呻いてゐるやうに思はれた。空も眞赤に灼けただれて搖らめいてゐた……。稻妻のやうな火の玉が眼の中できらめいた。ぐつたりと、精も根も盡き果てて彼は自分の荒ら屋へ駈けこむなり、藁束のやうに地面へぶつ倒れてしまつた。そのまま死のやうな睡魔が彼を捉へてしまつた。

二日二夜のあひだ、ペトゥローは一度も目を醒さずにぐつすり眠りとほした。三日目になつてやつと夢から醒めた彼は、長いあひだ自分の家の隅々を眺めまはした。何ごとかを思ひ出さうとして躍起になつたが、どうしても思ひ出されない。彼の記憶は、まるで老いぼれた吝ん坊の衣囊と同じで、これつぱかしも絞りだすことが出來ないのぢや。ふと、伸びをした時、彼は足もとで何かザラザラと音がするのを耳にとめた。見れば、金貨の袋が二つもあるではないか。やつと、この時、夢のやうに、自分が何か寶を搜してゐたことと、森の中でただ一人、何か怖ろしい目に會つてゐたことを思ひ出した……。だが、何の代償として、またどういふ手段でそれを手に入れたのか——それはどうしても思ひ出すことが出來なかつた。

二つの金袋を見ると、コールジュの心は折れた。『ほんにペトゥルーシャはなんちふ變物ぢやらう？　おらがあれに目をかけてやらなかつたとでもいふのかい？　うちぢや、あれを親身の息子のやうにしとつたでねえか！』などと、老人はまるで齒の浮くやうな出放題をならべ立てたものぢや。ピドールカは、弟のイワーシが通りすがりのジプシイにかどはかされたことを話したがペトゥローはイワーシの顏を思ひだすことさへ出來なかつた。そんなにまで呪はしい化生の物のためにたぶらかされてゐたのぢや。もう何も躊躇することはなかつた。波蘭人には體のいい肘鐵砲を喰はせておいて、さつそく婚禮の支度がととのへられた。白い婚禮麵麭が燒かれたり、布巾や手巾がしこたま縫はれたりして、燒酎の樽がころがし出されると、新郎新婦は並んで卓子につき、大きな婚禮麵麭が切られた。四絃琴や鐃鈸、笛や八絃琴の樂の音がとどろきわたつて――歡樂がつづいた……。

むかしの婚禮はとても今時のそれとは比べものにはならなかつた。祖父の叔母がよく話したことぢやが、ただもう、やんややといふ騷ぎで！　娘たちは上を金モールで卷いた、青や赤や桃いろのリボンで拵らへた頭飾をかぶり、縫ひめ縫ひめを赤い絹絲でかがつて小さい銀の花形をつけた薄いルバーシュカを身につけ、背の高い踵鐵をうつたモロッコ革の長靴をはいて、まるで雌孔雀のやうに輕快に部屋ぢゆうを踊りまはつた。また新造たちは新造たちで、頂上がすつかり紋金襴で出來て、項のところに小さい切れ目のある（そこから金ピカの頭巾が覗いてゐたが、それには極々

ちひさい、黑い仔羊皮の角が前と後ろへ一つづつ突き出てゐた）舟型帽をかぶり、赤い飾布のついた上等の古代絹の波蘭婦人服を著て、勿體らしく兩手を脇にかつて、ひとりひとり正しい型のゴパックを踊つた。若者たちはまた、背の高い哥薩克帽をかぶり、薄羅紗の長上衣のうへから銀絲で刺繍をした帶をしめ、口に煙管をくはへたまま、女たちにむかつて、媚びるやうな踊り方をしながら、ときどき戲口をきいた。コールジュまでが若者たちを見ては我慢がならなくなつて、寄る年波も忘れて浮かれだした。この老人は酒杯を頭にのつけて、四絃琴を手にすると、煙管をすぱすぱやりながら、歌を口ずさみ口ずさみ、ぞめき連のやんやといふ喝采につれて、しやがみ踊りをおつぱじめたものだ。一杯機嫌になると何をやりだすか知れたものぢやない。假面をかぶれば――いやもう、まるで人間の恰好ではない。どうしてどうして、今時の假裝などは、むかし婚禮の時にやつたものとは、てんで比べものにならんて。當飾やるのは、なんぞといへば、せいぜいジプシイか大露西亞人の眞似ごとぐらゐが關の山ぢや。ところが、そんなものとは大違ひで、一人が猶太人に紛すると一人は鬼になつて、最初は接吻しあつたりなどしてゐるが、そのうちに房髮の摑ひあひをおつぱじめる……。まつたくどうも！　一同は腹をかかへて笑ひころげたものぢや。土耳古人や韃靼人の服裝をしてゐる者もある。それがみんな火のやうにキラキラと光つてをるのぢや……。ところが、そのうちにふざけた馬鹿な眞似がおつぱじまる……いやもう、とても堪つたものぢやない！

亡くなつた祖父の叔母は、この婚禮の席に列なつて、とても滑稽な一幕を演じてしまつたものぢや。叔母はその時、なんでも韃靼風のだぶだぶした衣裳をつけて、酒杯を持ちまはつて一同に酒をすすめてゐたさうぢや。すると一人の男が悪魔にでもそそのかされたのか、うしろから叔母のからだへ火酒をぶつかけをつたのぢや。するともう一人の別の男が待つてゐたといはんばかりに、即座に火を燈つてそれに點けをつた……。火焔がぱつと燃えあがつた。可哀さうに、叔母はすつかり仰天してしまひ、滿座のなかで着物をのこらずかなぐりすてた……。まるで市場のやうに、わつといふざわめきと、哄笑と、馬鹿さわぎが持ちあがつた始末さ。一と口に言へば、どんな老人も未だ曾てこれほど愉快な婚禮には出會つたためしがないといふほどぢやつた。

ビドールカとペトゥルーシャとは、まるで殿様と奥方のやうな暮しをはじめた。なに不自由なく、萬事につけてきらびやかに……。しかし堅氣な人たちは二人の暮しを眺めて、かすかに首をふつた。『悪魔から禍は來るものでねえだ。』さう彼等は異口同音に言ふのだつた。『正教徒をたぶらかす悪魔からでなくて、どこからあんな富がころげこんで來るものか。いつたいどこからあの山のやうな金貨を手に入れたのだらう？　それに、なんだつてあの男が金持になつたと同じ日に、不意にバサウリュークの姿が消えて無くなつたんだらう？』どうも人の臆測といふものは馬鹿にならんものでな！　一と月とたたぬうちにペトゥルーシャはまるで人間が變つてしまつた。いつたい彼はど

うしたといふのか——さつぱり譯がわからん。同じところに坐つたまま、一と言も人とは口をきかず、しよつちゆう物思ひに耽つて、何事かを一心に思ひ出さうと骨折つてゐるらしいのぢや。どうかしたはずみに、ビドールカがやつと口をあかせると、奴はきよとんとしながらも、すこしは話もして、氣分もいくらか晴れるやうなのぢやが、ふと、くだんの袋を見ると、『待て待て、どうも思ひ出せんわい！』さう口ばしつて、またもや深い物思ひに沈んで、再び何事かを思ひ出さうと一心不亂になるのぢや。時々じつと、長いあひだひとつ場所に坐つてゐると、いかにも何もかもが初めから腦裡に浮かびあがつて來さうな氣がするのぢや……が、やはりまたぼうつとしてしまふのぢや。どうやら、自分は居酒屋に坐つてゐるらしく、火酒が運ばれて來る、火酒が舌に燒けつく、火酒はとても厭だ、誰かそばへ近よつて來て肩を叩く、その男が……しかし、それから先きはまるで眼のまへに霧がかかつたやうで、とんと思ひ出せぬ。汗が顔からたらたら流れる、彼はぐつたりして、その場に居竦まつてしまふのだつた。

ビドールカはありとあらゆる手段をつくした。修驗者に相談したり、*怯え落しや癪おさへの呪術もしてみたが——しかし、なんの驗もなかつた。

---

* わたしの地方では人が悸病にかかつた時、その原因を知らために『怯え落し』をやる——それには先づ

錫か蠟を溶かして水の中へ流しこむのだ。するとそれが病人を怯えさせてゐるものの姿に似た形を現はす、それで怯えはすつかり落ちてしまふのぢや。『癪おさへ』といふのは吐氣や腹痛の時にやるもので、それには大麻の切れはしに火をつけてコップのなかへ入れ、それをば病人の腹のうへに水を盛つて載せた鉢のなかへ、底をうへにして、伏せるやうにして入れる。それから呪文をとなへてから、その鉢の水を一匙だけ病人に呑ませるのぢや。（原作者註）

かくてその夏もすぎた。哥薩克たちの多くは秋の刈り入れをすました。そして生れつき放縱な多くの薩哥克たちはまたもや戰地へと出征した。鴨の群れはまだ土地の沼地に群れてゐたが、鷸鴾はもう影も見せなかつた。曠野は一面に赤くなつた。そこここに穀類の禾堆が、ちやうど哥薩克の帽子のやうに野づらに點々と連なつてゐた。時をり村道を、柴や薪をつんだ荷馬車が通つてゆくのが眼についた。大地はいよいよ固くなり、ところどころに凍てが染みとほつた。やがて空から雪がチラチラと落ちはじめ、木々の枝は兎の毛のやうな霜で飾られた。晴れた極寒の日には優雅な波蘭貴族よろしくの姿をした胸の赤い鷽が餌を曳つぱりながら雪の上を歩きまはり、子供らはでつかい槌を持つて氷の上を走りまはつて、木の球を追つかけた。一方、彼等の父親たちは樂々と煖爐のうへに寢そべつてゐたが、時をり、吸ひつけた煙管をくはへたまま戸外へ出て來ては、いかにも素晴らしい大寒日和をさんざんに褒めののしつたり、または入口の土間で、寢かしてあつた穀物に風を通したり搗いたりするのぢやつた。やがて雪が解けはじめ、梭魚が尾で氷を碎いた。だが、ペトウロ

ーの容態には依然として變りがなく、時と共にいよいよ氣むづかしさがつのる一方だつた。足もとに金貨の袋を置いたまま、鎖にでも繋がれたやうに、家の眞中に坐つてゐた。髪はぼうぼうと伸び放題で、まるで野育ちのやうに、見るから怖ろしい形相になつて、絶えず一つのことに思ひを凝らして、何事かを思ひ浮かべようと一心になりながら、それが思ひ出せぬのに焦れたり、怒つたりした。時々、暴々しく席を蹴つて立ちあがると、兩手を打ち振り打ち振り、何ものかを捉まへようとでもするやうに、じつと眼を凝らすことがあつた。唇は、何かずつと前に忘れてしまつた言葉を、どうかして口へ出さうとしてあせるやうに、ぴくぴくするのだが——やはり又じつと動かなくなる……。狂暴の發作が襲つてくると、まるで正體もなく齒がみをして、われとわが手に咬みついたり、苛立ちまぎれに髪の毛を引きむしつたりするが、やがてそれが鎭まると、さながら夢うつつのやうにぼつたり倒れてしまふ。それから又しても回想に耽りはじめて、再び狂暴になり、更に懊惱するのだつた。何といふ怖ろしい天罰だらう？　ピドールカはまるで生きた心地もしなかつた。最初のほどはひとり家にゐるのが怖ろしかつたが、しまひには、可哀さうに、さうした悲しみにも馴れて來た。だが以前のピドールカの面影は跡形もなくなつた。頰のいろざしも微笑も影をひそめて、容色は衰ろへ、影は薄れて、美しい眼も泣き枯らしてしまつた。一度、さる人が彼女を憐れに思つて、熊ケ谷に棲んでゐる巫女のもとへ行つてみたらとすすめた。その巫女はこの世にある限り

16239

の、どんな病氣でもよく癒すといふので、大變な評判だつた。そこで彼女はいよいよそれを最後の手段にもと、思ひきつて出かけて行つて、いろいろと言葉をつくして、その老婆を伴つて家へ歸つて來た。それは折しもイワン・クパーラの前夜の宵のことだつた。ベトゥゥローは正體もなく腰掛のうへにぶつ倒れてゐたので、その新來の客にはまるで氣がつかなかつた。ところが、やがて少しづつ頭をもたげると、相手の顏をまじまじと穴のあくほど眺めた。と、不意に、まるで斷頭臺のうへに立たされたやうに、からだぢゆうがかたがた顫へだして、髮の毛がさつと逆立つた……。そして彼は、ピドールカがひやりとしたほど物凄い聲をあげて笑ひだした。『思ひ出したぞ、思ひ出したぞ！』さう彼は、こをどりをして喚きざま、矢庭に斧を振りあげて、力まかせに老婆をめがけて、はつしとばかり、投げつけた。斧の刃が三寸ばかりも、樫の板戸へ、丁と打ちこまれた。と、老婆の姿はいつの間にか消え失せて、白いシャツを著たこつばかりの子供が頭べをつつまれて家の中ほどに立つてゐる――――。敷布が落ちた。『イワーシ！』とピドールカが叫んで駈け寄つた。すると幻影は足の先から頭の天邊まで、全身血まみれになつて、家ぢゆうを赤い光りで照らした……。びつくり仰天したピドールカは入口の土間へ逃げ出した。しかし僅かに正氣を取りもどすと共に、良人の身を案じて引つ返さうとしたが、時すでに遲かつた！　眼の前に戸がぴつたり閉されて、とても彼女の手では開けられさうにもなかつた。人々が馳けつけて、戸をどんどん叩いた。戸は外れ

た。だが、內部はもぬけの殼だつた！　家ぢゆうに煙が立ちこめて、ただ、まんなかのベトゥルーシャの立つてゐた邊に一堆の灰燼が殘つてゐるばかりで、それからは、なほもところどころ餘煙がたちのぼつてゐた。一同はくだんの袋をめがけて駈け寄つた。だが、その中には金貨どころか、瀨戸物のかけらがいつぱい詰つてゐるだけであつた。哥薩克どもは釘づけにされたやうに、髭ひとすぢ動かさず、あいた口も寒がらずに、ただ棒だちに立ちつくした。彼等はこの怪異にすつかり怯えあがつてしまつたのである。

それから先きのことはよく覺えてゐない。ピドールカはなんでも巡禮に出るといつて、父親の遺產を處分したが、數日の後には、果して彼女の姿が村から消え失せた。どこへ行つてしまつたものか、誰ひとり知るものがなかつた。おせつかいな老婆たちの言ふところでは、彼女もベトゥローの拉し去られたところへ行つてしまつたのだといふのぢやが、キエフから來た哥薩克の話では、あちらの大修道院で、骸骨のやうに痩せさらぼうた一人の尼僧が、絕え間なしに祈禱を捧げてゐるのを見かけたとのこと、その話の模樣から推量するに、どうやらそれがピドールカの成れの果てらしかつた。又その話では、誰ひとりとして彼女の口から一と言の言葉も聞いたものがないとのこと、そして彼女は聖母マリヤの御像のために緣飾（オクラード）を運んで徒步で辿りついたとのことぢやが、その緣飾には目もくらむばかりに輝やかしい寶石が鏤ばめてあつたといふことぢや。

まだこれだけでお終ひではない、化生の物がベトゥローを拉し去つた、その同じ日に、ひよつくりバサウリュークが姿を現はしたのぢや。誰もかもこいつの姿を見ると逃げ散つたといふ。村人は、こやつこそ財寶を掠めるために人間の姿に化けた惡魔で、汚れた手に財寶を掴むことが出來ん時には、若者をかどはかしてゆく、張本人に違ひないと氣がついたのぢや。その年、村人は殘らず、土小舍を引きあげて本村へ居を移してしまつたが、しかし、其處でもこの呪はしいバサウリュークのために安息は得られなかつたさうぢや。亡くなつた祖父の叔母がよく談したことぢやが、彼は叔母がオボシュニャンスカヤ街道の、以前の居酒屋を閉ぢたことで、誰に對してよりもひどく彼女に恨みを抱いて、極力その復讐をしようと企らみをつたのぢや。或る時のこと、村の頭だつた連中が酒場に集まつて、いはゆる身分相應な卓子會議を開いてゐたものでな、その卓子の眞中にはかなり大きな仔羊の丸燒が置いてあつた。四方山の話がはずんで、いろいろの變化や奇蹟のことも話題にのぼつた。と不意に、――それも誰か一人だけにさう見えたのなら、なんでもないのぢやが、正しく一同に――仔羊が頭をもたげ、その淫蕩がましい眼が生き返つて爛々と輝やき出したかと思ふと、忽ちのあひだに、黑いごはごはした口髭が現はれて、一坐の連中の方へ向けてそれが意味ありげにもぐもぐと動き出したといふのぢや。一同はたちどころにその仔羊の首にバサウリュークの面相を見てとつた。祖父は今にもそいつが火酒をねだるのではないかと思つたさうぢや……。そこ

で堅氣な老人連は、矢庭に帽子を掴みざま我が家をさして、先きを爭つて逃げ歸つてしまつたとのこと。又これは別の話ぢやが、先祖から傳はつた酒杯を相手に、時をり管を卷くことの好きな寺名主が、ある時チビリチビリやりだして、まだ二杯とは傾けんのに、ふと見ると、その酒杯がこちらを向いてこつくりこつくりお辭儀をしてゐる。『ちえつ、勝手にしやあがれ！』つてんで、十字を切るより他はなかつたといふ！……ところがその女房にもやはり變なことがあつた。彼女が大きな桶で、揑粉をこねにかかるとな、不意にその桶が踊りだしたのぢや。『これ、待て待て！』と呼んでも、いかなこと！　勿體らしく兩手を脇にかつて、しやがみ踊りをやりながら、家の中ぢゆう踊りまはるのぢや……。お笑ひなさるが、祖父たちには、なかなかどうして、笑ひごとどころではなかつたのぢや。アファナーシイ神父が、村ぢゆうをまはつて、往還といふ往還に聖水を撒き、灌水刷で惡魔ばらひをして歩いたけれど、なんの役にも立たなかつた。依然として長いあひだ亡き祖父の叔母は、夕方になると誰だか屋根を叩いたり壁をひつかくといつて、こぼしたものぢや。

まだそれだけぢやない！　現在この村になつてをる土地は、まつたく平隱無事のやうぢやけれど、まだそんなに遠い昔のことでもないから、亡きわしの父はもとより、わし自身、今でも覺えてゐるが、その荒れはてた酒場は、その後ながいこと、あの惡魔の後裔めが自分で修復して棲んでをつたので、堅氣な人はその側を通ることも避けるやうにしたものぢや。煤によごれた煙突からまつ

すぐに煙がたち昇つて、帽子がおつこちさうになるくらゐ仰むかなくては見えぬほど高く高く舞ひあがるとな、眞赤な燠になつて曠野(ステップ)ぢゆうに散らばつて落ちたものぢや。そしてその惡魔はな——あん畜生のことなど思ひ出すのも忌々しいけれど……その自分の棲家で、世にも哀れな聲をあげて號泣しをるものぢやから、それに驚ろいた鴉の群れが、近所の樫の森から、これもまた奇怪な叫び聲をあげて舞ひあがると、はたはたと翼さを鳴らしながら、空中へ亂れ飛ぶのぢやつた。

——一八三〇年——

五月の夜

（または水死女）

とんとどうも分らない！　堅氣な基督教徒が何かを手に入れようとして、まるで獵犬が兎を追つかけるやうに、あくせくとして骨を折つても、どうしても旨くゆかないやうな場合に、そこへ惡魔めが荷擔して、奴がちよつと尻尾を一つ振らうものなら、もうちやんと天からでも降つてわいたやうに、ひよつこり望みの品が現はれてゐるのだ。

一　ハンナ

高らかな歌聲が×××村の往還を川水のやうに流れてゐる。それは晝間の仕事と心遣ひに疲れた若者や娘たちが、朗らかな夕べの光りを浴びながら、がやがやと寄りつどつて、あの、いつも哀愁

をおびた歌調にめいめいの歡びを唄ひだす時刻であつた。もの思はしげな夕闇は萬象を朦朧たる遠景に融かしこんで、夢みるやうに蒼空を抱擁してゐる。もう黄昏なのに歌聲はなほ鎭まらうともしない。村長の息子のレヴコーといふ若い哥薩克は、バンドゥーラを抱へたまま、こつそり、唄ひ仲間から拔けだした。彼の頭には仔羊皮の帽子が載つてゐた。彼は片手で絃を搔き鳴らしながら、それにあはせて足拍子をとつて往還を進んでゆく。やがて、低い櫻の木立にかこまれた一軒の茅舍の戸口にそつと立ちどまつた。それはいつたい誰の家だらう？　誰の戸口だらう？　ちよつと息を殺してから、彼は絃の音に合はせて唄ひだした。

お陽さま落ちて、ばんげになつた、
さあ出ておいで、戀人さん！

「いや、あの眼もとの涼しいおれの別嬪は、ぐつすり寢こんでゐると見える。」哥薩克は歌をやめると、窓際へ近づいて呟やいた。「ハーリャ、お前ねむつてるのかい、それともおれの傍へ出てくるのが嫌なのかい？　おほかたお前は、誰ぞに見つかりはしないかと思ふんだらう、でなきやあ、その白い可愛らしい顏を冷たい夜風にあてるのが嫌なんだらう、きつと。それなら心配おしでないよ、誰もゐやしないし、今夜は暖かだよ。もしか誰ぞが來ても、おれがお前を長上衣にくるんで、

おれの帶をまいて、兩腕で隱してやるよ。——さうすれあ、誰にも見つかりつこなしさ。もしまた冷たい夜風が吹きつけても、おれがしつかりとお前を胸へ抱きしめて、接吻でぬくめて、白い可愛らしいお前の足にはおれの帽子をかぶせてやるよ。おれの心臟よ、小魚よ、頸飾よ！　ちよつとでも顏を出しておくれ。せめてその白い小さい手だけでも、窓からさし出しておくれ……。ううん、お前は寢ちやゐないんだ、この意地つぱり娘め！」彼は、ちよつとの間でも卑下したことを恥ぢるやうな調子で、聲を高めた。「お前はこのおれをからかふのが面白いんだな。ぢやあ、あばよだ！」

彼はくるりと背をむけて、帽子を片さがりに引きおろすと、靜かにバンドゥーラの絃を搔きならしながら、つんとして窓をはなれた。その時、戸口の木の把手がことりと廻つた。ギイつといふ音といつしよに戸があいた。そして、花羞かしい十七娘が微光につつまれて、木の把手をもつたまま、おづおづと後ろを振りかへり振りかへり閾を跨いだ。なかば朧ろな宵闇のなかに、澄みきつた二つの眼が星のやうに媚をたたへて輝やき、赤い珊瑚の頸飾がキラキラと光る。鋭い若者の眼は、面はゆげに少女の頰にのぼつた紅潮を見のがさなかつた。

「まあ、氣みぢかな方つたら！」さう、娘はなかば口の中で怨ずるやうに、男に言つた。「もう腹を立ててるんだわ！　なんだつてこんな時分にいらつしたの？　ときどき、人が多勢で往來をあち

こちしてるぢやありませんか……。あたし、からだぢゆうがぶるぶる顫へて……。」

「なあに、顫へるこたあないさ、おれの美しい戀人さん！　もつとぴつたりおれにより添ふんだよ！」さう言ひながら若者は、長い革紐で頸に懸けてゐたバンドゥーラを撥ねのけて、女を抱きよせながら、その家の戸口にならんで腰をおろした。「おれは一時間だつてお前を見ないでゐるのが辛いのさ。」

「あたしが今どんなことを思つてるか、知つてて？」娘は物思はしげに男をじつと視つめながら遮ぎつた。「なんだかあたし、このさきふたりはこれまでのやうにちよいちよい逢はれなくなりさうな氣がしてしやうがないの。こちらの人たちはみんな意地惡ねえ。女の子たちはあんな妬ましさうな目つきで眺めるし、若い衆たちは若い衆たちで……。そればかりか、この頃では、お母さんまであたしにきつう眼を見張るやうになつたんだもの。ほんとのことを言へば、あたし異郷にゐた時の方がよつぽど樂しかつたと思ふわ。」

この最後の言葉をいひきつた時、娘の顔には一種哀愁の影が浮かんだ。

「生れ故郷へ歸つて來て、やつと二た月やそこいらで、もう、退屈するなんて！　おほかた、このおれにも倦きが來たんだらう？」

「まあ、あなたに倦きが來るなんて、そんなことないわ。」娘は微笑んで言つた。「あたし、あなたがとでも好きなのよ、いなせな黒眉の哥薩克さん！　あなたの、その鳶いろの眼が、あたし大好きなの。その眼であなたに見られると、ほんとに魂の底からにつこりさせられるやうに思へて、ぞくぞくするほど好い氣持ちなの。それからあなたの、その黒い口髭の動く具合が、とても可愛いわ。あなたがおもてを歩いたり、歌を唄つたり、バンドゥーラを彈いたりするのを聽いてるのが、ほんとにあたし好きなのよ。」

「ああ、おれのハーリャ！」さう叫びざま、若者は娘を接吻して、一層ひしと自分の胸へ抱きすくめた。

「まあ、待つてよ！　ちよいと、レヴコー！　それよりか、あなた、あの、お父さんにお話しなすつて？」

「何をさ？」と、夢からでも醒めたやうに男は言つた。「ああ、おれがお前と結婚したいと思つて、お前もそれに贊成してるつてことかい？　ああ話したよ。」だが、この（話したよ）といふ一語は、彼の唇のうへで妙に憂鬱な響きを立てた。

「それで、どうでしたの？」

「親爺なんか、てんでお話にならんよ。あのおいぼれつたら、いつもの傳で、聞いて聞かぬ振りをしてるのさ。何を言つても取りあげないばかりか、あべこべに、おれが碌でもないところをほつ

つきまはつたり、仲間と往來で無茶な眞似ばかりしてると言つて、さんざ毒づくのさ。だが何も心配することあねえよ、ハーリャ！　おれは哥薩克魂に誓つて、きつと親爺を說き伏せて見せるから。」

「ええ、さうよ、レヴコー、あなたがさう仰つしやりさへすれば、屹度あなたの言葉どほりになるんですもの。あたし自分の身に覺えがあつて、よく分るの。ひよつとしたらあなたの言ひなりにはなるまいと思つたりするやうな時でも、あなたの言葉をきくと、ついうかうかとあなたの言ひなりになつてしまふんですもの。まあ、ちよいと！」女は男の肩に顏を凭せかけたまま、二人の前の櫻の樹のいりくんだ枝に、ちやうど下から網を張つたやうに蔽はれた、暖かいウクライナの空の、果しなく青ずむ方へ眼をあげながらつづけた。「御覽なさいつたら、そうらね、遠くの方でお星さまがキラキラしばたたいてゐるでしよ、ひい、ふう、みい、よう、いつ……。あれはほんとに神樣の天使たちが、天にあるめいめいの光りのお家の窓をあけては、あたしたちを見おろしてゐるんでしよ？　さうでせう、レヴコー？　あれは、このあたしたちの地上をお星さまが見護つてゐらつしやるんでしよ？　もし、人間にも鳥のやうに翼が生えてゐたら、どうでせうねえ――あすこまで、高あく高くとんで行かれたら……。怖いわね！　この邊には一本だつて天までとどくやうな樫の樹はないのね。だけれど、どこかしら遠い遠いお國に、梢が天國までもとどいて、ゆらゆら搖れてゐる

樹が一本あるつてことよ。さうして復活祭の前の晩になると、神樣がその樹をつたつて地上へ降りていらつしやるんだつて。」

「さうぢやないよ、ハーリャ、神樣のとこには天からこの下界までもとどく長い長い梯子があるのさ。それを復活祭の前になると、けだかい大天使たちがちやんと掛けるのさ、そして神樣が一番うへの梯子段に足をおかけになるといつしよに、惡靈どもは殘らず眞逆さまに轉げ落ちて、ひと塊まりになつて焦熱地獄へおちこんでしまふのさ。だから復活祭には、一匹だつて惡魔はこの地上にゐないつていふ譯なのさ。」

「まあ、なんて靜かに水が搖れてること！　まるで子供の搖籠みたいだわ！」さう言ひながらハンナは、暗い楓の茂みと、傷ましげな枝々を水に浸して哀哭してゐるやうな柳の木立にとりかこまれた、陰氣な池の面を指さした。恰かも力萎えた老翁のやうに、その池は已が冷たい懷ろに遠く暗い大空を抱擁して、燦爛たる星々に氷のやうな接吻をそそいでゐる。星々は輝やかしい夜の帝の間もなき台臨をはやくも豫覺するもののやうに、暖かい夜の大氣のなかで仄かに搖曳する。森のかたへの丘のうへには、一棟の古い木造りの館が、鎧扉を閉したままどろんでゐる。苔や雜草がその屋根を蔽ひ、窓さきには林檎の樹々が枝をひろげて生ひ茂り、森はその館を陰につつんで不氣味な凄みをそへ、榛の茂みが家の土臺ぎはから生ひはびこつて、池の汀へすべり下りてゐる。

「あたし、まるで夢みたいに憶えてゐるのよ。」と、ハンナはその館にじつと眸を凝らしながら言つた。「もう、ずつとずつと以前、まだあたしが小さくて、お母さんのそばにゐた頃に、あのお家のことで、なんか、それはそれは怖い物語を聞いたことがあつてよ。レヴコー、あなたは屹度そのお話ご存じでしよ。ね、話して頂戴な！」

「そんな話なんか、どうだつていいぢやないか、おれの別嬪さん！　女房連や馬鹿な手合は何を言ふやら分つたものぢやないよ。胸騒ぎがして、怖氣づいて、夜もおちおち眠られなくなるのがおちだよ。」

「話してよ、話してよ、ね、可愛い、いなせな黒眉のお兄さんつてば！」彼女はさう言ひながら自分の顔を相手の頬におしつけて、男を抱きしめた。「ぢやあ、きつと、あんたはあたしを好いてゐないんだわ、あんたには屹度ほかに好い娘があるんだわ。ね、あたし怖がりなんかしなくつてよ。夜もとつくり眠るわ。もし話して下さらなければ、それこそ眠られやしないわ。氣になつて氣になつて、考へこんぢやふから……。ね、話してよ、レヴコー！……」

「なるほど、娘つこには好奇心をそそのかす鬼がついてるつてえのは、ほんとだ、お聽きよ、ちやあ――それはずつと昔のことなんだよ。ね、あの館にはさる百人長が住んでゐたのさ。その百人長には一人の娘があつたんだよ。綺麗な令嬢で、ちやうどお前の顔みたいに、雪のやうな肌の娘だ

つたのさ。百人長はもうずつと前に奥さんを亡くしてゐたので、新らしく後妻をむかへることにしたのさ。『お父さまは二度目のお嫁さんをお貰ひになつても、今までのやうにあたしを可愛がつて下さるの？』――『ああ可愛がらいでか、嬢や、これまでよりか、もつともつと強くお前を抱きしめてやるよ！　可愛がらいでか、嬢や、もつともつと綺麗な耳環や、頸飾を買つてやるよ！』

で、百人長は若い後妻を新らしい住居へ迎へたのさ。その新妻は美人だつた。白い生地へ紅を溶かしこんだやうな瑞々しい女だつた。だが、その女が義理の娘をきつと睨んだまなざしは、娘が思はずあつと叫び聲をあげたくらゐ怖ろしかつたのさ。そしてまる一日ぢゆうこの邪慳な繼母は一と言も娘に口をきかなかつた。夜になると百人長は若い妻をつれて自分たちの寢間へ入つてしまつた。色の白い令嬢も自分の居間へ閉ぢこもつた。彼女は悲しくなつて、さめざめと涕きだした。ところが、ふと氣がつくと物凄い黑猫が一匹、いつの間にか彼女の身邊へ忍び寄らうとしてゐるのさ。その毛は火のやうに光り、鐵のやうな爪で床を掻く音がバリバリと聞える。ぎよつと膽をつぶした娘は、咽嗟に腰掛の上へ飛びあがつた――すると猫もその後を追つて來る。娘は寢棚の上へ飛びあがつた――と、猫もそこへ飛びあがつて、いきなり、娘の頸へ摑みかかつて咽喉を絞めようとする。娘は悲鳴をあげながら、猫をもぎはなしさま、床へ投げつけた。だが又しても、この物凄い猫は立らむかつて來る。娘は無性に口惜しくなつた。壁に父親の長劍が懸つてゐた。それをおつとり

さま床をめがけて掷げおろした――と、鐵の爪をもつた前足を片方斬りおとされた猫は、ぎやつと叫ぶなり、部屋の隅の闇がりのなかへ姿を掻き消してしまつた。その翌る日一日ぢゆう若い奥方は自分の居間から出て來なかつた。三日めに姿を見せた彼女の片手には繃帶が卷かれてゐた。可哀さうな令孃は自分の繼母が妖女(ウエーヂヤ)であつたことと、自分がその片手を斬りおとしたことをさとつた。四日めから百人長の娘は、卑しい百姓娘と同じやうに、水汲みやら家のはき掃除に追ひ使はれて、奥へはもう一歩も足踏みをさせられなかつた。可哀さうに、娘にはそれが何より辛かつたけれど、どうすることも出來なかつた。彼女は父のいひなりになつてゐた。五日めになると百人長は、途中の用意に麵麭ひとかけ與へないで、裸足のままの娘を家から追ひ出してしまつた。その時、令孃は白い顔を兩手でおさへながら、恨めしさうにかう言つて泣くよりほかはなかつた。『お父さま、あなたはこの生みの娘を豪なしにしておしまひになりました！　あの妖女があなたの罪ぶかい魂を滅ぼしてしまつたのです！　どうか神様があなたをお赦しになりますやうに。でも薄倖なあたしは、もうこの世に永らへることができません……。』――そこで、ほら、あすこに見えるだらう？……」さう言つて、レヴコーは館の方を指さしながら、ハンナを振りかへつた。「こつちの方を見て御覽よ、ほら、あの家から少しはなれた、一番小高い岸だよ！　あの岸から、その令孃は水のなかへ身投げをしたのだよ。そして、それつきりこの世へは戻つて來なかつたのさ……。」

「で、その妖女は？」と、涙のいつぱいにたまつた眼をじつと男にそそぎながら、おづおづとハンナが遮ぎつた。

「妖女かい？　婆さん連の想像では、その時からこつち、月夜の晩には、これまでにこの池へ身投げをした水死女たちが、みんな揃つてあの邸の庭へあがつて、月の光りで日向ぼつこをするんださうだが、百人長の娘は、そのかしらに立てられてるつてことだよ。なんでも、或る晩のこと、ふと、池のほとりにゐる繼母を見つけると、彼女は不意に躍りかかつて、喚き聲もろとも水のなかへ曳きずりこんでしまつたとさ。ところが、妖女はさすがに尻尾をみせないや。彼女は水底で水死女のひとりに化けてしまつたのだ。さうして、水死女たちが彼女を打ちのめさうと身構へてゐた若蘆の笞をまんまとのがれたといふのさ――女房連のいぶことを眞にうけての話だよ！まだこんなことも言つてるのさ――令孃は來る夜も來る夜も水死女たちをひとところへ集めて、そのうちどれが妖女なのかを見わけようものと焦つて、ひとりひとりの顔をしげしげと覗きこむのだが　今だにそれが分らないつてことだ。それで、だれかれなしに人の顔さへ見ればきまつて、それを見わけてくれればよし、さもなければ水の中へ曳きずりこむからと言つて嚇すのださうだよ。老人たちが語りつたへてゐる話といふのは、ざつとこのとほりだよ、ハーリャ！……今あすこを持つてゐる旦那は、あの敷地へ酒倉を建てようともくろんで、わざわざそのために酒男がこちらへ來てゐるんだ……。

おや、話聲がして來たよ。みんなが歌をおしまひにして歸つて來たんだな。では、さやうなら、ハーリャ！　靜かにお寢み、そして、あんな女房連の作りばなしなんか氣に懸けるんぢやないよ。」

さう言ふと彼は、娘をしかと抱きしめて、接吻をしておいて立ち去つた。

「さやうなら、レヴコー！」ハンナは、もの思はしげに暗い森の方を見つめながら言つた。

大きい、火のやうな月が、この時、おごそかに地平線のうしろから顏をのぞけた。まだ、した半分は地平にかくれてゐるが、もう下界は隈なく、一種莊嚴な光輝に滿たされた。池の水の面はキラキラと搖めいた。木立の影が小暗い青草のうへにくつきりと描きだされた。

「おやすみ、ハンナ！」さういふ聲がうしろで聞えると同時に、彼女は接吻されてゐた。

「あら、また戻つていらして？」さう言つて彼女は振りかへつたが、見も知らぬ若者を眼の前に見ると、咽嗟に脇へ身をかはした。

「おやすみ、ハンナ！」またしてもさういふ聲がして、再び彼女の頰を誰かが接吻した。

「まあ嫌だ、こつちにもゐたわ！」と、彼女は腹立しげに叫んだ。

「おやすみ、可愛らしいハンナ！」

「あら、まだゐるんだわ！」

「おやすみ！　おやすみ！　おやすみ、ハンナ！」さういふ聲といつしよに、四方八方から接吻

の雨が彼女のうへに降りそそがれた。

「まあ、ほんとに、この人たちつたら、一聯隊もゐるんだわ！」彼女は、我れ勝ちに自分のからだへ抱きつかうとする若者たちの群れから身をすりぬけながら、叫んだ。「なんて性こりもなく接吻ばかりする人たちだらう！　ほんとに、うつかり往來へも出られやしないわ！」

さういふ言葉についで扉はぴつたり閉され、ギーつといふ音がして、鐵の閂が挿されたらしかつた。

二　村　長

諸君は、ウクライナの夜を知つておいでだらうか？　いやいや、ウクライナの夜は御存じあるまい！　まあ、一度は見ておいて頂きたい。日は中天にかかり、宏大無邊の穹窿はいやがうへにも果しなく押しひろがつて、輝やき、息づいてゐる。下界は隈なく銀の光にあふれ、妙なる空氣は爽やかにも息苦しく、甘い氣懈さを孕んで、薫香の大洋をゆすぶつてゐる。神々しい夜だ！　蠱惑的な夜だ！　闇にとざされた森は靈化したもののやうにさゆらぎもせず、厖大な陰影を投げてゐる。また、かの池や沼はおだやかに鎭まりかへり、その水面の闇と冷氣は暗綠の園に邪慳らしく閉ぢこ

められてゐる。野櫻と櫻桃の樹のおぼこらしい叢林は、その根をおづおづと冷たい泉のなかへ伸ばしてゐるが、時々葉すれの音を立ててざわめくのは、夜風といふ浮氣ものがちよいちよい忍び寄つては接吻するのに、腹を立ててゐるのでもあらうか。見わたすかぎり地上の風景はまどろんでゐる。けれど天空は息づいてをり、萬象が奇しくも、莊嚴である。そして人間の魂の奥底にも銀いろの幻像が際限もなく、いみじき諧調をなして群がりおこる。神々しい夜だ！　蠱惑的な夜だ！

と、不意に、あらゆる森羅萬象が活氣づく――森も、池も、曠野も。莊重なウクライナの小夜鳴鳥の啼き聲が降るやうにわきおこつて、月も天心からそれに耳傾けるかと思はれるばかり……。村は魔術にでもかかつたやうに高臺のうへにまどろんでゐる。民家の群れは月光を浴びて、いやがうへにも白々と輝やき、低い壁が闇のなかに一際くつきりと浮かび出る。歌聲も杜絶え、すべてが寂とした靜謐にかへる。信心ぶかい人々はもうとうに寢ついてゐる。ただ此處彼處の狹い窓に灯影がさしてゐるばかり。二三の茅屋では、時刻に遲れた家の者が入口の閾のきはで晩い夕餉をしたためてゐる。

「いんにや、ゴパックはあんな風にやあ、踊らねえだ！　ちやんと、覺えといて貰ひてえだよ、ほんとに、てんでなつちやゐねえや。あの親爺め、何を言つてやがるんだか？……ええか、かうだよ！ゴップ、タララ！　ゴップ、タララ！　ゴップ、ゴップ、ゴップ！」かう、醉つぱらつた中年

の百姓が往來で踊りながら、ひとりごとを言つてゐる。「どうしてどうして、ゴパックはあんな風にやあ踊らねえだ！　なんで嘘をいふもんか？　いんにや、さうぢやあねえだ！　そうらかうだよ、ゴップ、タララ！　ゴップ、タララ！　ゴップ、ゴップ、ゴップ！」

「おやおや、この人は氣でも狂つただかね！　若い衆でもあることか、好い齢をからげて、往來で夜よなか踊りををどつてるなんて、子供たちの好い笑ひ草だよ！」かう、藁をかかへた、行きずりの老婆が、おつたまげて聲をかけた。「自分のうちい戻りな！　もうとつくに寢る時分だによう！」

「戻るつてことよ、おらあ！」と、百姓はたちどまつて答へた。「戻るつたらさ。なんの、どんな村長野郎だつて、おいらの目にやあねえだぞ。なんでえ、あの下種野郎めが、寒中に、人のど頭から冷水をぶつかけるのを村長の役柄だと思つて、鼻を高くしてけつかるだ！　へん、村長村長と威張りやあがつて。おらはおらの村長だい。そうら、神様の罰があたるもんならあたるがええだ！　おらはおれ樣の村長だい！　さうだとも、でなかつたら……」と、その男は罵りつづけながら、行きあたりばつたりの一軒の家に近づいて、その窓の前に立ちどまると、木の把手でも搜すやうに窓硝子を指で撫でまはしはじめた。「こうら、おつかあ！はやく開けねえかつ！　おつかあつたら！哥薩克にやあ、もう寢る時分だぞ！」

「まあ、カレーニクさん、あんたどこの家へ入らうつてえの？　あんたは、よその家へ戸迷ひしてゐるのよ。」かう、陽氣な唄うたひを終つて歸りがけの娘たちが、笑ひながら、彼の後ろから喚きたてた。「あんたの家、をしへてあげようか？」

「うん、敎へてくんろよ、親切な姐さんたち！」

「まあ、親切な姐さんたちだつて？　ねえ、みんな聞いて？」さう、そのなかの一人が言葉尻を捉へた。「なんてカレーニクさんのお世辭のいいこと！　これぢやあ、家を敎へてあげない譯にはいかないわね……でも駄目よ、その前に一べん踊んなさいな。」

「踊れ？……ちえつ、なかなか隅におけねえあまつ子たちだ！」かう、間伸びのした口をききながら、カレーニクはにやにやして、指をあげて嘯したが、足はひとところにじつとしてゐないで、あちらこちらへふらふらとよろめいた。「それぢやあ接吻させるけえ？お前らみんな接吻てやらあ！……」さう言つて、よろよろした足どりで娘たちの後ろを追つかけはじめた。娘たちは金切り聲をあげて跳びすさつたが、カレーニクの足どりのあまり疾くないのを見てとると、勇氣を盛りかへして、往還を横ぎつて向ふ側へ渡つた。

「ほら、あれがあんたのおうちよ！」娘たちは遠ざかりながら、ほかの家とは圖抜けて大きい村長の住居を指さして叫んだ。カレーニクは又もや村長の惡口をほざきながら、すなほにその方角

へ、よろよろとして歩き出した。

ところで、かうした、甚だもつて香ばしからぬ蔭口を叩かれてゐる村長とは、いつたい何者だらう？　いや、實にこの村長こそ、村の大立物なのだ！　カレーニクが目ざすその家へ行きつくまでにわれわれは間違ひなくこの人物について若干の説明をすることが出來ようと思ふ。村民は誰れ彼れなしに村長の姿を見ると遠くから帽子をとるし、ほんのおぼこの娘つ子でも、こんにちはと挨拶をする。若者として、誰ひとりかうした村長になりたがらない者はなからうといふものだ。誰の嗅煙草入にしろ、村長に對しては御意のままに開放されて、どんな頑丈な百姓でも自分の綿物の嗅煙草入へ、村長が太い無骨な指を突つこんでゐるあひだは、帽子をとつたまま恭々しくさし控へてゐなければならないといふ始末。また村の寄りあひ、卽ち村會においては、村長の投票數にも一定の限度があつたにも拘らず、いつも最高點で勝利を占め、まるで氣隨氣儘に自分に都合のいい者を使つて、路ならしや溝掘りをさせるのであつた。村長はひどく氣むづかしやで苦虫を嚙みつぶしたやうな顏をしてゐて、あまり口數をきくのを好かなかつた。もう、よほど以前のことであるが、故エカテリーナ女帝陛下がクリミヤへ行幸になつたをり、彼は供奉の一員に選ばれて、二日間その大命を拜し、あまつさへ帝室馬車の馭者臺に馭者と並んで同乘する光榮を擔つたことがあつた。その時以來、この村長は一層こざかしく勿體さうに首を前屈みにして、長く下へ垂れさがつたねぢれた泥

鰐髭を撫でながら、鷹のやうな眼つきで額越しにあたりを見ることを覺えこんだ。またその時以來、人がどんな話をしかけても必らず、自分が女帝陛下に扈從して帝室馬車の馭者臺に席を占めた時のことに話頭を持つてゆくことを忘れなかつた。村長はどうかすると聞えぬ振りをすることが好きで、殊に自分が耳を貸したくないやうな話の出た時にさうなのである。村長はしやれた服裝には我慢のならない方で、いつも黒い自家織の羅紗で仕立てた長上衣をまとひ、色染めの毛織の帶をしめてゐるが、女帝のクリミヤへ行幸の砌りに青い哥薩克外套を著た以外には、つひぞ彼がほかの服裝をしたところを見た者がない。しかし、そんな頃のことを覺えてゐる者は、もう村ぢゆうに一人もないのだけれど、その哥薩克外套はちやんと長持の中へしまつて錠がおろしてあるのだ。村長は鰥だが、家には亡妻の妹が同居してゐて、朝夕の煮焚きをしたり、腰掛を洗つたり、家を白く塗つたり、彼の肌着にする糸を紡いだりして、家事のすべてを取りしまつてゐる。村ではこの女がそんな身寄の者ではないやうに言つてゐるが、何しろ村長のことといへば、あらゆる誹謗の種にしたがる惡口屋の多いことだから、なんとも豫斷の限りではない。だが、さうはいふものの、これにもいくらか理由がないでもない、といふのは、村長が草刈女の集まつた野原へ出かけたり、若い娘のある哥薩克の家へ行つたりすると、いつも義妹だといふくだんの女の機嫌が甚だ宜しくないからだ。村長は片目ではあるが、その代り彼の一粒きりの眼が曲者で、器量のいい百姓女なら、どんな遠く

からでも見つけてしまふ。それでも義妹だといふ觸れこみの女が、どこぞから覗いてをりはせぬかと、よくよく見きはめてからでないと、決してその獨眼を美しい女の顏へは向けない。それはさて、われわれはこの村長について必要なことは殘らず物語つたつもりだが、醉つぱらひのカレーニクはまだ道程の半ばにも達しないで、なほもその呂律のまはらぬ、だらしのない舌でしか口にのぼすことの出來ないやうな擇りぬきの惡態で、くどくどと村長を罵りつづけてゐる。

三　思ひもかけぬ敵手　策謀

「ううん、嫌だよ、おらあ嫌だ！　君たちももうそんな馬鹿騒ぎはいい加減にきりあげたらどうだい？　よくもそんな無茶なことに厭きないんだなあ！　でなくつたつて、おれたちはいい加減しやうのないやくざ者に見られてるんぢやないか。もう溫なしく寢た方がいいよ！」かうレヴコーは、自分を何か新らしい惡戲にさそふがむしやら仲間に向つて答へた。「さやうなら、みんな！　お寢み！」そして足ばやに仲間からはなれて、往來をすたすたと歩き出した。

（あの眼もとの凉しいおれのハンナは、もう寢てゐるかしら？）さう思ひながら、彼は、われわれにはすでに馴染の、くだんの櫻の木立にかこまれた茅屋へと近づいた。と、ひつそりとした中に

低い話聲が聞える。レヴコーは立ちどまつた。木の間がくれにルバーシュカが仄白く見えてゐる……。(いつたい、どうしたつていふのだらう?)さう思ひながら、もう少し近く忍び寄ると彼は一本の樹の後ろへ身をかくした。まともに月光を浴びてこちらを向いてゐる少女の顏が輝やいて見える……。それはハンナだ! が、彼の方へ背中をむけて立つてゐる。あの背の高い男は何者だらう? 彼はじつと眼を見はつて、ためつすがめつしたが、駄目だつた。その男は頭から足の先まで蔭影にかざされてゐるのだ。ただほんのりと前から光りをうけてはゐるが、レヴコーがちよつとでも前へ出ようものなら、いやでも自分の軀を明るみへ曝さなければならぬ。彼はそつと樹によりかかつたまま、その場に立ちつくさうと肚をきめた。と、少女の口から明らかに自分の名がもらされた。

「なに、レヴコー? レヴコーなんざ、まだ青二才だあな!」と、嗄がれた低い聲で、その背高の男が言つた。「もしも、おれとお主の前で、彼奴に出つくはすやうなことがあつたら、彼奴の前髪を掴んで引きむしつてくれるわい。」

(おれの前髪をひきむしるなんて、口はばつたいことをほざきをるなあ、いつたいどんな野郎だか、ひとめ見てやりたいものだ)さう口の中で呟やきながら、レヴコーは一語も聽きもらすまいと一心になつて頸を伸ばした。しかし、その見知らぬ男は極めて低い小聲で話しつづけてゐたので、

何ひとつはつきり聽き取ることが出來なかつた。

「まあ、あんた、よくも愧かしくないのねえ」と、その男の言葉の終るのを待つて、ハンナが言つた。「うそ仰つしやい。あんたはあたしを欺かしてらつしやるんだわ。あんたがあたしを愛してなどいらつしやるもんですか。あたし、あんたに想はれてゐようなんて、夢にも思はなくつてよ!」

「分つとる。」と、背の高い男が言葉をついだ。「レヴコーの奴がいろいろと碌でもないことをお主に吹つこんで、お主の心を迷はせをつたのだらう、(玆でその見知らぬ男の聲に若者はどこか聞き覺えがあるやうに思つた。)ようし、あのレヴコーめに。きつと思ひ知らせてやるぞ!」かう、やはり同じやうな調子で見知らぬ男はつづけた。「彼奴は、おれが彼奴のいたづらを、なんにも知らんと思つてうせるのだ。あの碌でなしめが、今におれの拳固の堅さを味はつて見くさるがいい!」

かうまで言はれては、レヴコーも最早このうへ憤りを抑へてゐることが出來なかつた。二た足三足その男の方へにじりよるなり、渾身の力をこめて、そいつの横つ面に一撃を加へようとして拳しを振りあげた。その拳しにかかつては、如何に頑丈さうに見えてもその見知らぬ男は恐らくひとたまりもなく、立ちどころに打ちのめされたことだらう。ところが、ちやうどその時、月光がさつとこの男の顏を照らした。と、レヴコーはその場に棒立ちに立ちすくんでしまつた——眼の前に立つてゐるのは自分の父親ではないか。思はずかぶりを振つて、喰ひしばつた齒の隙間から微かに呻き

をもらしたのを見ただけでも、その驚愕のほどが察しられた。その時、一方ではさらさらといふ衣ずれの音がして、ハンナが急いで家の中へ身をひるがへすと、ぱたんと扉を閉めてしまつた。

「さやうなら、ハンナ！」この時ひとりの若者が忍び寄りざま、さう叫んで村長に抱きついたが——こはい口髭にぶつかると、膽をひやして後ろへ飛びすさつた。

「さやうなら、別嬪さん！」と、別の一人が叫んだ。しかし今度は村長の手ごはい肘鐵砲を喰らつて、どんでんがえしに、その場へ投げ出された。

「さやうなら、お寐み、ハンナ！」さう、口々に叫びながら、幾人もの若者が村長の頸つたまにぶらさがつた。

「退きやあがれ、この忌々しいきちがひどもめ！」と、村長は體を振りほどきざま、若者たちに足蹴を喰らはせながら怒鳴つた。「このおれが、汝たちにやあ、ハンナに見えるのかつ！ この惡魔の悴どもめが、親爺の跡を追つて絞首臺へあがる支度でもさらすがええ！ 蜜にたかる蠅かなんぞのやうに、うじやうじやと喰らひつきやあがつて！ ハンナなんぞ、幾人でも呉れてやるわい！……」

「村長だ！ 村長だ！ こいつあ村長だぞ！」さう叫び出すなり、若者たちは四方八方へ逃げ散つた、

（飛んでもない親爺だ！）やつと驚愕から我れに返つたレヴコーは、惡態をつきつき立ち去つてゆく村長の後ろ姿を見送りながら、かう呟やいた。（なんといふ巫山戯た眞似をする親爺だらう！ まつたく呆れたもんだ！ なるほど、さういへば、あのことを持ち出すたんびに、奴さんが聞いて聞かぬ振りをするのが、どうも變だと思つたて。ようし、待つてろよ、老いぼれめ、今に若い娘つ子の家の窓下へはどんな風にして忍びこむものか、このおれが教へてやらあ、どんな風にして他人のいろごとの邪魔をするものかつてこともさ！）——「おういい、みんなこつちへ來い、こつちへ！」と、またもやひとつところへ寄りかたまつた若者たちにむかつて手を振りながら彼は叫んだ。「さあ、ここへ來いよ！ おらあ先刻は君たちに歸つて寢ろなんつて言つたつけが、また思ひ直したから、夜つぴてだつて君たちと騒ぎまはるぜ。」

「そいつあ素敵だぞ！」と、村一番の惰け者で札つきの不良として知られた、肩幅の廣い、ずんぐりした若者が答へた。「おらあ何時でも思ひきり騒いだり惡戯の出來なかつた時にやあ、なんだか胸がつかへたやうで氣持ち惡いんだよ。まるで、帽子か煙管でもおつことしたやうな、いやに間の抜けた氣持なのさ。つまり哥薩克でねえやうな氣がするつて譯さ。」

「どうだい、今夜はひとつ、あの村長をうまく取つちめてやらうと思ふんだが？」

「村長を？」

「うん、村長をさ。まつたく奴あ、なんと思つてやあがるんだらう？　まるで總帥（ゲトマン）かなんぞのやうにおれたちを顎で指圖しやあがる。奴隷のやうにこきつかふのはまだしも、おいらの娘つ子を口說きやあがるでねえか。恐らく村ぢゆうに、濠皮の剝けた娘つ子で、あの村長に尻を追つかけまはされねえのは、一人もあるめえぜ。」

「それあ、まつたくだよ、まつたくだよ！」と若者たちは異口同音に喚きだした。

「なあ兄弟、おれたちは何も奴隷ぢやあるまい？　村長とおんなじ生れぢやあねえか？　おいらたちは、これでも有難えことに自由の哥薩克だぜ！　なあ兄弟おれたちが自由の哥薩克だつてえ意氣を奴に見せてやらうぢやねえか！」

「見せてやらうとも！」と、若者たちは叫んだ。「ところで村長といへば、あの助役も見逃しにやあ、出來ねえぜ！」

「助役だつて見逃すこつちやねえさ！　そこで、おれの頭んなかにあ、村長をからかつた素敵な唄が、ちやんとお誂らへむきに出來あがつてるんだ。さあ行かう、そいつをみんなに敎へてやるよ。」かう、レヴコーはバンドゥーラの絃を手で搔き鳴らしながらつづけた。「それからなあみんな、めいめい思ひ思ひに變裝をして呉んねえか！」

「さあさ、哥薩克、浮かれよ騷げよだ！」と、例のずんぐりしたおつちよこちよいが、足拍子を

取つて手を拍ちながら言つた。「なんて豪氣だ！　なんて自由だ！　亂痴氣さわぎが始まるてえと、遠い昔に返つたやうだぞ。胸がせいせいして、氣持がよくつて、心はまるで天國にゐるやうだ。そうら、みんな、浮かれた浮かれた！」

かうして若者たちの一團は騷々しく往還を突進して行つた。その喚き聲に夢を醒された信心ぶかい老婆たちは、小窓の戸をあげて、眠さうな手つきで十字を切りながら、『また、若い衆たちが巫山戲まはつてゐるさうな！』と呟やくのだつた。

四　若者たちの騷擾

往還のはづれにただ一軒きり、まだ灯影のさしてゐる家があつた。それが、村長の住ひである。村長はもうとつくに夕餉をすましてゐたから、平素ならてつきり遠の昔に寢こんでゐる時分であつたが、ちやうど今、自由哥薩克のあひだに手頃な地所をもつてゐる地主が酒蒸溜場（さかとしば）を建てるためによこしてゐる蒸溜人（たし）が彼のところへお客に來てゐたのだ。客は聖像したの上座に坐つてゐた——それは肥つた背の低い男で、燃えきつて灰になつた煙草がぼろぼろ轉げ出るのを指でおさへおさへ、ひつきりなしに唾を吐きちらしながら、短かい煙管をスパスパ吸ふのが、いかにも滿足らしく、絶

えず眼をにこにこさせてゐる。雲のやうな煙が忽ち彼の頭のうへにひろがつて、鳩羽いろの靄が彼をつつんでしまつた。その樣子が、どこかの酒蒸溜場の大煙突が屋根のうへにのつかつてゐるのに退屈して、のこのこと村長の家へやつて來て、卓子のまへに容態ぶつて坐りこんだといつた恰好である。その鼻の下に濃い短かい髭がツクツクと突き出てゐるのが、煙草の煙をとほして朦朧と見え隱れするので、この蒸溜人は納屋の猫の繩張りを侵して、鼠をとつて口に銜へてゐるのではたいかとも思はれる。村長は主人らしく、ルバーシュカひとつにリンネルの寬袴といつた服裝で座についてゐる。彼の鷲のやうな獨眼は、ちやうど春づきかかつた夕陽のやうに、だんだん細くなつて視覺がぼやけはじめる。卓子のはじには村長の與黨の一人である村役人が、主人に對する敬意から長上衣を一著に及んで、煙管をスパスパやつてゐる。

「もう直きのおつもりですかい？」と、村長は蒸溜人の方へ向き直つて、欠伸の出かかる口を急いで呪禁の十字を切りながら言つた。「その酒蒸溜場を開きなさるのは？」

「都合さへよければ、この秋ごろから醸造りはじめられるだらうと思ひますんで。聖母祭にやあ、村長殿が千鳥足でもつて往來に獨逸風の輪麵麭の形を描かれることは、まづ賭をしてもようがすて。」

かう言つた時、蒸溜人の兩眼は影をひそめて、その代りに眞一文字に左の耳から右の耳まで一筋

の横皺が寄り、その胴體は笑ひにゆすぶられて、一瞬のあひだ、彼は煙のたちのぼる煙管を、その愉快さうな唇から離した。

「どうか、さうあらせたいものぢやて。」と村長が、微笑に似たやうな表情を顏に浮かべながら言つた。「それでも、この節ぢやあ、好い鹽梅に、少しは造り酒屋も出來たにやあ出來ただが。むかし、わしが女帝陛下の供奉をしてペレヤスラーヴリ街道を通つた時分にやあ、あの、死んだベスボローディコがまだ……」

「なるほど、さういへば想ひ出しますわい！　あの頃にやあ、*クレメンチューグから*ロムヌイまでのあひだに、造り酒屋は二軒とはなかつたでがせうが、それが當節ぢやあ……。あの忌々しい獨逸人どもが何を發明しをつたか、お聞きなすつたかい？　なんでも人の話ではね、今に奴らは、堅氣な基督教徒のやうに薪を使はないで、何か怪しげな蒸氣でもつて酒を蒸溜すやうになるつてえことですぜ……。」かう言ひながら、蒸溜人は感慨ぶかげに卓子の上へ眼を落して、そのうへに載せた自分の兩手を眺めた。「いつたい蒸氣をどうするのか――いや、さつぱり解せないこつて！」

「なんちう阿房どもぢやらう、その罰當りの獨逸人どもあ！」と、村長が言つた。「畜生ども、ほんとに棒うちを喰らはせて呉れるのに！　蒸氣で物が煮えようなんて、つひぞ聞いたこともないて。それぢやあ、ボルシチひと匙口い持つて行つても、若い仔豚の代りに我れと我が唇を燒いてし

まふ道理ぢやないか……。」

「で、あの、なんですの……」と、その時、寢棚のうへにあぐらをかいて坐つてゐた、くだんの村長の義妹だと稱する女が口を出した。「あなたはずつと此處で、おつれあひとは別々にお暮しなさるおつもり？」

「だといつて、彼女がわしになんの用がありますだね？　なんぞ好いところでもありやあ、また格別ですがね。」

「そんなに見くびつたものでもなからうがな？」と村長が、その獨眼をじつと相手に凝らしながら訊ねた。

「見くびるにも見くびらんにも！　二目たあ見られねえ老いぼれ婆あで、そのご面相と來ちやあ、皺だらけで、まるで空の巾著さね。」そして蒸溜人のちんちくりんな胴體は、又もや哄笑とともに搖ぶられた。

ちやうどその時、入口の外で何かゴトゴト物音がしはじめた。と、だしぬけに戸があいて——一人の百姓が、帽子も脱らずに、閾を跨いで、のつそり入つて來るなり、きよとんとして家のまんなかに突つ立つたが、そのままぼんやり口をあいて天井を眺めまはした。それは他ならぬわれわれのお馴染のカレーニクであつた。

「そうら、うちい戻つたわい。」と、彼は戸口に近い腰掛へ尻をおろしながら、現在自分の眼の前にゐる人々には、てんで注意も拂はないで言つた。「くそ忌々しい惡魔めが、道をひき伸ばしやあがつて！　歩いても歩いても、きりがねえだ！　まるでどいつかに足を叩き折られたやうな氣がすらあ。おい、おつかあ、そこの皮外套を取つてくんな、寢敷にするだよ。お前のゐる煖爐の上へなんぞ行くもんけえ。どうしてどうして、行くもんけえ。おお足が痛え！　取つてくんなつたら、そこんとこにあらあな、聖像の下んとこによ。だが氣い附けろよ、粉煙草の入えつた壺をひつくら返さねえやうに。いんにや、もうええだよ！　お前は又、けふは喰らひ醉つとるだべえからな……。おらが勝手に取つて來るだ。」

そこでカレーニクは少し身を起しさうにしたが、いつかな不可抗力が彼を腰掛に釘づけにしてゐた。

「これぢやによつて可愛いぢやて、」と村長が言つた。「ひとの家へやつて來をつて、まるで自分のうちのやうな振舞をしてやあがるだ！　ようし、こいつに一つ、性根を入れかへてこまさにやあ！……」

「まあまあ、暫らく休ませてやりなせえ！」と、蒸溜人がその手を掴んで引きとめながら、言つた。「これあ、なかなか好いお得意ですからね、かういふ御仁が多ければ多いほど——われわれの酒

蒸溜場も繁昌するといふもんでしてな……。」

だが、そのとりなしは決して親切氣から出たものではなかつた。常々この蒸溜人は大のかつぎやであつたから、この折もすつかり腰掛に尻を落ちつけてゐる人間を戸外へ追ひだすのは、何か禍ひを招く因になると考へたからであつた。

「どうも、老けて來たちふものかな！……」と、カレーニクは腰掛の上へ横になりながら呟やいた。「かりに醉つてゐたにしたところで、こんなはずあねえだて。それにおらあ、醉つちやゐねえんだ。どうしてどうして、醉つてなんぞゐるもんけえ！　何もおら嘘を言ふことあねえんだ。おらはこれを、あの村長の面前でだつて立派に言つてのけて見せるぞ。村長がなんでえ？　あん畜生め、くたばつてしめやがりや好い！　ふん、唾でもひつかけて呉れらあな！　あの一つ眼入道め、荷馬車にでも轢き殺されてしめやがれば好いに！　寒中に、ひとに冷水なんぞぶつかけやがつて……。」

「ちえつ、この豚めが、家のうちへ入るばかりか、卓子へ足まで掛けやがる。」さう言ひざま、村長は憤然として席を立つたが、ちやうどその時、だしぬけに、ガチャンと窓の硝子が粉微塵にくだけて、大きな石塊が一つ彼の足もとへ飛んで來た。村長はその場に立ち竦んだ。「一體、どこの首くくり野郎だ？」と、その石塊を拾ひあげながら彼は喚いた。「こんな石つころを投げこみをつたのが、どいつだか判つて見ろ、いやといふほど、そやつを蹴飛ばして呉れるから！　なんといふ惡戯

をしくさるのぢや！」彼はその石塊をにぎつて爛々たる眼差でそれを見つめながら言葉をつづけた。「そやつこそ、こんな石で咽喉でもつまらせをれば好い……。」

「お止しなせえ、お止しなせえ！　鶴亀々々！」と、蒸溜人が顏色を變へて遮ぎつた。「どうぞこの世でもあの世でも、そんな惡口はたたきなさるまいものぢや、鶴亀々々！」

「ふん、庇ひだてをしなさるのぢやな！　なあに、あんな野郎は、くたばつちまやがれば好いんだ！……」

「と、飛んでもねえことを！　あんたは、死んだわつしの姑の身に起つたことを御存じないと見えますね？」

「姑さんの身にだと？」

「ええ、姑の身に起つたことでがすよ。なんでも或る晩げのことで、さう、今頃よりもう少し早目の時刻だつたでがせう、みんな夕餉の卓についてをりましたのさ、死んだ姑に、死んだ舅、それに日傭男に日傭女と、子供が五人ばかりとね。姑は煮團子を少し冷さうと思つて大鍋から鉢へ小分けにして移してをりましたのさ。仕事の後で、皆んなひどく腹がへつてたもんだから、團子の冷るのが待ちきれなかつたんでさあね。長い木串に團子を突きさしては食りはじめたもんで。するてえと、不意に何處からともしれず、とんと素性も分らねえ男が入つて來て、お相伴にあづかりたいと

いふんでさ。空つ腹の人に食はせねえつて法はありませんやね。で、その男にも串を渡したもんで。すると、まあ驚ろくまいことか、その男はまるで牛が乾草を食ふやうに、がつがつと團子を詰めこむのなんのつて、一同がまだやつと一つづつ食べて、次ぎのを取らうとして串を差し出した時にやあ、鉢の底はまるでお邸の上段の席みてえに、きれいさつぱりと片づいて何ひとつ殘つちやゐゐねえんでさ。姑はそこで、また新たにつぎ足しましたが、今度はお客さんも鰐腹つめこんだことだから、たんとは食ふまいと思つてゐるとね、どうしてどうしていよいよ盛んに貪るやうに、又ぞろそれもぺろりと空にしてしまつたでがすよ。腹の空いてゐた姑は心のなかで、《ほんとに、その團子が咽喉につまつて、おつ死んでしまへば好いのに！》と思つただね。するとどうでがせう。不意にその男が咽喉をつまらしてぶつ倒れてしまつただ。みんなが駭けよつて見ると、もう息はなかつたといひますだよ。窒息つてえ奴でさあね。」

「そんな業突張な喰らひ抜け野郎にやあ、さうならねえのが間違つてまさあ！」と、村長が言つた。

「いんにや、さうぢやありましねえだよ。だつて、その時以來、姑はどうにもそれが氣になつて氣になつてなんえねでがしてな。それに日が暮れると死人が迷つて來るつてんでがすよ。そやつが煙突のてつぺんに腰かけて、團子をくはへてるつてんでがすよ。晝間は至つて穩かで、さらさら幽

靈の氣配などはありましねえのに、あたりが薄暗くなりかけるてえと、どうでがせう。屋の棟を見ると、ちやんと畜生め、煙突に跨がつてゐくさるんで。」

「團子をくはへて？」

「ええ、團子をくはえてね。」

「變だねえ！　わしもそんなやうな話を聞いたつけが、なんでも、死んだ女が……。」

かう言ひかけて村長は口をつぐんだ。窓の下でがやがやいふ聲がして、踊りの足拍子が聞えだしたのである。はじめに低くバンドゥーラの絃の音がすると、それに合はせて一人が歌ひだした。絃の音がひときは高くなると同時に、幾人かの聲で合唱をやりはじめた——歌聲は旋風のやうにどつと沸きあがつた。

、みんな、どうだい、聞いたかい？
おいらの頭はしつかりしてるが
めつかち村長のどたまの箍は
えらくゆるんでグラグラしてるぞ。
桶屋、はめろや鋼鐵の箍を！
鋼鐵の箍はめ、ポンと打て村長を！

桶屋ぶてぶて、村長のどたまを
棒でぶてぶて、鞭で打て！
おいらの村長は白髪でめつかち、
悪魔におとらぬ老爺の癖に、
阿呆め、浮氣で甚助野郎、
若い娘みりや、あと追ひまはす。
間抜め、おいらの邪魔するよりは、
とつととすつこめ墓場の中へ！
さあさ、あいつの口髭ひつぱり
首根つこひつぱたいて、房髪（ナムーブ）をむしれ！

「なかなか巧え歌ぢやどわせんか！」と、蒸溜人は少し横へ頭をかしげながら、その大膽不敵な所行に呆れ果てて棒立ちになつてゐる村長の方へ向きなほつて、言つた。「なかなか面白い！　だが。村長さんのことをあしざまに詠みこんだ點だけは怪しからん……。」

それから彼は、再び兩手を卓子のうへに載せると、その眼に一種甘美な情緒を湛へたまま、なほも聴耳を敲てたが、窓の下では笑ひ聲と共に（さあ、もう一度！　もう一度！）といふ叫び聲が聞

えてゐた。ところで、少し目端のきく人ならば、村長が決して驚愕のあまりその場にじつと知ち竦んでゐたのでないことに直ぐ氣がついたであらう。ちやうどこんな風に、老獪な猫は世なれぬ鼠に自分の尻尾のまはりを勝手に跳ねまはらせておきながら、おもむろに相手の逃げ道を斷つ手段を廻らすものである。村長の獨眼はじつと窓へ注がれてゐたが、やがて村役人の方へチラと合圖をすると同時に、彼の手が戸口の把手にかかつた。と、不意に往來で叫び聲があがつた……。數々の美質を具へたが上にも多分の好奇心に惠まれてゐた蒸溜人は、すばやく煙管に煙草を詰めるなり、戸外へ駈け出したが、わるさ連は逸速く逃げ去つたあとであつた。

「どうして、逃げようつたつて逃げられるこつてねえぞ！」と、黒い羊皮の皮外套を裏がへしに、毛の方を表にして著こんだ一人の男の手を捉へて、曳つぱつて來ながら、村長が呶鳴つた。蒸溜人は待つてましたとばかりに、その秩序紊亂者の顏を覗きこんだが、長い髯と物凄く隈取つた面相に出つくはすと、ぎよつとして後ろへ跳びのいた。「どうしてどうして、逃げようたつて駄目だぞ！」村長は捕虜をひつ立てて玄關の方へまつすぐに進みながら喚いた。捕虜は少しの抵抗もせずに、まるで自分の家へでも入るやうに落ちつき拂つて村長の後ろにしたがつた。「カルボー、納屋をあけい！」と村長は村役人に言つた。「こいつは暗がりの納屋へぶちこんでおかう。さうしておいて、助役を起したり、村役人を召集して、同類のやくざどもを殘らず逮捕して今夜ぢゆうに彼奴らを處分

してしまはにやならん！」

村役人は玄關口で小さな海老錠をガチャガチャ鳴らして納屋の戸を開けた。ちやうどその時、捕虜は玄關口の闇に乘じて、突然、おつそろしい腕力で捕手の手をすり拔けた。

「汝どこへ行きをる！」とばかりに、村長はむんずとその襟髪を掴んだ。

「放しておくれ、わたしだよ！」といふ細い聲が聞えた。

「駄目なこつちや！　どうしてどうして、畜生め、女の聲を出しをらうと惡魔の作り聲をほざかうとも、おれを誤魔化すこたあ出來ねえぞ！」さう言ふなり村長が、捕虜を暗がりの納屋のなかへ力まかせに突き飛ばしたので、哀れな捕虜は呻き聲を立てたほどであつた。それから村長は村役人をつれて助役の住居へと出かけた。その後ろからは、まるで蒸汽船のやうに煙草の煙を吐きながら、蒸溜人がついて行つた。

彼等は三人とも首を垂れて、めいめい物思ひに沈みながら歩いてゐたが、暗がりの路地へ折れる曲りかどで、不意に、むかふからやつて來た連中とこつぴどく鉢合せをして一齊にあつと叫んだ。同じやうな叫び聲がむかふでもした。村長が獨眼をしばたきながら前方を見ると、魂消たことに、當の助役が二人の村役人をつれてこちらへやつて來るところであつた。

「おや、助役さん、わしは今、あんたのとこへ行くところぢやが！」

「手前は又、あなたのお宅へ伺ふところでして、村長さん！」

「奇怪なことが起りをつてね、助役さん！」

「いや、こちらにも奇怪な事件がありましてね、村長さん！」

「ふん、どういふ？」

「若い者どもが暴れまはりますんでな！　往來ぢゆうを隊を組んで荒しまはつてをりますよ。あなた樣のことを、いやどうも口……にするのも小つ羞かしい言葉で嗾し立てますが、それこそあの醉つぱらひで不信心な大露西亞人でも口にするのを憚かるやうな、如何はしい言葉でしてな。

（かう言ひながら、縞の寬袴に糅いろの胴着を著こんだこの痩形の助役は、しよつちゆう、頸を前へぬうつと伸ばすかと思ふと、すぐに又もとの姿勢にかへる妙な動作をくり返すのだつた。）手前がちようと、うとうとつとしたかと思ひますと、忌々しい暴れ者どもめが、卑猥きはまる唄をうたつたり、ガタガタ戸を叩いて、目を醒まさしてしまひをりましたんでな！　こつぴどく叱りつけてやらうと思ひましたが、寬袴をはいたり胴着をきたりしてゐるうちに、雲を霞と逃げうせてしまひをりました。それでも、首謀者らしい奴だけは取り逃がしませんでしたよ。今、あの科人を拘留する小屋の中で大聲を張りあげて唄をうたつてをりますがね。どうかして彼奴の正體を見屆けて呉れようと思つたのですが、亡者の礫につかふ釘を鍛つ惡魔そつくりに、顏ぢゆうを煤で塗りたくつて

をりますのでして。」

「で、そいつはどんな服装をしてゐるね、助役さん？」

「黒い皮外套を裏がへしに著てうせゐるのですよ、村長さん。」

「それあ、ほんとに間違ひのない話かね、助役さん？　もしその同じ張本人が、わしがとこの納屋に坐つてをるとしたらどんなもので？」

「いんにや、村長さん！　さう言つちやあなんですが、間違つてゐなさるのは、あなたの方ですて。」

「灯を持つて来い！　ぢやあ一つ首實驗といふことにしよう！」

灯が取りよせられて、戸が開かれた――と、村長は眼の前に自分の義妹の姿を見て、驚ろきのあまり、あつと叫いた。

「まあ、お前さんつたら、」さういふ聲と共に、女は村長に詰め寄つた。「すつかり耄けてしまつただね？　あたしを眞暗な納屋んなかへ突つこかしたりしてさ。その一つ目小僧のどたまにやあ、これんばかしでも腦味噌があつたのかい？　ほんとに鐵鉤に頭をぶつつけなかつたのが目つけものだよ。あたしだよつて、お前さんに言つたぢやないか？　この忌々しい熊つたら、鐵みたいな手で人をひつ掴んで突きたふすんだもの！　あの世へ行つて惡魔に思ひきり突つつかれるが好い！……」

この最後の捨科白をいひ放つた時、彼女はもう戸の外の、往來へ出てゐたが、それは自分の生理的な用事で外へ出て行つたのである。

「なるほど、これあ、お主ぢやつたわい！」と、村長は我れに返つて言つた。

「どうだね、助役さん、そのやくざ野郎は實に忌々しい惡黨ぢやねえか？」

「惡黨ですとも、村長さん！」

「もう好い加減に、あのおつちよこちよい共に、うんと一つお灸をすゑて、これからは仕事に身をいれるやうにしむける時分ぢやなからうかね？」

「ええ、もう疾つくにさうしなきやならなかつたのですよ、村長さん！」

「あの馬鹿者どもめが、增長しをつて……。はあて？　往來で義妹の聲がしたやうぢやが……。馬鹿者どもめ、つけあがりをつて、わしを同輩かなんぞのやうに思つてけつかるのぢや。このわしを奴らの仲間の、普通の哥薩克だとでも考へてけつかるのぢや！……」その言葉についで發せられた輕いしはぶきと、額越しにあたりへ投げられた一瞥とから、村長が今や、何か勿體らしい話を持ち出さうとしてゐることが豫測された。「一千……と、ええ、この面倒くさい年號と來た日にやあ、ぶち殺されたつて、すらすら言へるこつちやないが、さて……年に、時の代官レダーチに對して、哥薩克のうちから最も才幹ある者をひとり選び出せといふ命令が下つたのぢや。おお！（この「お

お』といつた時に村長は指を高くさしあげた）最も才幹ある者を！　女帝陛下の供奉のために擇べといふ命令なのぢや。わしはその時に……。」

「仰つしやるまでもありませんよ、村長さん！　それはもう誰でも知つとることです！　あなたが廷室の恩寵に浴されたといふ話なら、みんなが知つてをります。時に、手前の申し分が勝ちで、あの皮外套を裏がへしに著た暴れ者を捕へたなどと仰つしやつたのは、何かの間違ひだつたことはお認めになりませうな？」

「その裏がへしの皮外套を著た畜生といへば、ほかの奴らの見せしめに、足枷でも掛けて、思ひきり懲らしめてやることぢや！　官權の力がどんなものか思ひしらしてやることぢや！　そもそも村長たる者は皇帝からでなくて誰から任命されてゐると思ふとるのぢや？　あとで他の奴らも懲らしめて呉れよう。わしはちやんと憶えとる、あの碌でなしの暴れ者どもが、わしの野菜畠へ豚を追ひこんで、胡瓜やキャベツをさんざん食ひ荒させたことも、あの惡魔の悴どもが、わしのうちの麥搗きを拒んだことも、それから忘れもせぬが……。いや、そいつらのことは兎も角、わしはその、裏返しの皮外套を著た惡黨がいつたい何者か、是非ともそれを檢べなくちやあならんのぢや。」

「そいつは、よつぽどすばしつこい野郎だと見えるて！」と、以上の會話のあひだぢゆう、まるで攻城砲に煙硝を塡めでもするやうに、ひつきりなしに煙草の煙を頰に詰めこんでゐた蒸溜人が、

例の短かい煙管を口から離すなり、ぱつと煙の雲を吐き出してから、言つた。「そんな手合は萬一の場合に備へて酒倉のなかに繫いでおくのが先づ上分別だが、榮福燈の代りに樫の樹の天邊にひつ懸けておけば、申し分なしだて。」

蒸溜人にはこの駄洒落が、われながら上出來だつたと思はれたので、他人からの讃辭も待たずに、さつそく嗄がれた高笑ひをあげて、われから悅に入つたものである。

その時、一同は小さな、殆んど地面へ横倒しになりかかつてゐる小屋へと近づいた。一行の好奇心はいよいよ募つて、彼等は戸口へ犇々と押し寄せた。助役は鍵を取り出して、錠のあたりでガチャガチャ音を立ててゐたが、それは自分の家の長持の鍵だつた。一同はいよいよ我慢がならなくなつた。助役は衣嚢へ手を突つこんで鍵を捜しはじめたが、なかなかそれが見つからないのでぶつぶつと呟やいた。

「あつたあつた！」たうとう彼は半身をかしげて、縞の寬袴についてゐた大きな衣嚢の底から鍵を取り出しながら叫んだ。

その聲を聞くと同時に、一同の心臟はあたかも一つに融け合つてしまつたものの如く、その尨大な心臟がおそろしく不ぞろひな皷動を打ちはじめたため、錠前の外れる音も聞えぬくらゐであつた。つひに戸が開け放たれた、と……村長の顏は布のやうに蒼ざめてしまひ、蒸溜人はぎよつとし

て髪の毛が逆立つやうに感じた、助役の顔にもまざまざと恐怖の色が現はれ、村役人どもはその場に釘づけにされたやうに立ちすくんだまま、一様に開いた口を塞ぐことも出來ない爲體であつた——一同の面前には村長の義妹が立つてゐたのである。

女は一行にも劣らず仰天してゐたやうであるが、やや正氣にかへると共に、みんなの方へ近づかうとした。

「そこを動くな！」と、怪しく顫へを帶びた聲で喚きざま、村長はぴたりと女のまへに戸をたてた。「皆の衆、これあ惡魔ぢやよ！」と、彼は語をついだ。「火を持つて來い！　早く火を持つて來い！　公共の建物を惜しむこたあない！　さあ、火をかけるのぢや、惡魔の骨ひとつ殘らぬやうに燒きはらつてしまふのぢや！」

村長の義妹は、扉ごしにこの殘酷な決議を聞いて、怖ろしさのあまり、わつとばかりに聲をあげた。

「皆の衆、これあ又、どうしたことだね！」と、蒸溜人が口をはさんだ。「あたら頭べに霜をいただきながら、これしきのことを御存じないとは驚ろいた——妖女を燒くには普通の火では駄目だつてことをさ！　憑魔を燒くには是非とも、煙管の火を使はにやあなりませんやね、ちよつくらお待ちなせえ、萬事はこのわつしが引受けましたよ！」

さう言つて、煙管から煙草の煙を藁束のなかへはたき落すと共に、フウフウ吹きはじめた。切羽つまつた哀れな村長の義妹は、やつとその時、元氣を取り戻した。彼女は聲を振りしぼつて哀訴したり、その誤つた考へを棄てるやうにと歎願したりしはじめた。

「まあ待ちなされ、皆の衆！　何も、無駄な罪科を重ねるこたあねえでがせう？　ひよつとしたら、これあ惡魔ではないかも知れねえのに！」と、助役が言つた。「もし彼奴が、といふのはこの中に坐つとる奴のことですよ、そやつが十字を切ることを承知しさへすれば、それが惡魔でない明白な證據なんだから。」

この提案は取りあげられた。

「おらに憑くでねえぞ、惡魔！」さう、助役は戸の隙間に口をあてて言つた。「もし、その場から動かなかつたら、戸を開けてやらう。」

戸が開けられた。

「十字を切れ！」と村長は、まさかの時には逃げ延びられる安全な場所を捜すやうに、うしろを見まはしながら言つた。

村長の義妹は十字を切つた。

「はあて！　これは義妹に違ひないわい！」

「いつたいまた、どうして留置場などへ來なすつただね、お前さんは？」

そこで村長の義妹はしくしく泣きながら、往來で若者たちに無理やり捉まへられて、抵抗はしてみたけれど、無體にもこの小屋の窓から投げこまれて、窓に鎧扉を釘づけにされてしまつた顛末を話した。助役がちらと見ると、なるほど大きい鎧扉が蝶番から引つ剝がされて、うへの桁に釘づけにしてある。

「ふん、立派なことだよ、この一つ目入道つたら！」と、女は村長の方へ詰めよりながら、喚きたてた。村長はたじたじと後ずさりをしながらも、じつとその獨眼を見はつて女を眺めつづけた。

「お前さんの思惑はちやんと分つてゐるよ。お前さんはあたしがゐては氣儘に娘つ子の尻を追ひまはしたり、その白髮頭でこつそり馬鹿な眞似をすることが出來ないものだから、をりがあれば、わたしを厄介拂ひにしようしようと思つてゐたんだろ。ふん、お前さんが今夜、ハンナと何を話してゐたか、あたしが知らないとでも思つてゐるのかい？　ええ、ええ、あたしや何もかも知つてゐるんだよ。あたしをペテンに懸けるのぁ、お前さんみたいな頓馬でなくつたつて、ちよつくら難かしいんだからね。あたしやよくよく我慢をしてゐるんだけれども、後になつて焦れなさんなよ……。」

これだけは言ふと、女は拳を固めて打ちふりながら、丸太のやうに突つ立つてゐる村長を尻目にかけて、すばやくその場を立ち去つた。

（いんにや、これあてつきり惡魔のいたづらぢや。）さう考へながら、村長はやけに瞬天をかきむしつた。

「捉まへましたよ！」と、ちやうどそこへやつて來た村役人どもが叫んだ。

「どいつを捉まへたんだ？」と村長が訊ねた。

「裏がへしの皮外套を著た野郎でさ。」

「連れて來い！」村長はかう呶鳴つて、そこへ引つたてられて來た捕虜の手を掴んだが、「貴樣たちやあ氣でも狂つたのか？　これあ、醉つぱらひのカレーニクぢやねえか！」

「ちえつ、忌々しい！　たしかにあつしらの手で捉まへたのですがねえ、村長さん！」と村役人どもが答へた。「あん畜生ども、路地の奥に一と塊りになつて、踊つたり、人の袖を曳つぱつたり、舌を出したり、持ち物を引つたくつたりしやあがるんですよ……。へん、勝手にしやがれだ！……どうして野郎の代りにこんな鴉を掴まされたものか、とんと合點がゆかねえや！」

「このわしの權力と、全村民の權力をもつて命令するのぢや。」と、村長が言つた。「その盜賊めを即刻、逮捕しろ、また往來をうろつく奴らも殘らず、詮議のためにわしのところへ拘引するのぢやぞ！……」

「どうか、はあ、村長さま！」と村役人のうちの二三が平身低頭しながら歎願した。「あなたがあ

いつらの顔をひと目でも御覽なされたらなあ。ほんとに生まれてこの方、洗禮を受けてこの方、あんな氣味の惡い顔は見たことがありましねえだよ。今に飛んでもねえことになるめえものでもありませんよ、村長さま。あれを見ちやあ、女どもでなくつても一生おびえが癒らねえくらゐ、堅氣な人々を嚇かしをりますんで。」

「それほど怯えたけれあ、このわしが、怯えさせて呉れようか！　貴樣たちやあ、どうしたつちふのぢや？　命令に從はんちふのか？　貴樣たちやあ奴等の味方をするつてえのか？　謀叛人になつたちふのか？　どうしたちふんだ？……さあ、どうしたといふんだ？　貴樣たちも惡事を働らかうといふのか！……貴樣たちも……貴樣たちも……わしは代官に告發するぞ！　卽刻だ、いいか、卽刻だぞ！　さあ駈けて行け、鳥のやうに飛んで行け！　わしは貴樣たちを……。ええつ、貴樣たちあ、このわしに。」

一同は殘らず駈け去つた。

五　水死女

なんの不安もなく、また自分に追手がかかつてゐることなどは、てんで氣にもかけず、あの狼藉

のそもそもの發頭人は、くだんの古い館と池の方角へ悠々たるあしどりで近づいて行つた。それがレヴコーであることは改めて說明するまでもあるまい。彼は著てゐる黑い皮外套を前はだけにして、帽子は手に持つてゐた。汗がたらたらと玉をなして流れてゐた。楓の林は莊重に陰欝に黝み、月光を浴びてそそり立つた梢だけが細かい銀粉でも振りかけられたやうに見えてゐる。じつと動かぬ池は、疲れた步行者に爽々しい息吹をおくり、彼をその岸に憩はせた。すべてが森閑としてゐる。森の奧深い茂みのなかで一羽の小夜鳴鳥（ナイチンゲール）が啼いてゐるだけである。打ち克ちがたい睡魔がやがて彼の瞳をとざしはじめ、疲れきつた手足は今にも知覺を失つて、ぐんなり弛みさうになり、頭が前へこくりと落ちる……。〈いや、こいつは眠入つてしまひさうだぞ！〉さう言つて、彼はしやんと立ちあがると、やけに眼をこすつた。彼はあたりを見まはした。夜が彼の眼にひときは莊麗なものに映つた。一種不可思議な、うつとりさせられるやうな輝やきが、月の光りに加はつた。彼はこんな光景をこれまで一度も見たことがなかつた。銀いろの靄があたりにたちこめてゐた。花をつけた林檎の樹や、夜ひらく草花の匂ひが地上に隈なく充ち溢れてゐた。彼はおどろきの眼を見張つて、動かぬ池の水を眺めた——さかさまに影をうつした古い地主館は、水のなかにくつきりと、ある明快莊重な趣きを現はしてゐた。陰氣な鎧扉ではなしに、陽氣な硝子窓や戶口が顏を覗けてゐた。清らかな窓硝子ごしにピカピカと金色のいろがきらめいた。と、あたかも窓の一つが開いたやうな氣

配がした。じつと息を殺して、身動きもせずに池を見つめてゐると、いつか彼はその水底へ引きこまれてしまつたやうな想ひがする。と見れば、白い臂が忽に現はれて、ついで愛くるしい顏がのぞき、生々とした二つの眼を栗色の髪の波だつあひだから靜かに輝やかせながら、臂杖をついた。見ると彼女は微かに首を振り、手拍子を取りながら微笑んでゐる……。彼の胸は不意に鼓動しはじめた……。水が頰へだした。そして窓は再びとざされた。靜かに彼は池を離れて館に眼を移した。と、陰氣な鎧扉があけはなたれ、窓硝子は月光をうけて輝やいてゐる。(人の言ふことは信用にならぬものだ。)と彼は心のうちで思つた。(家は新らしいし、塗料だつて、まるでけふ塗つたばかりのやうに艶々してゐるぢやないか。ここには誰か住んでゐるんだよ。)そこで彼は無言のまま、傍ら近く歩みよつて見たが、家のなかはひつそり閑としてゐる。素晴らしい小夜鳴鳥の唄がはげしく、響き高く、相呼應してわきおこり、それが疲れと、ものうさに聲をひそめるかと思ふと、螽蟖の翅を擦る音や、鏡のやうな廣い水面を滑らかな嘴でうつ水禽の啼き聲が聞えてくる。レヴコーの胸には、ある甘い靜けさと平安が感じられた。彼はバンドゥーラの調子をあはせると、それを奏でながら歌ひ出した。

月々、お月さん！
夕燒さん！

お前の照らす地の上にや
綺麗な娘がゐるぞいな！

窓が靜かにあいた。そして、さつき池の水に映つたのと同じ顏がそこから覗いて、じつと注意ぶかく歌聲に聽き入る。長い睫毛がなかば彼女の眼を翳してゐる。その全身は布のやうに、月の光りのやうに蒼白いが、なんとあでやかに美しいことだらう！　女がほほゑんだ！……レヴコーはぶるつと顫へた。(唄つて下さいな、若い哥薩克さん、何か歌をひとつ！)と、彼女は一方へ頭べをかしげて、濃い睫毛をすつかり伏せて、小聲で囁やいた。

「どんな歌を唄ひませうね、美しいお孃様？」

涙の玉がその蒼白い顏をつたつて、ほろほろと流れおちた。(若衆さん、あたしの繼母を見つけて頂戴な！　には何か名狀しがたい感動的な響きがこもつてゐた。)若衆さん、あたしの繼母を見つけて頂戴な！　あたし、あなたになんだつて吝まずに差しあげますわ。きつと、お禮をしますわ。どつさり、いろんな立派なものをお禮に差しあげますわ！　あたし、絹糸で刺繍をした袖緊や、珊瑚や、頸飾をもつてますのよ。寶石を鏤めた帶をあなたにあげませうね。金貨もありますわ……。若衆さん、あたしの繼母を捜して頂戴な！　あたしの繼母は、怖ろしい妖女でしたの。あの女のために、あたし婆では安らかな思ひをすることが出來ませんでしたの。あの女はあたしを卑しい端女のやうにおひ

使ひましたのよ。この顔を見て頂戴、あのひとが惡魔の力であたしの顔の色ざしを奪ひ取つてしまひましたの。あたしの頸筋を見て頂戴、あのひとの鐵のやうな爪でひつかかれた青紫斑が洗つても消えないの！　あたしの白い足を見て頂戴、あたしは絨毯の上でないばかりか、燒石のうへや、濡れた土や、荊棘の道をひたむきに歩きまはつたの！　眼はといへば――見て頂戴――涙で曇つて、なんにも見えないの！　見つけて頂戴な、若衆さん、あたしの繼母を見つけて頂戴な！……）

その聲が急にうはずりかけたかと思ふと、彼女は口をつぐんでしまつた。涙がその蒼白い顔をつたつて流れおちた。憐憫と哀愁に充ちた重苦しい感情が、若者の胸もとへこみあげた。

「あなたのためなら、どんなことでもしますよ、お嬢様！」と、こころを動かされて彼が答へた。「でも、その女を何處で搜し出したらいいでせう？」

（そら御覽なさいな、あすこを御覽なさいな！）と口ばやに處女が言つた。（あの女はあすこにゐるのです！　あの岸のうへで、あたしの仲間の乙女たちと圓舞を踊りながら、お月様の光りでひなたぼつこをしてゐますの。けれどあの女は惡賢こくて狡いの。自分もやつぱり水死女の姿に化けてゐますのよ。でもあたし知つててよ、あの女がここにゐる氣配がちやんと分るのですもの。あの女のせゐで、あたし氣が滅入つて、ほんとに切ないの。あの女のゐる水のうへではお魚のやうに自由に泳げないの。鍵みたいに沈んで水底へ落つこちてしまふんですもの。あの女を見つけて頂戴な、

若衆さん！）

レヴコーは池の岸を眺めた。なよらかな銀いろの靄のなかで、鈴蘭の花の咲きみだれた牧場のやうに、白い下着をきた處女たちが、影のやうに輕やかに搖曳してゐる。黄金の頸飾や、南京玉の頸飾や、貨幣が彼女たちの頸でキラキラと光つた。しかし處女たちの顔は蒼白く、そのからだはまるで透明な霞で造られて、銀いろの月の光りに照り透されてゐるやうに見えた。圓舞はたゆたひながら、だんだん彼の身ぢかへ接近して來た。話し聲が聞えだした。

（さあさあ、鴉ごつこをしませうよ！）靜かな黄昏どきに、眼に見えぬ風の接吻に會つてさざめく河邊の芦のやうに、一同はざわめきだした。

（だれが鴉になるの？）

籤がひかれた――そして一人の處女が列をはなれた。レヴコーはその處女を仔細に觀察しはじめた。顔も着物も、すべて彼女は池の處女とおんなじだつた。ただその役割をいやいやつとめてゐることだけは明らかだつた。一同は長い列をなして、貪慾な敵の襲撃からすばやく身をかはしながら、あちらこちらへ逃げまはつた。

（ああ、あたし、もう鴉はいや！）疲れてがつかりして、その處女が言つた。（可哀さうなお母さん鳥の雛子をさらふなんて、むごいことよ！）

『あれは妖女ぢやあない』とレヴコーは心のうちで呟やいた。

(誰が鴉になつて?)

處女たちは又もや籤びきをしようとした。

(あたしが鴉になるわ!)と、一人の處女が申し出た。

レヴコーは注意ぶかくその處女の顏を眺めにかかつた。すばしこく、大膽に、その女は他の處女を追ひまはして、獲物を捕へようとして四方八方へ飛びついて行つた。この時レヴコーは、彼女のからだが他の處女のやうには透きとほつて見えないことに氣がついた。彼女のからだの中にはどこか黑ずんだところがあるのだつた。突然、叫び聲があがつた。鴉が列のなかの一人にをどりかかつて、それを捉まへたのだ。レヴコーはその女の爪が剝きだされて、兇惡な喜びの色が顏に輝やいたやうに思つた。

「妖女だ!」と、彼は急にその女を指さしながら、館の方を振りかへつて叫んだ。

令嬢はにつこり微笑つた。すると處女たちは叫び聲をあげながら、今まで鴉になつてゐた女をつれて、行つてしまつた。

(まあ、どうしてお禮をしたら好いでせうね、若い衆さん? あんたがお金なんか望んでゐないことは分つてゐますわ。あんたはハンナを想つてゐらつしやるのだけれど、むごいあなたのお父さ

んが結婚の邪魔をしてゐるのでしよ。でもこれからは邪魔をしなくつてよ。この手紙を持つて行つて、お父さんにお見せなさいな……。)

白い手がさしのべられると、その顏はいとも麗はしい光りを帶びて輝やきだした……。不思議な胸さわぎと、堪へがたい胸の動悸を覺えながら、彼はその手紙を受け取つた……と、そこで目が醒めた。

六 目醒めて

(おれはほんとに眠つてゐたのだらうか?)と、小さい丘から立ちあがりながら。レヴコーはひとりごちた。(まるで夢とは思へないくらゐ、まざまざとしてゐたつけなぁ!……不思議なことだ、まつたく不思議なことだ!)さう、彼はあたりを見まはしながら繰りかへした。彼の頭のうへにかかつてゐる月が、もう眞夜中だといふことを物語つてゐた。どこもかしこも森閑としてゐる。池の面からは冷氣が吹きわたり、その上には鎧扉を鎖したままの古い地主館がいたましげに聳え立ち、はびこるにまかせた靑苔や雜草は、すでに永の年月ここに人の住はぬことを物語つてゐる。ふと彼は、夢のあひだちゆう痙攣的に握り緊めてゐた片方の手を開くと同時に、あつと叫んだ。——事實

そこには手紙が摑まされてゐたのである。(ああ、おれに讀み書きが出來たらなあ！)と、彼はそれを眼の前であちこちひつくり返して見ながら、呟やいた。その刹那、彼のうしろで物音がした。

「怖がるこたあない、いきなり彼奴を引つつかまへちまへ！何をびくびくしとるんだ？　味方は多勢だぞ。確かにこいつは惡魔ではなくて人間だ！……」かう、村長が部下に向つて叫んだ。それと同時に、レヴコーは幾人もの腕にとり拉がれるのを覺えたが、中には恐怖のためにぶるぶる顫へてゐるのもあつた。「畜生め、その怖ろしい假面を脱ぎをれ！　人を愚弄するのも、もういい加減にしくされ！」彼の襟髪を摑んでかう言つた村長は、相手の顔に眼をそそぐと共に仰天してしまつた。「これあ、レヴコーだ！　わしの悴だ！」彼は驚ろきのあまり、たじたじと後ずさりをして、ぐつたり手を落しながら喚いた。「それぢやあ、貴様だつたのか、くたばりぞこなひめ！　この碌でなし野郎めが！　わしは又、どこの惡黨が皮外套を裏返へしになど著てゐるさをさらしをるかと思つたのに！　みんな汝の仕業なのぢやな、――生煮えの葛湯で汝の親爺が息をつめて斃つてしまやあええ！――往來で亂暴を働らいたり、碌でもない歌を作つて唄つたりしをつて……。えいえい、レヴコー汝れはな！　なんちふこつた？　おほかた、どしやう骨を叩き折つて貰ひたいのぢやらう！こいつをふん縛れ！」

「待つておくれ、お父つあん！　この手紙をあづかつて來たんだよ。」と、レヴコーが言つた。

「ええい、今は手紙どころの騒ぎぢやないわい。この馬鹿者めが！　さつさとこやつを縛つてしまへ！」

「お待ちなされ、村長さん！」と、その手紙を開きながら助役が言つた。「これあ、代官からの直筆ですぞ！」

「なに代官からの？」

「代官からの？」と、村役人たちも機械的に繰りかへした。

(なに代官からだつて？　こいつは變だぞ！　いよいよ分らなくなつたわい！)と心の中でレヴコーは考へた。

「讀んでみて下され、讀んでみて！」と村長が言つた。「何をいつたい、代官から言つてよこしたものか？」

「はあて、代官からいつたい何を言つてよこしたのか、拜聽するとしようか！」と、煙管を啣へて火を燈ちながら、蒸溜人が言つた。

助役は咳ばらひをしてから讀みはじめた。

(一つ、村長エヴトゥーフ・マコゴニェンコに對する命令のこと。本官の聞き及ぶところによれば老齢暗愚なる貴下は從來の滯納金を徵收もせず、村内の秩序に意を用ふることもなく、馴さへい

よいよ逆上して醜陋の限りを盡し……)

「はつて面妖な！」と、村長が遮ぎつた。「とんと良く聞えんが！」

助役は改めて初めから讀み直しにかかつた。

(「一つ、村長エヴトゥーフ・マコゴニェンコに對する命令のこと。本官の聞き及ぶところによれば、老齢暗愚なる……」)

「うんにや、よろしい！　そこは肝腎なところぢやないて！」と、村長が喚き出した。「尤もよくは聞き取れなかつたけれど、まだ、そこは本題ぢやない。先きを讀んで下され！」

(「扨、つぎに本官は貴下の子息レヴコー・マコゴニェンコに貴村の哥薩克娘ハンナ・ペトゥルイチェンコワなる者を即刻妻はすべきこと、同時に、國道筋の橋梁を修復し、且つ本官の許可なくしては、たとへ縣本金庫より直接出張の役人たりとも、村馬の提供無用のことを申し付く。萬一本官到着までに右命令の實行之無き時は、その責一に貴下にありと斷ずるものなり。代官、退職中尉コジマ・デルカッチ・ドゥリジュパノーフスキイ」)

「これはしたり！」と、村長は口あんぐりの體で言つた。「お聽きの通りぢや、すべて村長に責任ありとさ。さすれば服從せにやならんわい！　絶對に服從せにやならんわい！　さもなければ遺憾ながら……。で、貴樣にも」と、彼はレヴコーの方へ向きなほつて語をついだ。「代官からの命令と

あれば是非もない——尤も、どうしてそんなことが代官の耳に入つたのか、すこし訝しいけれど——結婚をさせてやることにする。ただ、それに先だつて貴樣は鞭の味を味ははにやならんぞ！　うちの聖像の下の壁に懸かつてをるやつを知つとるぢやらう？　明日あれの手入れをしてと……。

レヴコーはこの思ひもかけぬ局面の轉換に茫然としてゐたが。それでもさそくの氣轉で、どうしてその手紙が手に入つたかといふ有りのままの事實を隱して、別の答へを用意するだけの分別はあつた。

「昨日の夕方ね、」と彼は答へた。「市へ出かけたんで、すると代官が馬車から降りられるところへ、ひよつくり出つ會したんだよ。あつしがこの村の者だといふことが分つたと見えて、代官がその手紙をあつしにことづけたのさ。それからね、お父つあん、あの人は、歸りがけにうちへ寄つて食事をするから、さう言つておけつて言ひましたぜ。」

「しかと代官がさう言はれたのか？」

「ああ、たしかに。」

「お聽きかな？」と、村長は一同のものにむかつて、重々しく勿體ぶつた口調で言つた。「代官が一個人の資格をもつて、われわれ風情のところへ來臨される、即ちわしの家へ晝餐に立ち寄られる

のぢや。おお！……（ここで村長は指を高くさしあげると、何か傾聽するやうな風に首を傾げた。）代官が……、お聽きかな？　代官が、わしの家へ食事に立ち寄られるのぢや！　どう思はつしやる、助役さん、それからお前さんもさ、――こりやあ、なかなか並大抵の名譽ではないて！　な、さうぢやないかな？」

「まだ、これまでつひぞ私は、」と、助役がその口尻を捉まへた。「村長が代官に晝餐を饗應したといふ話は聞き及びませんぢやて。」

「村長にもよりけりさ！」と、さも自慢さうに彼は言つた。そのロが少しゆがんで一種の鈍重な、嗄がれた笑ひ、といふよりは寧ろ遠雷の響きに似た聲が、その唇から漏れた。「どうぢやちうな、助役さん、かういふ貴賓には各戸から、應分の進物をとどけさせることにしては、雛鶏なり、麻布なり、そのほか何か。……ね？……」

「それあ、さうしなくつちやなりませんよ、是非とも、村長さん！」

「それで、婚禮はいつにすふんで、お父つあん？」と、レヴコーが訊ねた。

「婚禮だと？　うん、その婚禮で貴様に思ひ知らせて呉れるのだけれど！……だが、まあ折角の貴賓の來臨に免じて我慢するとしよう……あす、坊さんを呼んで、貴様たちを結婚させてやる。えゝ、どうも仕方がないわい！　几帳面たあどんなものだか、ひとつ代官に見せて呉れるのぢや！

それはさて皆の衆、さあ、もう寢んで下され！　家へ歸つてよろしい！……今日のことにつけても想ひ出すわい、あのわしが……。」かう言ひながら、村長はいつもの癖で、容態ぶつた、意味深長な眼差を額ごしに投げた。

（〈そうら、また親爺め、女帝陛下のお供をした時の話をはじめをるぞ！〉かう、呟やきながらレヴコーは足ばやに、例の長の低い櫻樹にかこまれた、馴染の小家をめざして心も漫ろに急いでゐた。（氣立が優しくて、姿の美しい令嬢、どうかあんたに天國のお惠みがありますやうに！）と、彼は心のなかで祈つた。（あんたが永久に聖い天使たちのあひだで笑つて暮すことができますやうに！今夜の不思議な出來事は誰にも話すまい。ただハーリャ、お前だけに話してやらう。お前だけはおれの話を信じて、おれといつしよに、あの薄幸な水死女の魂の安息のために祈るだらうから！）やがて彼はくだんの小家へ近よつた。窓は開かれてゐた。月光は窓ごしに、彼の面前ですやすやと眠つてゐるハンナの顏を照らしてゐた。彼女は腕枕をして眠つてゐた。頰の色がほんのりと赧らんでゐた。唇がうごいて微かに彼の名を囁やいた。（おやすみ、おれの別嬪さん！　そして世界ぢゆうで一番幸福な夢を御覽！　だがどんな夢だつて、おれとお前の明日の目醒めに勝るやうな幸福な夢はなからうよ）彼は女にむかつて十字を切ると、窓を閉めて、こつそりそこを遠ざかつた。かくて數分の後には、村ぢゆうがすつかり眠りに落ちた。ただひとり月のみは相も變らず皓々として、豪華

なウクライナの果しなき沙漠のやうな空にいみじくも浮かんでゐる。同じやうに、莊重な息吹が天上にも聞かれ、夜が、神々しい夜が、嚴そかに更けて行く。妙なる銀の光りに包まれた地上もまた美しかつた。だが、最早それに見惚れる人の子は一人もなかつた。何もかもが深い睡りにおちてゐた。ただ時をり犬の遠吠えが束の間だけ沈默を破るのみで、醉ひしれたカレーニクはなほも自分の家をさがしながら、寢しづまつた往來を長いあひだうろつき廻つてゐた。

——一八二九年——

紛失した國書

（×××寺の役僧が語つた實話）

ぢやあ、もつとわしの祖父の話を聽かせろと仰つしやるんで？——よろしいとも、お伽になることなら、なんの、否むどころではありませんよ。ああ、何ごとも昔のこと、昔のこと！ 遠い遠い、年代や月日のほども睦とはわかりかねる大昔にこの世にあつた話を聽く時の、嬉しさ娛しさといつたら！ ましてやそれが、祖父とか曾祖父といつた自分の身内の者の登場してくる話でもあらうものなら、それこそ——自分が曾祖父の魂のなかへ潜りこむか、それとも曾祖父の靈が自分の中へ忍び入るかして、まるで自分自身に經驗したことのやうな思ひがされるものぢやて。それが嘘だつたら、大殉教者ワルワーラ尼の讃仰歌を唱へるとき、わしが窒息してしまふやうに手を振つて呪禁（まじない）つて下すつてもよい……。いや、わしには何より娘つ子や新造が苦手なんでしてな、あの手合に見つかつたが最期、『フォマ・グリゴーリエヰッチ！ フォマ・グリゴーリエヰッチ！ ようつて

ば！、なんか怖いお話をして下さいつたら？　ようつてば！　ようつてば！……」つてんで、ねだることと、ねだることと……。決して聽かせるのを吝むわけではないが、晩に寢床へ入つてからあの連中がいつたいどんなことになるかを考へて頂きたい。どれもこれも蒲團の下でまるで猪でもわづらつてをるかのやうにガタガタ震へて、まだその上に、自分の毛皮外套のたかへ頭を突つこみかねないことを、ちやんとわしは知つてゐるのぢや。鼠が壺をバリバリ引つ掻くとか、自身で火掻棒につまづくとかすると――さあ大變だ！　魂は踵のなかへ飛びこんでしまふのぢや。ところが、あくる日になると、もうけろりとして、又してもうるさく附き纏つて來る。そこでまた改めて何か怖ろしい話をして聽かせるより他に手はないといふことになるのぢや。それは扨て、あなた方にはどんな話をお聽かせしたものかな？　どうも、おいそれとは頭へ浮かんで來ませんぢやて……。おお、さうぢや、今は亡きわしの祖父が妖女（ウェーマ）と（阿房（ドゥフチャー））の勝負をやらかした話を一つ聽かせませう。ただし、前もつてお斷わりしておきますが、どうか中途で話の腰を折らないやうにお願ひいたしたい。でないと、とんでもない不味いものが出來あがつてしまひますからな。さて、亡きわしの祖父は、その頃の普通の哥薩克とは、てんで異つてをりました。彼はスラブ語の綴りから、正教會用語の略語標の置き方まで、ちやんと心得てゐたものぢや。祭日に使徒行傳でも讀ませようものなら、今どきのそんじよそこいらの祭司の息子などは裸足で逃げ出してしまふくらゐ。御承知の通りその頃と

いへば、バトゥーリンぢゆうから讀み書きの出來る手合をすつかり狩り集めて來たところで、帽子でと言ひたいところだが、なんの、片手で殘らず掬ひとつてしまふことが出來たくらゐなんでな。それだから、祖父に出あふと誰彼の別なく慇懃に挨拶をしたのも至極尤もな話ぢやて。

さて或る時のこと、大總帥（オゲートマン）が何事か國書をもつて女帝の闕下へ奏上しようと思ひ立つたのぢや。そこで當時の聯隊書記で――さあ困つたぞ、なんとかいふ名前ぢやつたて……ギスクリャークでもなし、モトゥーゾチカでもなし、ゴロブッェクでもなし……なんでも、そのしちむつかしい名前は、はなから變てこな音ではじまつてゐたことだけは知つてをるが――その聯隊書記が祖父を呼びつけて、大總帥から女帝陛下への國書捧呈の使者として、彼が任命されたことを傳達したのぢや。祖父は元來、支度に手間どることが大嫌ひぢやつたから、早速その上書を帽子の裏へ縫ひこんで、馬を曳つぱり出すと、女房とそれから、祖父自身の呼び方に從へば、二匹の仔豚――その中の一匹がかくいふやつがれの生みの親父であつた筈なのぢやが――に接吻しておいて、まるで五十人からの若者が往來の眞中で九柱戲（カーシャ）でもおつぱじめたかと思はれるやうな、おつそろしい土けぶりを蹴立てて出發したものぢや。で、翌る朝の、まだ四番鷄も唄はぬ未明に、祖父はもうコノトープ（*）へ差しかかつてをつた。ちやうどその時には定期市（ヤーマルカ）が立つてゐて、往來といふ往來には目も眩むほど人群（ムラ）りがしてゐたが、しかしまだ早朝のこととて、何れも地べたに寢はだかつて夢路を辿つてゐた。一

匹の牝牛のそばには鷲のやうに眞赤な鼻の、放埒な若者が寢そべつてゐた。そのむかうには、磁石や、藍玉や、散彈や、輪麵麭といつた品々を持つた女商人がグウグウ鼾をかいてゐた。馬車の下にはジプシイが横たはつてをり、魚を積んだ車のうへには車力が寢てゐた。帶や手套を持つた髭もぢやの大露西亞人が道の眞中に兩脚を投げ出してゐた……。どれもこれも定期市にはつきものの賤しい小商人どもばかりぢや。祖父はちよつと立ちどまつて、しげしげと眺めたものぢや。さうかうするうちに、天幕の中がおひおひざわつきだしてな、猶太人の女どもが水筒をガチャガチャいはせはじめ、そこここから煙の輪がたちのぼつて、溫たかい揚饅頭の匂ひが野營ぢゆうに漂ひ流れた。祖父はふと、燧鐵も煙草も用意をせずに出かけて來たことを思ひ出して、市場の中をぶらぶら歩き出した。ところが、ものの二十歩も進んだかと思ふと、ばつたりザポロージェ人に出會つた。放埒な遊び人であることはその顏を見れば一目で分る！　燃えるやうな緋の寬袴にジュパーンをまとひ、派手な花模樣の帶をしめて、腰には長劍と、踵までもとどく銅の鎖の先につけた煙管を吊つてゐる――てつきり、ザポロージェ人なのぢや！　ザポロージェ人といへば、實に素晴らしいもので　な！　立ちあがつてシャンと軀を伸ばすと、雄々しい口髭を捻つて、靴の踵鐵の音も勇ましく踊りだしたものぢや！　そのまた踊り方といつたら、兩脚がまるで、女の手に廻される紡錘そつくりで、旋風のやうな迅さでバンドゥーラの絃を搔き鳴らすかと思ふと、直ぐさまその手を腰につがへ

て、しやがみ踊りに移る、歌をうたふ――心もそぞろに浮き立つばかりぢや……ところが今ではもう時勢が變つて、さうしたザポロージェ人の姿も滅多には見られなくなつたが、それはさて、偶然に落ち合つた二人は、一と言二た言ことばを交はしただけで、もう十年の知己のやうに親しくなつてしまつたのぢや。次ぎつぎと矢鱈に話がはずんだものだから、祖父はすつかり自分の旅の用向きも忘れてしまつてな、二人は早速、大精進期前の婚禮そこのけの、飲めや唄への大酒宴をおつぱじめたものぢや。だが、たうとう終ひには、壺を叩きわつたり、人だかりの中へ錢をばら撒いたりすることにも、退屈をするのは當然で、それに定期市がいつまで立つてゐるものでもなし。そこで、この新らしい友達同士はさきざき別れ別れになることを惜んで、道中を共にすることにしたのぢや。彼等が相携へて野中の道にさしかかつたのは、もう遠に夕暮ちかい頃だつた。陽は沈んで、その代り空のところどころに赤味を帶びた夕映の條が輝やいてゐた。野づらには、ちやうど眉の黑い粹な新造が著る晴著の下着の縞柄みたいに、畠がつらなつてゐた。さて、件のザポロージェ人だが、これが恐ろしく口輕に喋りまくるので、祖父と、それからもうひとり同行に加はつてゐた呑み仲間とは、もしやこの男には惡魔が乘りうつつてゐるのではないかしらと怪しんだくらゐだつた。いつたい、どこで修業して來たものか、その話があまりにも珍妙なため、祖父は何度となく、可笑しさに腸のよれるのを、脇腹を押へてこらへなければならなかつた。だが、先へ進むに從つて野原がだん

だん暗くなると、それにつれて、この達者な饒舌家のはなしが、ひどく支離滅裂になつて來た。たうとうしまひにはすつかり口を噤んでしまつて、このわれわれの話し手は、ほんの些細な物音にも、妙にビクビクするやうになつた。

「おやおや、兄弟！　冗談でなしに瞼が重くなつたと見えるな。もうそろそろ我が家へ歸つて煖爐の上へ這ひあがりたくなつたのぢやらう！」

「あんた方には、何も包み匿しすることあない。」さういつて、不意にその男は振りかへりざま、二人の顏をじつと見つめたものだ。「實はわしの魂はとつくの昔に惡魔に賣りわたしてあるのぢやよ。」

「これは奇態なことを聞くもんぢや！　生涯に一度も、惡魔に關りあはんやうな者があるかしらん？　さういふ時にやあ、よく言ふやうに羽目をはづした底拔け騷ぎをするに限るのさ。」

「それがさ、御兩人！　羽目をはづして騷ぎもしようが、その、今夜が、惡魔と約束した期限なんでね！　ねえ、おい、兄弟！」と、彼は二人の手をたたいて言つた。「お願ひだ、どうかおいらを渡さないで呉れ！　今夜ひと晩だけ眠らないで、張り番をして呉れないか！　生涯、恩に著るだよ！」

どうして、そのやうな不仕合せな人間を助けずにおかれよう？　祖父は、萬に一つでも自分の基

督教徒としての魂を惡魔の鼻づらに嗅がせるやうなことがあつたなら、この腦天の房髮を斬り取られても文句はないと、きつぱり言ひ放つた。

哥薩克の一行はもつと先きへ進む筈であつたが、空が一面に黑い幕ででも蔽はれたやうな眞暗な夜となり、野原はまるで羊皮の外套でも頭からすつぽり被せられたやうな眞の闇に塞されてしまつた。やつと遠くの方に一つ小さな灯影がかすかに見え出すと、馬どもは畜舍の近づいたのを感づいてか、耳を立てて暗やみに眼を瞠りながら、道を急ぎだした。灯影が一行を迎へにこちらへ近づいて來るやうにさへ思はれた。やがて哥薩克たちの眼前に一軒の酒場が現はれたが、それはまるで、招ばれて行つた賑やかな洗禮祝ひから戻らうとしてゐる百姓女の恰好よろしく、今にも一方へ倒れさうになつてゐた。その時分の酒場と來ては、今どきのそれとは、てんで較べものにもなんにもなつたものぢやない。のうのうと手足を伸ばしたり、ゴルリッツアやゴパックを踊るなどといふ譯にいかなかつたのは勿論のこと、頭へ醉がのぼつて、足が自然に手習ひをしはじめても、横になつて休む場所もないといふ始末だつた。内庭は荷馬車が一杯で、立錐の餘地もなく、納屋のわきや、秣槽のなかや、玄關などには、からだをくの字型に曲げたり、ふんぞり返つたりした、いぎたない連中が、まるで蟒のやうな大鼾をかいてゐた。ひとり酒場の亭主だけは油燈の前で、荷馬車ひきどもが酒を何升何合飲み乾したかといふ目標を棒切れに刻みつけてゐた。祖父は三人前として二

升ばかり酒を注文して、納屋へ陣取つたものだ。三人は並んで、ごろりと横になつた。祖父がふと振りかへつて見ると、二人の仲間はもう死んだやうにぐつすり寐こんでゐる。祖父はいつしよに泊つた、くだんのもう一人の哥薩克を起して、さつきザポロージェ人と約束したことを思ひ出させた。その男は半身を起して眼を擦つただけで再び寐こんでしまつた。どうも仕方がない。一人きりで見張りをしなければならぬことになつた。どうにかして眠氣を拂ひのけようものと、祖父は荷馬車を片つぱしから殘らず見て廻つたり、馬のところへ行つて見たり、煙草を燻らしたりしてから、再びもとのところへ戻つて、仲間の傍らに坐りこんだ。あたりはしいんと靜まりかへつて、蠅の羽音ひとつ聞えぬ。ふと彼の眼には、すぐ隣りの荷馬車の蔭から何か灰色のものが角を出したやうに思はれた……。それと同時に、兩の眼がひとりでに細くなつて今にも閉ざされさうになる。それで彼はひつきりなしに、拳しで眼をこすつたり、飲みあましの火酒(ウオツカ)を眼にさしたりしなければならなかつた。しかし、少し眼がはつきりして來るとともに、變化の影は消え失せた。ところが、又しばらくすると、荷馬車の蔭から妖怪が姿を現はす……。祖父は根かぎり眼を瞠つてゐたが、呪はしい睡魔が、執念く彼の眼の前の物象(もの)を曇らせてしまつた。兩手のおぼえがなくなり、首ががつくり前へさがると、激しい睡氣に襲はれた彼は、まるで正體もなく、その場へぶつ倒れてしまつた。長いあひだ祖父はぐつすり寐込んでゐた。その坊主頭にじかじかと朝日が照りつけた時、彼はやつと正

氣づいて跳ね起きた。二度ばかり伸びをして、背筋をポリポリ掻きながら、ふと見れば、荷馬車の數が昨夜ほど多くは殘つてゐない、馬車ひき連中は夜明け前に發つてしまつたものと見える。我れに返つて、さて仲間はと見ると、くだんの哥薩克は傍らに寢てゐるが、ザポロージェ人の姿が見えぬ。問ひ糺して見ても誰ひとり知つてゐる者がない。ただその場に外套がひとつ殘つてゐるきりだ。祖父は恐怖と疑念に捉へられた。馬はどうかと、行つて見れば、自分の馬もザポロージェ人の馬もゐない！　これは一體どうしたことだらう！　なるほど、ザポロージェ人は惡魔の手に淩つて行かれたにしても、馬は一體どうしたといふのだらう？　とつおいつ思案にくれた果句、祖父はかういふ結論に達した——惡魔の奴はてつきり徒歩でやつて來をつたのにちがひない、ところが地獄までは決して近い道程ではないから、さてはおれの馬まで失敬してゆきをつたのだらう、と。彼は哥薩克の誓ひを守りおほせなかつたことが返すがへすも殘念だつた。(まあいいさ)と、彼は考へた。(どうも仕方がない、徒歩で出かけることにしよう。ひよつと途中で定期市がへりの博勞にでも出會つたら、また、なんとかして馬を買ふことぢや。)で、彼は帽子をかぶらうとしたが、その帽子が見當らぬ。考へて見ると、昨日あのザポロージェ人とちよつと帽子の取り換へつこをしたままになつてゐたのだ。祖父は、ぢだんだ踏んで口惜しがつた。何から何まで惡魔の手にしてやられてしまつたのだ！　ほいほい大總帥からの恩賞も水の泡だ！　女帝への上書が飛んでもないものの手に

渡つてしまつたのだ！　ここで祖父はくそみそに悪魔を罵つたから、さぞかし、悪魔の奴、地獄で何度も嚏めをしたことだらう。だが、いくら悪態をついてみたところで今更なんの役に立つ筈もなく、祖父が何べん項を掻いても好い分別は浮かばなかつた。はて、どうしたものだらう？　そこで結局、他人の智慧を借りることにした。ちやうどそのとき酒場にゐあはせた、堅氣な人たちや、馬車ひきや、ちよつと立ち寄つただけの客などを集めて、かくかくの次第でまことに困つたことが出來してしまつたと、一部始終を打ち明けた。馬車ひきどもは棒を頤杖について、しきりに首を傾げながら長いあひだ考へてゐたが、この基督教國で大總帥からの上書を悪魔がかつ浚つて行つたなどといふ面妖な話は、つひぞこれまで聞いたこともないと言つた。他の連中はまた、悪魔と大露西亞人にかつぱらはれたものは決して二度と再び手に戻ることがないとつけ加へた。ただひとり酒場の亭主だけは、なんにも言はずに部屋の隅に坐つてゐた。祖父はそこで亭主の方へ近寄つた。總じて人が口を噤んでゐるのは、いい分別を持つてゐる證據だ。ただ、この亭主はあまり口の輕い方でなかつたから、祖父が五留金貨を一つ衣嚢からつまみ出さなかつたものなら、彼はなんの得るところもなく、いつまでも亭主の前に棒だちに立ちつくしたに過ぎなかつただらう。

「それぢやあ、その上書をどうして見つけたものか、ひとつお前さんに教へて進ぜやんせう。」と亭主は、祖父を傍らへ呼んで言つた。祖父はほつと胸をなでおろした。「わつしは、一と目でお前さ

んが歴乎とした哥薩克で、決して意氣地なしでねえことを見抜きましたわい。そうら見なされ！この酒場からほんの僅かゆくと、道が右手へをれて森の中へ入つてをる。野原がうつすら暗くなる頃、支度をととのへて出かけなさるのぢや。あの森の中にはジプシイが住んでをつて、妖女が火搔棒に跨がつて空を翔けまはるやうな晩に限つて、巣窟から出てきて、鐵を煉つのぢや。だが、そのジプシイ共が實際どんな生業をしてをるのか、そんなことは知らなくともよい。森の中でやたらにトンカントンカンと音がする筈ぢやが、その音の聞えて來る方角へは行かぬことぢや。そのうちに燒け殘りの立木のそばを過ぎる小徑へひよつこり出るから、その小徑についてずんずん先きへゆきなされ……。さうすると、やたらに茨の棘がひつかかり出して、道は深い榛の叢みの中へはいるが、それでもかまはず、さきへさきへと行かつしやれ。すると小さな小川の緣へ出るだから、そこで初めて足をとめなさるのぢや。用のある相手にそこで會はつしやるぢやらう。それから衣嚢の中から、そもそも衣嚢といふものが作られてをる由緒いはれの本尊佛を取り出すことを忘れなさるなよ……。そのお寶といふやつを好くことには、悪魔も人間もとんと變りがないのぢやから。」これだけ言つておいて、酒場の亭主は帳場の中へ入つてしまふと、もうそれ以上は一と言も口をきかなかつた。

祖父は膽つ玉の小さい十把一絜げの人間ではなかつた。或る時など、狼に出喰はすと、いきなり

その尻尾を掴んで、生捕にしたものぢや。また哥薩克の群がる中を彼が拳しを振りまはしながら通ると、一同はまるで梨の實のやうに大地へ叩き伏せられてしまつたものぢや。とはいふものの、夜が更けて、いよいよその森の中へ足を踏みこんだ時には、さすがの祖父も肌寒い思ひがしたさうぢや。空には星影一つ見えなかつた。まるで酒窖の中のやうに眞暗で、物の文目も分らなかつた。ただ頭上はるかの梢を吹き渡る冷たい夜風の音が聞えるばかりで、樹々はあたかも醉ひしれた哥薩克の頭のやうに、だらしなく搖れながら、管を卷くやうな葉ずれの音を立ててゐる……。不意にぞつとするやうな寒けがして、祖父は思はず羊皮の外套を心に浮かべたさうぢやが、そのとき突然、まるで掛矢の百挺も打ちおろしたかと思はれるやうな凄い物音が森ぢゆうに響き渡つて、頭の中がガーンと鳴り出したほどぢやつたといふ。それと同時に一瞬、雷光のやうに森中がパッと照らし出されたのぢや。咽嗟に祖父は細い灌木のあひだを縫ふやうに走つてゐる小徑を見てとつた。それから燒け殘つた立木もあり、茨の叢もある！　聽かされたとほり寸分の違ひもない。なるほど酒場の亭主め嘘はつかなかつたわい。だが、刺のあるくさむらを押し分けて通り拔けるのは、なかなか樂な仕事ではなかつた。なんともはや、こんなに痛く手足をひつかく刺や枝といふものには生れて初めてお目にかかる次第で。殆んど一と足ごとに祖父は悲鳴をあげたものぢや。しかし先きへ進むにつれて、だんだんあたりがひらけ、木立が疎らになつて、これまで祖父が波蘭の彼方でも、つひぞ

見たことのないやうな、恐ろしくひろびろとしたところへ出た。木立のあひだから、まるで磨ぎすました鋼鐵のやうな、黑々とした小川の流れが見える。祖父はあたりを見まはしながら、しばらくその岸に立ちつくした。むかふ岸に火が燃えてゐる。それが今にも消えさうに見えるかと思ふと、またパッと燃えたつて、哥薩克の手に捉まへられた波蘭の貴族のやうにブルブル顫へてゐる川の波に反映するのだ。おや橋がある！（さあ、ここを渡るのは惡魔の乘つた二輪車より他にはあるまいて。）だが、祖父は大膽にも歩を進めた。そして、人が一服やらうとして嗅煙草入を取り出すのよりてつとり早く、むかふ岸へ渡つてゐた。見れば焚火をかこんでゐるのは一群の妖怪で、そのみつともいい御面相といつたら、これが他の場合だつたら、何を犧牲にしたつて、こんな化物とちかづきになるのは眞平だつたらう。しかし、今は是が非でもわたりをつけなくちやならない。そこで祖父は、妖怪どもに向つて馬鹿叮寧に腰をかがめて、『今晩は、皆の衆！』と挨拶をした。ところが、會釋ひとつ返す奴でもあらうことか、默りこくつて坐つたまま、何から怪しげなものを、しきりに火の中へふり撒いてばかりゐくさる。一つ空いてる場所があつたので、祖父は遠慮會釋なしにそこへ坐りこんだ。だが、その御面相の綺麗な妖怪どもは、依然として默りこくつてゐる。祖父も何ひとこと言はぬ。一同は長いあひだ、無言のままで坐りとほした。祖父はもうそろそろ退屈になつてしまつた。そこで衣囊をまさぐつて煙管を取り出しながら、あたりを一とわたり見まはしたが、どい

つ一匹こちらに注意をしてゐる奴もない。『さてなんぢや、皆の衆、甚だもつて申しかねることぢやが、その、いはばなんぢやて、(祖父は酸いも甘いも嚙みわけた苦勞人で、駄辯を弄してバツをあはせる術もよく心得てゐたので、たとへ皇帝の前へ出ても決して戸惑ひするやうなことは萬々なかつた)いはばその、甚だ勝手なことを申すやうぢやが、どうか惡く思はんで頂きたい——かうしてわしは煙管を持つてをるにはをるけれど、生憎と、これに、その、火をつけるべき物の持ちあはせがないのぢやが。』こんな風に持ちかけてみても、やはりなんの手應へもない。ただ醜面の一匹が、眞赤に火のついた、燃えさしの木切れを取りあげて、まともに祖父の眉間へ突きつけたので、もし彼が體をかはさなかつたものなら、恐らく永久に片方の眼玉におさらばを告げなければならなかつたこと、だらう。空しく時刻のうつるのを見て、つひに彼は、この惡魔の身内がこちらの言ひ分を聽き入れようが入れまいが、兎にも角にも用件を切り出すより他はなかつた。と、醜面の化物たちが耳を敲てて手をさしだした。祖父はその意を悟つて、持ちあはせの錢を殘らず掴み出して、犬にでも與れてやるやうに、それを一同のまんなかへ投げだした。彼が錢を投げ出すや否や、眼の前の化物どもはごつた返しに入り亂れ、大地がぐらぐらと搖れ動いて、てつきり、これは地獄へ陷ちてしまつたのではないかと思はれるくらゐ——祖父は語るべき言葉も知らなかつたほどである。(ほい、これあ叶はん!)けろけろとあたりを見まはしながら祖父は嘆聲をもらした。なんといふ妖怪どもだ

らう! どいつもこいつも見られた面ぢやない。おつそろしい數の妖女が、まるで降誕祭の頃に降る雪のやうにうじや、うじやうじやと集つて、それが定期市へ出かけた令嬢方そこのけに、デカデカと飾り立てて粧しこんでゐる。そして、そこにゐるほどの妖女といふ妖女が殘らず、醉つぱらつたやうな恰好で、珍妙な惡魔の踊りををどつてゐるのだ。その又、おつそろしく埃りを立てをることと言つたら! 一と目、その惡魔の身内どもが空高く宙を翔ける有樣を見たならば、洗禮を受けた基督教徒は思はず顏へあがつたことだらう。また、犬のやうな鼻面の惡魔どもが、獨逸人そつくりの細い脚で立つて、尻尾をくるくる振りまはしながら、ちやうど、若い衆が美しい娘にするやうに、妖女たちをとりまいてじやらついたり、樂師どもが太鼓を打つやうに、われとわが頰を打ち、角笛を吹くやうに鼻を鳴らしなどするのを見ては、すべてのおそろしさも打ち忘れてプッと噴飯さずにはゐられなかつた。祖父の姿を見つけると、そいつらが雜々とこちらへ押しよせて來るのだ。豚のやうな、犬のやうな、山羊のやうな、鶏のやうな、馬のやうな、樣々の鼻面が、いちどきにぬつと頸をのばして、祖父の顏をペロペロと舐めまはしたものだ。その穢ならしさに祖父はペッと唾を吐いた。だが結局、彼は一同につかまへられて、長さがコノトープからバトゥーリンまでの道程ほどもある大食卓にむかつて席につかせられた。(うん、これあまんざらでもないぞ。)祖父は、食卓のうへに並べられた豚肉や腸詰や、それから玉葱と一緒に微塵切りにした玉葱や、その他さまざま

の美味さうな御馳走を見ると、心ひそかに呟やいた。(なるほど、厭性の悪黨どもが精進を守るわけはあるまいて。)ところで御承知おき願はねばならぬことは、この祖父といふのがまた、至つて健啖家で、何かにのきらひなく、むしやむしや頬張る機會を逃す人ではなかつたことぢや。頗るつきの喰らひ拔けと來てゐたので、碌々はなしにも身を入れず、刻んだ豚脂の入つた鉢と燻豚とを引き寄せると、百姓が乾草を掻きよせる熊手とあまり大きさの違はないやうな肉叉をとりあげて、それでもつて一番重たさうな一と片を突き刺した。それに麵麭を一搖り取りそへて、やをら口へ持つていつたつもりだつたが、はて面妖な、それは自分の直ぐ脇にゐた奴の口へ入つてゐた。そしてすぐ耳もとで、どいつだか、ガツガツと、食卓ぢゆうに響きわたるやうな齒音を立てながら、口を動かしてゐるけはひが聞えるばかり。祖父の口へは何一つ入つちやゐない。そこで今度はまた別の片を取りあげたが、ちよつと唇に觸つたと思つただけで、自分の咽喉へは通らなかつた。三度目もやはり同じやうにわきへ外れてしまつた。赫つと腹を立てた祖父は、怖ろしさも、自分が何者の手中に落ちてゐるかも忘れて、妖女どもに喰つてかかつた。『いつたい全體、汝たちへロデの後裔どもめは、このおれを嘲弄してけつかるのか！　たつた今おれの哥薩克帽を返してよこせばよし、さもないと汝たちの豚面を項の方へ向けて捩ぢまげて呉れるぞ！』その言葉の終るのも待たずに、すべての妖怪どもは齒を剝き出して、祖父の魂がぞつと慄へあがつたほど、物凄い笑ひ聲をあげた。

「よどざんす！」と妖女の一人が金切聲で叫んだ。それは仲間のうちのどいつより、きたない面をしてゐたから、多分、一番年長のやつに違ひないと祖父は考へた。「帽子は返してあげるけれど、その前に妾たちと三度だけ《阿房》の手合せをしてからでなきや駄目だよ。」

さてなんとしたものだらう？　哥薩克ともある者が女つこどもの仲間へ入つて《阿房》をやるなんて！　祖父は飽くまで潔よしとしなかつたけれど、たうとうしまひに勝負をすることにきめた。そこで骨牌が持ち出されたが、それは、祭司の娘が未來の花聟を占ふ時ぐらゐにしか用ゐないやうな、手垢だらけの薄ぎたない札だつた。

「さあ、よろしいかね！」と、例の妖女が再び吠えるやうに言つた。「もしお前さんが一度でも勝負に勝てば、帽子はお前さんに返してあげるけれど、三度ともつづけて負けたら、お氣の毒だが帽子だけではなしに、お前さんの命もいつしよに、こちらへ貰ひますよ！」

「札を配りやあがれ、耄碌婆あめ！　なんとでも、なるやうになるのぢや。」

そこで骨牌が配られた。祖父は自分の札を手に取つたが——まつたく見るのも厭な、悪い手だ。まるで切札なんか一枚もなく、やつと並札の十が上々で、揃札ひとつないのに、妖女の方では後からあとから二二一ばかり揃へやがる。たうとう負けになつてしまつた！　祖父が負けといふことにきまると同時に、四方八方から馬のやうな、犬のやうな、豚のやうな、さまざまな鳴き聲で妖怪ど

もが（阿房、阿房、阿房！）とほざき立てた。

「ええつ、汝たち惡魔のみうちめ、とつとと消え失せやがればいいに！」指をあてて耳に蓋をしながら、祖父が嗾鳴つた。そして心の中で（さては妖女め、いかさまをしをつたな、ぢやあ今度はひとつ俺が配つてやらう）と考へた。そこで彼は牌を配つて、切札を宣告した。自分の牌を見ると、素晴らしい手で、切札もある。最初のうちはこのうへもない上々の首尾で勝負が進んだ。ところが妖女め、又もや王牌入の二二一をならべをつた！　祖父の手は切札ぞろひと來てゐる！　孫々思案もせずに、祖父は王牌の髭面に素早く切札を叩きつけた。

「おつと、どつこい！　それあ哥薩克らしくないやり方だよ！　いつたいお前さん、なにで切りなさるのぢや？」

「なにで切るとはなんぢや？　いはずと知れた、切札で切つたのぢや！」

「ひよつとしたら、お前さんがたの方ではそれが切札なのかもしれないが、妾たちの方では、さうぢやないんだよ！」

見れば、なるほど、それは普通の牌だ。奇態なこともあるものだ！　今度も負けになつてしまつた。そして妖怪どもは又しても聲を張りあげて（阿房！　阿房！）と喚き立てた。それがために卓子がガタビシ搖れて、骨牌の札が卓子の上で躍りあがつた。祖父は躍起になつて、いよいよ最後の、

三回目の札を配つた。勝負は再び順調に進んだ。妖女が又しても二二一を揃へた。祖父はそれを殺しておいて、堆牌から札を取ると、それがどれもこれも切札ばかりだ。「切札！」と叫んで彼は、その札が笊のやうに反りかへつたほど力まかせに卓子へ叩きつけた。相手は何にも言はず普通牌の八をその上へ重ねて置いた。

「いつたい何で殺さうてんだ、この古狸め？」

妖女は自分の置いた牌を取りあげた。と、その下にあるのは普通の六だつた。

「ちえつ、惡魔め、誤魔化しやあがつて！」さう言つて祖父は腹立ちまぎれに、拳を振りあげて、力まかせに卓子をたたきつけた。だが、まだしも仕合はせなことには、妖女の手が餘り香ばしくなくて、祖父の手に今度はお誂へむきな揃札が出來た。そこで堆牌から札をめくりにかかつたが、いやもう我慢も出來ないやうな、碌でもないものばかり起きてくるので、祖父はがつかりしてしまつた。ところが堆牌がすつかりになつてしまつた。彼は、もうかうなれば破れかぶれだとばかりに、六の普通牌を打つた。と、妖女がそれを受け取つた。

「おやおや！　これあ又、いつたいどうしたといふのぢや？　うへつ！　なんだかこれあ、少しをかしいぞ！」

そこで祖父は自分の牌をそつと卓子の下へ匿して十字を切つた。と、どうだらう、持牌は切札の

A牌に王牌に兵牌で、彼が前に打つたのは六ではなくて后牌だつたのだ。

「ええ、なるほどおれは馬鹿ぢやつたわい！　切札の王牌！　どうぢや！　取つたか？　猫の後裔め！　A牌はいらんか？　A牌！　兵牌！……」

物凄い雷霆が鳥りはためいた。妖女はぢだんだ踏んだ。すると、どこからともなく、まともに祖父の顏をめがけて帽子が飛んで來た。

「いんにや、これだけぢや足りないぞ！」と、俄かに活氣づいた祖父は、帽子をかぶりながら、喚いた。「おれの駿馬を即刻この場へ出しをればよし、さもなければおれは、たとへこの穢らはしい場所で雷に擊たれようとどうしようと、汝たちに對つてあらたかな十字架で十字を切らずには措かぬぞ！」

そして今にも彼が手をあげようとした時、不意にすさまじい物音がして、祖父の面前へ骸骨の馬が現はれた。

「そら、これがお前さんの馬だよ！」

それを見ると、哀れな祖父は、たわいない稚な子のやうに、おいおいと聲をあげて泣き出した。古馴染の愛馬に對する憐愍の情に堪へなかつたのぢや！『どんな馬でも一頭、手前たちの巣窟から選り出してくれえ！』惡魔が長い鞭を一と振りすると。電光石火の早技で一頭の馬が祖父を背に乘

せてパッと跳ねあがつた。同時に祖父は飛鳥のやうに上空へと舞ひあがつた。

だが、途中でその馬が、制する聲も手綱さばきも聽かばこそ、崩穴や沼地のうへを飛び越え跳ね越えする時には、祖父は生きた心地もなかつたといふ。到るところ、話に聞いただけでも、ぞつとするやうな難所ばかりを通つた。ふと、足もとを見ると、更に驚ろいた。そこは絶壁だ！　怖ろしい懸崖だ！　然も魔性の生物は一向お構ひなしに、まともに飛び下りるのだ。祖父はしつかり身を支へようとしたが、間にあはなかつた。彼のからだは木の株や土くれの上を翻筋斗うつて、まつさかさまに斷崖を轉げ落ちて行つた。そして谷底に達すると共に、いやといふほど地面へ叩きつけられたため、祖父はハタと息の根が停つてしまつたやうに思つた。少くともその刹那、自分がいつたいどうなつたのか、まるで記憶がなかつたといふ。やうやく正氣に返つてあたりを見まはした時には、もう夜が明けはなれてをり、あたりの樣子にどうやら見憶えがあるやうに思つたのも道理、祖父は他ならぬ我が家の屋の棟に投げ出されてゐたのぢや。

地面へ降り立つと、祖父は十字を切つた。なんといふ惡魔の所業ぢやらう！　飛んでもない、なんといふ不思議な目に遭つたことぢやらう！　兩の手を見れば、すつかり血だらけ、水を張つた桶を覗いて見れば、顏も同じやうに血だらけなのぢや。子供たちを吃驚させるでもないと思つて、丁寧に顏や手を洗つて、祖父はこつそり家のなかへ入つていつたが、見ると、こちらへ背を向けて後

すさりをしながら子供たちが、怖ろしさうにむかふを指さして『あれ！　あれ！　お母さんが、きちがひみたいに踊つてるよ！』といふ。なるほど、見れば、麻梳を前にして、紡錘を握つた女房が、ぼうつとして腰掛に坐つたまま、踊つてをるのぢや。祖父はそつとその手を摑んで、妻を揺りさました。『これ、今歸つたぞ！　お前どうかしやせんのかい？』祖父のつれあひは長いあひだ、眼を瞠つたまま、きよとんとしてゐたが、やつと良人の姿に氣がつくと、煖爐が家のなかぢゆうを歩きまはつて鋤や壺や盥を戸外へ追ひ出しただの……なんだのと、さつぱり辻褄のあはぬ夢を見てゐたのだと話した。『なあに、』と、祖父が言づた。『お前は夢に見ただけぢやが、おらは現つで酷い目に會つたわい。一度この家の戒ひをせにやなるまいが、今は愚圖々々しちやゐられんのぢや。』さう言つて、祖父はちよつと休んだだけで、馬の都合をつけると、今度こそ夜を日についで、決して道草などは食はずに、目的地へと直行して、國書を親しく女帝の闕下に捧呈したのぢや。宮中で目擊した様々の奇らしい事柄は、その後久しいあひだ、祖父の語り草となつた。彼が參内した御所の棟の高かつたことといへば、普通の家を十も上へ積みあげても、まだ足りないほどだつたこと、御座所はここかとうかがつたが違つてゐる、次の間かと思つたがそこでもない、三番目も四番目もまださうでなかつたが、やつと五番目の御間へとほると、金色燦然たる寶冠を戴き、眞新な鼠色の長上衣に赤い長靴を履かれた女帝が、御座所で黄金いろの煮團子を召しあがつておいでになつたこと、女

帝が侍臣に命じて帽子に入るだけの青紙幣を彼につかはされたこと等々……枚舉に暇もないくらゐ！　だが、自分が悪魔を相手に演じたくだんの一幕については、祖父はけろりと忘れてしまつて、もし誰かがその話を持ち出すやうなことがあつても、てんでそんなことには關係がないやうな顔をして、いつかな、口をあかなかつたので、その一部始終を話させるのは並大抵のことではなかつた。それはさて、そのことのあつた後、さつそく、家を祓ひ潔めなかつた神罰でもあらうか、毎年きまつて、その同じころになると、不思議なことに、つれあひが自然に踊りだすのぢやつた。何をしてゐても、むずむずと脚が勝手に動き出して、どうしても、すぐさま、しやがみ踊りをおつ始めずにはゐられないのぢやつた。

——一八三一年——

譯註

ミルゴロド　小露西亞ポルタワ縣下の小都會。ドニェープルの支流ホロール河の沿岸に位し、『ディカーニカ近郷夜話』に次いでゴーゴリが書いた著作集『ミルゴロド』は、この地名を採つて標題としたのである。

バラライカ　露西亞の農民間に愛用される樂器の一種で、共鳴胴の表面が三角形をなす、マンドリンに類似した三絃琴。指頭で絃を搔きならして感傷的な音色を出す。

キヲセリ　ジェリイか葛湯に似た一種の料理。

ポルタワ　南露ポルタワ縣の首都、ドニェープルの支流ウォルスクラ河の沿岸にあり、一七〇九年北方戰役に際し、小露西亞に攻め寄せた瑞典軍を彼得一世が擊破せしところ。

アルシン　露西亞の尺度――〇・七二米に當る。

カフターン　一般農民の用ゐる外套樣の長上衣。小露西亞人の用ゐるスキートカに對應するもの。

馬鹿握（ドゥーリャ）　拇指の頭を食指と中指の間から出して握つた拳、これを相手の面前へ突き出すことによつて侮蔑嘲弄を表はす。シーシュカともいふ。

ピローグ　パイに似た露西亞獨特の菓子。

ソロチンツイ　ポルタワ縣ミルゴロド郡下の町。ゴーゴリの生まれたところ。

竟袴（トロヴァールイ）　土耳古風の寬闊なズボンで、我が國の山袴、かるさんに類するもの。

プショール河　ドニェープルの一支流。

スキートカ　小露西亞人の用ゐる長上衣で、上から腰に帶を緊める。

コトゥリャレフスキイ　イワン・ペトッローギッチ（1769-1838）ゴーゴリ以前の小露西亞の代表的な作家小露西亞文學の一時期を劃せし人。

モスカーリ　小露西亞人が大露西亞人のことを侮蔑的によぶ呼稱。

ガデャーチ　ポルタワ縣下の同名の郡の首都で、プショール河に臨んだ小都會。

パムプーシェチキ　捏粉を煮た一種の食物。

トゥチェーニチキ　捏粉に肉を包んで油揚にしたもの。

チェルヲーネツ　彼得一世時代に制定された金貨の單位。

アルテモフスキイ・グラーク　ピョートル・ペトローギッチ（1791-1853）小露西亞の詩人。

ゴパック　ウクライナ農民の間に行はれる代表的な舞踏の一種。

イワン・クパーラ　異教時代より傳はる季節的祭禮で、六月下旬、夏至の日に當り、日輪を祠る太陽祭。

ザポロージェ人　ドニェープルの急流にある島嶼をザポロージェと言ひ、そこにカザック軍の本營（セーチ）があつたので、當時この本營附のカザックをザポロージェ人と呼んだのである。

ボドゥコーワ　土耳古人に殺されたモルダヰヤの太守の弟だと詐稱し、カザックを利用して一時モルダヰヤの王位に卽いがた、後ワルシャワで捕へられ、一五七八年に處刑された人。

ポルトラ・コジューハ　これは『皮衣一枚半』といふ意味の、如何にも小露西亞人らしい滑稽きはまる渾名であるが、果して實在の人物か假裝の人か不明なるも、恐らく波蘭に對するウクライナ開放運動に活躍せし英雄ならん。

サガイダーチヌイ（ピョートル・コナシェーヴィッチ）　一六〇六年よりザポロージェ・コザックの總帥となり、土耳古やクリミヤを攻めて勝利を得、波蘭王ウラヂスラフ四世の莫斯科進擊に味方した人。一六二二年歿。

妖女（ウェーヂマ）　惡魔に身をまかせて神通力を得た女、人間に害惡を加へると言ひ傳へられる迷信的な存在。

鷄の脚で立つた小舍　露西亞の昔噺に出て來る鬼婆の棲家は、森の中に鷄の脚で立つてをることになつてゐる。

緣飾（オクラード）　聖像の顏や手以外の部分を蔽ふ裝飾。

灌水刷（クロピール）　毛の長い、筆の形をした刷毛で、これに聖水を浸して人や物に撒りかける。

バンドゥーラ　ギターに似た四絃琴で、小露西亞獨特の樂器、我國の琵琶のやうに物語の吟詠の伴奏にも用ゐる。

百人長（ソート二フク）　カザックの百人隊の長官で、ほぼ中隊長に相當する。

クレメンチューグ　ポルタワ縣下の同名の郡の首都で、ドニェープルに臨んだ河港。穀類、木材の集散地。

ロムヌイ　ポルタワ縣下の同名の郡の首都、ドニェープルの支流スーラ河に臨み、煙草の產地として有名なところ。

阿房（ドウールニヤ）『馬鹿（ドウラチキー）』ともいふ、骨牌戲の一種。

バトゥーリン　チェルニゴフ縣コノトープ郡下の小都會で、往時、總帥（ヴェーマン）の居住したところ。

總帥（ゲトマン）　小露西亞カザック軍の最高の首領で、カザックの中から選ばれてその任に就いたもの。總帥選擧制は、一五九〇年に始まり、一七六四年にエカテリーナ二世に依つて禁止されるまで繼續した。

九柱戲（カーシヤ）　ホッケーまたはクロッケットに類する運動競技の一種。

コノトープ　チェルニゴフ縣コノトープ郡の首都。

ジュバーン　波蘭から傳はつた長上衣の一種で、ウクライナ人、殊にカザックの晴著として用ゐられたもの。

房髮（チューブ）　腦天に剃り殘した一つまみの房毛で、カザックの標章としたもの。

ゴルリッツア　小露西亞の代表的な舞踊の一種。

青紙幣（シーニフツア）　五留（ルーブリ）紙幣の異名

目次

はしがき……五
降誕祭の前夜……一一
怖ろしき復讐……一〇〇
イワン・フョードロヴッチ・シュポーニカとその叔母……一九九
呪禁のかかつた土地……二三九
譯註……二四五

ディカーニカ近郷夜話

後篇

蜜蜂飼ルードヴイ・パニコー
著はすところの物語集